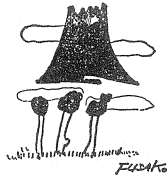


人物を中心とした

文化郷土史

—福岡県—

筑紫豊



*

福岡県は江戸時代、福岡・秋月・久留米・柳河・小倉の諸藩に分かれていたが、福岡藩は幕末・維新の際失敗し、小倉藩は譜代であったため長州の騎兵隊に敗退するなど、いわゆる薩・長・土・肥のめざましい活動にはなだしく立ち遅れた。しかし、玄界灘に面する筑前人の気風は豪放淡白であり、有明海に面する筑後人の気風は堅実穩健であり、響灘・周防灘に面する豊前人の気風は、両筑人の性格を兼ねているといえよう。

古来、三国ともに上国とされ、物産は豊かで文化の度が高い。したがって社会全般について細微に検討すれば人物・人材は多きに過ぎて取捨に苦しむ。いまは紙幅に限りがあって、わずかにその若干名を挙げて紹介するのである。いまや県下一円の郷土史は、資料としてほぼ備わった観がある。この種の人物誌の拙稿はすべてそれらの先学・先著の恩恵によるものである。ことを記して謝意を表する。

一 教育と識見

女医高場乱たかねばらんは、天保二年に博多瓦町に生まれた。生来男まさり、日常男装して刀を帯びていた。父の業を継いで眼科医となり、医師のかたわら儒学を亀井昭陽に学び、元陽・空華堂と号した。二十五歳のとき家塾を開き、人參畑にんじんばたけに移り、塾名を興志塾と称したが、家塾として評判となった。亀井の学風を伝えて士氣大いに振い、節義を尚もつとんだ。明治維新のバスに乗りおくれた旧福岡藩士の子弟中、

氣骨の士である箱田六輔・頭山満・進藤喜平太らは、いずれも乱の薫陶をうけて向陽社を興した。この向陽社が後の玄洋社である。乱は世人に「人參畑のババさん」と敬称され、その脈々たる慷慨の氣は幾多の志士豪傑に強い影響を与えた。明治二十四年六十一歳で病没した。

大森治豊は嘉永五年東京神田三河町に生まれ、明治十二年東京医科大学卒業、翌年福岡県立病院院長兼福岡医学校教授として来県、十八年池田陽一と共に妊婦に帝王切開術を施して一躍名声をあげた。欧州留学一年、帰朝して福岡病院長として外科を担当し、入神の伎倆と高潔な人格をもって衆望をあつめ、斯界の泰斗と称せられた。三十六年京都帝国大学の一分科として、福岡医科大学（九大医学部的前身）が設立されるや、初代の学長兼附属医院長に任ぜられ、四十二年病氣により退職するまで大いに画策するところがあり、現在の九州大学の基礎を築いた。明治四十五年（大正元年）没。六十一歳。

北九州の煤煙都市に、明治四十二年に独力をもって明治専門学校を開校したのは、その生涯を筑豊の炭坑事業に投入した松本健次郎であった。



松本健次郎

健次郎は明治三年に福岡市警固町の安川家に生まれた。二十四年アメリカのペンシルバニア大学に入学、財政経済学科を専攻し、二十六年帰国するや門司に安川松本商店を創設した。当時国策のしからし

めるところもあって、健次郎は明治炭坑株式会社経営をはじめ、大手の炭坑の統廃に活躍し、三十五年には赤池炭坑に鉱山学校を創立した。

また四十一年には明治鉱業株式会社を設立し副社長となり、ついで明治紡績合資会社を創立し、四十二年三十九歳にして明治専門学校を開校した。健次郎曰く「余は本業以外の勲産の全部を投じて、わが国最急の需要に応ずべく、科学的専門教育機関の設立を決行せり。明治専門学校はこれなり。これ一にはわが事業を既倒に救ひし天恵を報恩するの微衷に出でしもの、二には資力の余裕を存するは後進者怠慢の原因たるをおそれたるによる。余が子孫中、幸ひに教育に趣味を有する者あらば、一身を傾倒して明治専門学校の指導経営に任ずべし、然らざれば、よろしく我が一門に於て経営の方針に参予し、創立当時の目的を貫徹するを期すべし」と。健次郎の心の奥には、若い日に遠く学んだ慶応義塾の福沢諭吉への恩慕、あるいは森鷗外の「吾をして九州の富人たらしめば」によって啓発されたのであろう。彼は本業のほか、紡績・築港・電機・製銅・窯業その他の事業に関係し、昭和三十四年八十九歳で戸畑市から名誉市民の称号を贈られた。三十八年東京の自宅において病没。九十三歳であった。

二 発明と事業

「日本のエジソン」と称せられた田中久重は寛政十一年久留米城下に生まれたが、少年時代から発明工夫に凝り、家業のべっこう業を弟に譲った。「からくり儀右衛門」後の近江大掾の業績を模倣す

るに、久留米がすりの発明者井上傳女に倣う方法の機械化して伝え、郷土五穀神社の祭札に水機閥仕形の人形の舞踊を興行してみせ、諸国を周遊し、苦学と発明に没頭し、京都にあって手押ポンプ・須弥山儀・紡績機械を作り五十二歳にして万年自鳴鐘（時計）を発明製作した（文部省科学博物館蔵）。また、嘉永五年には洋式汽船のひな形を作って、「日本第一細工師」と称せられた。久重は広瀬元恭に蘭学を学び、大小の発明工夫に精進したが嘉永五年鍋島閑叟が佐賀藩精煉方を置くや、招かれて赴任し、大砲を鑄造し、蒸氣船を建造した。また電信機を製作し、機閥砲を発明し、元治元年からは郷里の久留米製造所長を兼務した。久重はまた、筑後川改修についても卓見を示したが、明治六年七十五歳にして、一家一門を率いて上京し、諸種の機械を製造し、工部省の命により生糸試験器・電信機の製作に成功し、ついで翌年には、モリス電信機・電信用時計仕掛のスクリーン・齒車製造機・絹巻銅線製造機の製作、考案に成功した。明治十一年政府は、久重の工場を買上げ、門人・職員全部を採用して、わが国における電信機械の自営策を実施に移した。これがすなわち通信省電信灯台用品製造所の起源である。久重は、明治十四年八十三歳で没したが、二代目田中儀右衛門による芝浦製所は今日の東京芝浦製作所の起源をなした。

牛島謹爾は元治元年現在の久留米市梅満町に生まれた。幼名は清吉。母の妙は勝氣で快活明朗、農婦に似けなく漢文を読み、百人一首の歌留多取りは拔群であったという。明治十四年十八歳で江崎興産の漢学塾に学び、ついで上京して二松学舎に入ったが、二十年東京高等商業学校の入試に失敗するや、翌年二十五歳でサンフランシ

スコに渡り、勤労のかたわら英語を勉強したが、やがて生涯を譽れに打ち込むことに決意した。謹爾は堂々たる体軀と頑健な肉体と強固な意志と底抜けの純情と至誠によって、幾度もの試行錯誤を天の試練として懸命の努力を積み、明治二十四年二十八歳にして、大河サクラメント河とサンオーキン河が合流してサンフランシスコ湾に注ぐあたりの広漠たる渾地帯の干拓に着手し、十八年間に、四万五千六百エーカー（一八、〇〇〇町歩）の美田を得、馬鈴薯や玉葱の倉庫は堤防上に棟を並べ、これらを運ぶ専属汽船の往来は壯観を呈した。そして着手当時八千位の人口をもつに過ぎなかったスタクトンは、一躍して十万人の人口を擁する都市となり、大学が設置され、やがて人口二十万の一大田園都市となった。しかし、大正十一年オレゴン州進出を企てて開拓に失敗し、加えるに第一次世界大戦後のパニックがせまって来たので、謹爾の事業は逐次困難の度を加えて行った。大正十四年彼は心機一転のために、一家をあげて、一時帰国しようと考えたが、その準備の調のつた十五年、商用のためロスアンゼルス市に赴いて発病、ハリウッド病院で急逝した。六十三歳。

三 絵画と彫刻

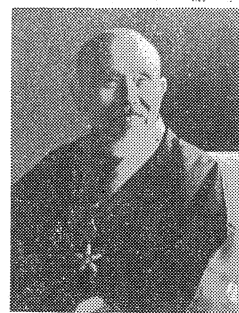
富田溪仙は、博多の素麺製造業で知られた富田久洲の五男として明治十二年に生まれた。少年時代すでに元墨田藩御用絵師について狩野派の手ほどきをうけ、十七歳京都に上り四条派を学び、第六回文展に「鵜船」が入選。横山大観の目にとまり、大正三年の再興院展に加わり、以来、院展を舞台に活躍した。溪仙は奈良・平安の仏

画を研究し、博多の名僧仙厓の画風に傾倒し、京都の画壇からは孤立的な野人として、奔放・飄逸の反面、優雅・丹念の画業を遺した。

洋画では、まず、明治十五年生まれの青木繁と坂本繁二郎がいる。ともに久留米藩士の子。繁は明治三十三年東京美術学校選科に入學、三十六年第八回白馬会に「黄泉比良坂」などを出品して賞をうけた。その後、「海の幸」（重要文化財）「わだつみのいるこの宮」（重要文化財）などの、わが古代神話に題材を求めて、浪漫性の豊かな画業により、実生活の不遇ななかであって、その天才を遺憾なく發揮したが、わずかに二十八歳にして病没した。繁二郎は、明治三十五年に小学校時代の同級生であった繁のすすめで上京し、小山正太郎の不同社に入った。繁二郎は文展から大正三年の二科会創立に参加し鑑査員となった。十年から滞仏四年、帰国後は久留米市および八女市に住み、放牧馬のほか能面やモーターなどの身辺静物を描き、無限の静寂のうちに個性的な作風を示した。昭和三十年文化勲章受章、四十四年八十七歳で没した。

古賀春江は、明治二十八年に同市寺町に生まれた。明治四十五年上京して太平洋洋画研究所に入り、大正二年日本水彩画研究所で石井柏亭に師事した。後、二科会の会友となり、鑑査に加わり、会員となった。大正末期から昭和初期にかけて、立体派風の作品やパウル・クレーの影響を受けた幻想的な作品を残したが、昭和五年頃から超現実主義風傾向に変わった。昭和八年二科会展出品作「サーカス」はその絶筆である。三十七歳で病没した。

児島善三郎は福岡市の紙問屋の出身である。明治四十五年修猷館



坂本 繁二郎

卒業後、大正二年上京して岡田三郎助に学んだ。病氣によって、帰郷、ふたたび上京して十年二科展に初入選をした。十三年渡仏。明治三年帰国して二科会友となり、五年には会員となったが、退会して独立美術協会の創立に参加し、以来、同会で活躍した。三十七年六十九歳で没した。中村研一は明治二十八年に北九州市小倉で生まれた。大正九年東京美術学校洋画家卒業。十二年から昭和三年まで滞仏。サロン・ドートンヌ会員となった。大正九年以来帝展に相ついで入選し、特選、帝国美術院賞などの栄光に輝き、官展界の重鎮となった。画風は明快な人物画が多く、晩年は陶芸品をも制作した。昭和四十二年七十二歳で没した。

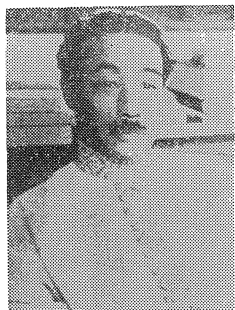
和田三造は明治十六年に兵庫県の生まれであるが、青年時代を福岡の修猷館で過した関係で、生涯郷土人的な身近感を持ちつづけていた。明治三十七年、東京美術学校西洋画科選科を卒業後、白馬会・文展に出品、四十年の文展「南風」で最高賞を受けた。滞欧七年、大正四年帰国後、官展の審査員、昭和二年帝国美術院会員、七年美術学校図案科教員、日展顧問等の要職についたが、十三年には日本標準色協会を設立して色彩研究に新分野を拓いた。三十三年文化功労者の表彰をうけた。四十二年八十四歳で没した。

近代における木彫会に一新正面を拓いた山崎朝雲は、慶応三年に

博多の古い瓦製造業家に生まれた。青年期に、福岡の仏師について彫技を修めた。二十七歳で京都に赴き、明治二十八年内国勸業展に「養老孝子」を出品して高村光雲に認められ、後、光雲に師事して、明治四十年には、岡倉天心を会長とする日本影刻会の創立に加わり、四十三年第四回文展以来、帝展・新文展・日展の審査員をつとめ、昭和二年以来帝国美術院会員・帝國技芸員・帝國芸術院会員となり、二十七年文化功労者に列せられた。晩年には、作風が次第に変化し、世俗に超然して、神像や仏像に精魂を傾けるにいたった。

四 創作と翻訳

ユーゴーのジャン・ヴァルジャンか、与志雄のジャン・ヴァルジャンかといわれるほどの名訳を出した豊島与志雄は、朝倉郡福田村で、明治二十三年に生まれた。修猷館に入學し、一年の席次二十四番、二年で五番、三年で三番、四年で二番、五年で首席となった。一高時代一級下に芥川竜之介・菊池寛・久米正雄・山本有三らがいた。彼は在学中から雑誌「新思潮」「新潮」「帝國文学」に創作を発表した。東大卒業後は海軍機関学校や東京・慶応・法政・明治の各大に文学を講じた。その間、仏文学の翻訳家として貢献し、異色の作家として知られるにいたった家庭的には不遇で、孤独であったが、大正の初期にレ・ミゼラブルを訳し、昭和二年にはその改訂の分が「世界文学全集」に収載され、不朽の名訳と称讃された。与志雄にはなお「ジャン・クリストフ」の名訳があり、童話作家としても独特の風格を大成した。昭和三十年病没。六十三歳。



北原 白秋

世界でも新風を起こした。また詩誌・歌誌を次々に主宰して後進を指導した。昭和十七年病没。五十二歳。柳川の旧家は、福岡県史跡に指定保存されている。

北原白秋（隆吉）は、明治十八年柳川沖ノ端の酒造業の旧家の長男として、母の里である熊本県南関外目で生まれた。十七歳で「文庫」に詩を投稿し、やがて明星派に加わり「思ひ出」などを発表して注目された。四十年、そのころ白秋は早稲田大学に在学中であったが、新詩社の与謝野鉄幹、木下幸太郎・吉井勇・平野万里とともに九州路を辿り、いわゆる「五足の靴」（紀行文）中の一人として、やがてわが文壇に「南蛮文学」の花を咲かせた。四十二年幸太郎らと「パンの会」を起こし、「スバル」「屋上庭園」を発表、処女詩集、「邪宗門」では、その官能的耽美的な詩情で声価を高めた。四十四年には「思ひ出」を、大正二年には歌集「桐の花」によって、フランス象徴詩の技法と日本的な伝統形式と風物とを融合させることに成功した。しかしこのころ人妻との恋愛問題で下獄したことなどが転機となり、あらたに東洋的な詩境を開拓し、大正三年には詩集「白金の独楽」を、十年には歌集「雲母」を発表した。晩年には眼病に苦しみながらも、なお一層この傾向を強くし、昭和十五年には歌集「黒檜」を世に出した。白秋は「からたちの花」や「城が島の雨」など、童謡・歌謡の世界でも新風を起こした。

五 音曲と演劇

梅津只圓は黒田藩喜多流の能楽師で、文化十四年に福岡城下の樂院中庄に生まれた。はじめ政之進・米と名乗ったが、藩主の命により梅津源藏利春と改名した。只圓は隠居後の号である。若くして至芸の域に達し、精勵して一家をなし、近世の名人と称せられた。当時、喜多院の宗家喜多六平太は若年であったので、囑せられてこれが補導役となり、六平太の大成に貢献するところが大きかった。明治四十三年、九十四歳で没した。

川上晋次郎は元治元年、博多の藍間屋の子に生まれた。はじめ、玄洋社に属していたが、やがて退いて、自由童子と称し、民権論を宣伝する書生芝居に転じ、「板垣退助遭難実記」を演じて以来、演劇界の革命児として数奇な運命をたどり、ついに新派劇の創始者となった。時世を風刺した「おっぺけー節」は、鉢巻・胸当て・陣羽織の異風の紛装とともに天下の耳目を驚かした。妻貞奴もまた、女優として令名があり、夫妻相携えて外遊すること前後四回。明治四十四年四十八歳で没した。

明治・大正期、比叡山に発した平曲は衰えたが、薩摩琵琶は、藩政時代から薩摩藩の国防的見地からする保護策に恵まれて盛行した。この薩摩琵琶の勇壮豪快な芸風に対して、あらたに幽艶悲傷の曲調と弾奏を特色とする筑前琵琶が大成され、一時天下を風靡するの颯を呈した。筑前においては、古来、玄清法流の盲僧琵琶があった。大隅・薩摩以外の全九州はもちろん、東部中国地方から西北部

みずから中央芸術劇場を作って社会主義演劇の実践をつづけ、三十四年村山知義らと東京芸術座を創立し、その指導者となった。映画にも多く出演し、ユニークな芸風で知られた。昨四十七年病没。七十三歳であった。

六 報道と志操

福岡日南、本名は誠。安政四年福岡藩格武士の家に生まれた。若くして司法省法律学校に学んだが、すでにそのころから文名があった。新聞「日本」や二六新聞等に執筆した。明治三十一年ヨーロッパに遊び、帰国後は九州日報社を主宰した。後、政界入りを志し、代議士となったが成功しなかった。歴史研究に専念し、赤穂義士の事蹟の顕彰につとめたが、その著「元禄快挙録」は現在においても名著と称することができる。「英雄論」「豊太閤とカイゼル」「大石内蔵之助」「日南集」(歌集)等著書が多い。

征矢野半弥は、小倉藩主小笠原家の功臣征矢野宗功の子孫という。安政四年築上郡下城井村に生まれた。半弥は幼時小倉の恩永館に学び、後、育徳館に転じ、ついで藩の選抜をうけて鍋島藩校に入ったが、まもなく江戸に赴いて林鶴梁の門に遊び、帰郷後は学政を振興し、特に力を地方育英に用いた。後、民選議院設立の議起るや天下に遊説し、十八年九州改進黨に投じ、二十一年自由党に入り、二十七年選ばれて衆議院議員となった。同年推されて福岡日々新聞社長となり、その椅子にあること二十余年、経営よろしきを得て声価大いに揚り、社礎を堅実にすることができた。現在の西日本新聞社はその後身である。二十二年伊藤博文の政友会に入り、衆議

四国地方にかけて、広く博多を中心とする民俗信仰的な音曲に伴う「くずれ」と称する滑稽物や物語りや節物があつた。しかるに、これらの盲僧琵琶は明治維新後政府の禁じるところとなり、心ある盲僧は、この機に臨んで奮起一番、旧来の弊風を革新し、純粹の芸能として発足すべく決意を新たにしていた。当時、市丸智定・高野田正・鶴崎賢定らは、名手の誉れのあつた人びとであるが、智定は薩摩に行つて節を屈してその奥義を学び、明治二十四年再度薩摩に入り、熊本・大分・島原・長崎・対馬の各地にも研究に赴き、さらに、平曲・楽琵琶・三味線の手法をも参考として曲節の改革に苦心し、盲僧が使用した笹琵琶を改善して新しい琵琶を作り、歌詞は葉石洞陽・今村外園・福岡日南らの新作を上演した。この新派の琵琶は、はじめ筑紫琵琶と称したが、後、筑前琵琶と呼び、金子堅太郎らの推挽によって、皇室をはじめ朝野の貴顕士女の間にも知られるにいたつた。智定は中央にあつて宗家を称し、橘旭翁と名乗り、門人に「旭」の字を与え、山号を授けてその芸風を振上げた。また女流琵琶師としては、吉田竹子があり、その門下に高峰筑風を出した。しかし、筑前琵琶は昭和初期から、洋楽器の流行とともに衰微し、戦後は、あまりにその歌詞が明治調的忠勇美談に過ぎたこともあって、ようやく世人に疎んじられるようになった。

薄田研二は明治三十一年福岡市に生まれた。本名高山徳右衛門。武者小路文学の影響をうけて劇界に入ったが、大正十四年築地小劇場に入り「どん底」「役の行者」で認められた。昭和四年土方与志らと新築地劇団を結成し、「西部戦線異状なし」「土」などに主演、戦時中は苦楽座を創立して活動し、戦後は東芸・新協を経て、

院議員に当選すること四回、大正元年五十六歳で病没した。半弥は軀幹長文、威容颯爽、性剛毅で廉正謹嚴、国士の風があり、議場に在るや、多く口を開かなかつたが、一度口を開けば、議論風発・理路整然、満場襟を正しくして謹聴したという。

菊竹六鼓は明治十三年に浮羽郡吉井町に生まれた。三歳のころ子守の不注意により左の脚を痛め、加療の効なく生涯不具であつた。三十六年早稲田大学英語政治科を卒業後、福岡日々新聞社に入社、四十四年征矢野に抜擢されて編集長となり、やがて主筆を経て昭和十年副社長に就任した。六鼓の名をここに録するのは、その五・一五事件の際に軍部の横暴を恐れず、堂々の筆陣を張つて正論を直言し、青年客気の徒の浅薄な思想行動をいましめるのに、切々の言論をもって世を警めた稀にみる人格と識見と勇氣とを称えんがためである。戦後、与えられた自由時代に、言論の百花と咲き競う現況も悪くはないが、昭和初頭のころ「百万人といえとも我ゆかん」の氣概を示した言論人は滅多になかつた。十二年病没。年五十八歳。

七 文官

末松謙澄は、京都郡神田村の出身で、早く同村の詩人にして教育家として令名のあつた村上弘山に学び、維新後上京して英学を修め、八年太政官御用掛となり、十二年渡英してケンブリッジ大学に学び、在学中に「源氏物語」を英訳して技芸士の学位を得て帰朝した。文部省・内務省に出仕し、二十一年に文学博士の学位を授けられた。第一次伊藤内閣では農商務大臣となり、二十三年国会開設の際は、福岡県から代議士に選ばれた。日清戦争後男爵を授けられ、

三十一年通信大臣に任ぜられ、政友会の創立をみるや総務委員となり、日露戦争の際には英国に駐在して宣戦の事情を各国に宣伝し、戦後子爵となり、また枢密顧問官に任じ、大正七年法学博士を授けられた。九年六十六歳で病没した。著書に「羅馬法典解説」「防長回天史」その他十数種がある。青評と号し詩を善くした。

林蘆は、嘉永三年江戸に生まれ、小倉の林洞海^{りんどうかい}の養子となった。早く横浜で外人に英語を学んだが、慶応二年十七歳で、幕命により中村敬宇・外山正一・菊池大麓らと英国に留学した。幕府瓦解後帰朝を命ぜられたが、榎本武揚の軍に投じて函館に脱走した。このころ、武揚は幕臣の「北地移住」についての論文を蘆に英訳させて英国公使に送ったが、パークスは一読して「脱走船中に英人顧問があるのではないか」といったという。函館の敗北当時、蘆は二十歳であった。明治四年神奈川県知事陸奥宗光に認められて出仕し、翌年、岩倉大使ら遣欧米使節の随員となった。帰朝後、工部大書記官・有栖川宮訪露の随員・太政官・通信局長・香川県知事・兵庫県知事・外務次官に歴任、日清戦役により外交の功によって男爵を授けられ、特命全権公使として清国に駐在した。また三十年には駐露公使、三十三年には駐英公使となり、日英同盟を締結して子爵となり、駐英大使に進んだ。三十九年外務大臣として日仏・日露・日韓の各協約を締結し、日露戦役後、日露通商条約の改訂および漁業条約を締結し伯爵となった。四十四年通信大臣兼臨時外務大臣となり、大正元年辞任翌年病没した。年六十四歳。蘆は、人となり温厚で公正、精敏で好学、英語に精熟し、かつ漢学に長じ詩を善くしたし、外交官としては円滑の才があつて、幕臣系から出た明治の外交



田中 弘

らの軍部抬頭期に、困難な外交責任者となり、十一年二・二六事件で岡田内閣総辞職後、総理大臣になつた。

倉富勇三郎は嘉永六年久留米藩の儒家に生まれた。明治十二年司法省法律学校

卒業後司法省に入り、累進して東京控訴院検事長となり、さらに朝鮮において、総督府法制局長官の要職を経て、大正三年貴族院議員に勅選され、やがて枢密顧問官となり、十四年には枢府議長となった。翌十五年帝室制度審査の功により男爵を授けられた。性謹慎、質素で法学に徹した学究肌の人であった。昭和九年退官、前官礼遇をうけ宮中杖を許された。退官後は郷里浮羽郡船越村に悠々自適し、禅的境涯のなかで揮毫を愉しんだ。二十三年病没。年九十六歳であった。

八 保守と革新

まず、野田卯太郎は嘉永六年三池郡岩田村の豆腐屋に生まれた。若いころから自由民権論者となり、明治三十一年衆議院議員に選ばれ、政友会に入った。大正二年東拓副総裁となり、七年通信大臣、十三年商工大臣となった。俳号をその巨軀そのままに大塊と称し、政事のかたわら俳句を善くし、俳画的なものを描き、禅味を帯び、談笑する酒脱なものがあつた。昭和二年没。年七十五歳。

官として屈指の人物であつた。

松室致は小倉藩士の出身、嘉永五年の出生である。明治十七年司法省法律学校を卒業、法曹界にあって累進し、長崎控訴院検事長・大審院検事総長等を歴任、大正元年司法大臣となった。三年帝室会計審査局長官となり、五年再度司法大臣となった。七年法学博士、貴族院議員、十三年枢密顧問官となり、昭和六年病没した。年八十歳。生前、法政大学学長として育英事業にも功績があつた。

金子堅太郎は嘉永六年福岡市に生まれた。明治四年旧藩主黒田長知に随つて渡米し、ハーバート大学で法律を学び、十一年に帰朝、十三年元老院権書記官として憲法取調べに従い、十七年から憲法起草の幕僚として伊藤博文の知遇を受け、常に博文と去就を共にし、明治憲法起草者の一人となった。昭和九年伯爵「経済策」その他の著がある。十七年病没、九十歳であつた。

栗野慎一郎は嘉永四年福岡城下荒戸町に生まれた。父は宝蔵院流槍術師範であつて、若年にして洋学を長崎に学び、明治七年旧藩主黒田家の留学生に選ばれて米国ハーバート大学に学び、十四年帰朝後直ちに外務省に入った。三十九年駐仏全権大使となり、その後一時通信省に転じたが、間もなく外務省に復帰し、爾来、わが国外交の機務のすべてに参画した。その功により、四十年男爵、四十五年子爵、昭和七年枢密顧問官に任じられた。十二年病没。年八十七歳。

田中弘毅は福岡市鍛冶町の石工の家に生まれた。幼名は丈太郎。東大卒業後、郷土の先輩山座円次郎にあこがれて外交官を志し、外務省に入った。昭和七年駐ソ大使を経て外務大臣となったが、折か



野田 卯太郎

堺利彦は明治三年に、京都郡豊津村に生まれた。号を枯川といい、別名を貝塚六ともいった。生家は代々小倉藩の家臣。明治十九年上京して翌年第一高等学校に入學。二十五年以来記者生活をなし、三十二年に「萬朝報」記者となった。三十六年日露の風雲急なるにあたり、非戦論主唱のため、幸徳秋水と共に「週刊平民新聞」を発行し、これから社会運動に従事し、入獄数回に及んだ。大正九年同志とともに

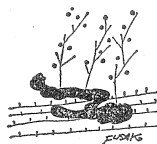
に社会主義同盟を創立し、十二年第一次日本共産党事件により入獄一年、昭和二年以後、無産党統一運動に与り、無産大衆党、日本大衆党に在籍した。五年東京市会議員に当選、六年労働大衆党顧問となった。昭和八年六十四歳で病没した。利彦はまさにわが国無産運動の長老ともいべく、豊津の旧邸地にはその顕彰碑があり、なお「堺利彦全集」六巻があることを附記しておく。

中野正剛は幼名を甚太郎といった。明治十九年福岡市西湊町に生まれ、三十六年に正剛と改名した。修猷館から早稲田大学に進み、政治経済学科を卒業後、新聞記者となったが、政治家たらんと志し、大正九年衆議院議員に初当選以来二十年余にわたって国政壇上で暮し、卓越した識見と雄弁とによって、生涯を不退転の反骨精神で生き抜いた。その日独伊同盟結成に急進し、米英撃滅を絶叫した正剛が、一転して大戦の終末を東條英機に逼り、昭和十八年十月二十七日午前零時、東京代々木本町の自宅で切腹自殺した行蔵は、国民の耳目を驚かすに足る重大ニュースであった。

緒方竹虎は正剛とは親友であった。竹虎は明治二十一年福岡藩士の家に生まれた。正剛と同様修猷館を経て、四十四年には早稲田大学政治経済科卒業、朝日新聞社に入り、やがて副社長になったが、昭和十九年に退社し政界に入った。時あたかも大戦末期、二十年八月十六日（敗戦翌日）東久邇内閣国務大臣兼情報局総裁兼内閣書記官長となり、困難をきわめた国事の処理に尽くした。二十七年郷土から衆議院議員に当選、吉田茂を助けて国務大臣・内閣官房長官・副総理等となり、二十九年自由党総裁に就任したが、三十一年心臓衰弱のため死去した。行年六十七歳。

松本治一郎は明治二十年福岡市馬出に生まれた。四十三年松本組を創立、土木建築事業によって社会に奉仕するとともに、部落解放運動の指導実践を通して官憲の弾圧に屈せず、差別の撤廃を唱えて人権斗争の先頭にたち、九州水平社委員長、全国水平社委員長、部落解放同盟中央委員長となった。昭和十一年から郷土から連続三回衆議院議員に当選、終戦を迎え、二十三年参議院議員に全国区で第四位当選、第一回国会において初代副議長になり、天皇に対する拝謁を拒否（所謂カニの横ばい事件）主権在民、民主主義の本道を身を以て実践した。同志と共に日中友好協会を創立、会長として善隣友好の国民外交の実を挙げ、また、世界平和評議会評議員として世界平和運動の推進につとめた。生涯を独身で通し、四十一年病没した。行年八十歳。

（福岡県文化財専門委員）



人物を中心とした

文化郷土史

— 佐賀県 —



杉谷 昭

(一) 風土と文化

佐賀県は九州という土地柄に在って、原始古代は開発が比較的進み、国家形成期以降も太宰府に近い中央勢力の或程度の進出がみられ、造寺・造仏を中心とする文化も普及した。中世となると在地土豪が割拠して戦乱が相次ぎ、西北部の松浦党は倭寇としての勢力を振るい、中央部の龍造寺氏が抬頭し、やがて島津・大友とならんで龍造寺隆信は「五州二島の大守」と誇称するようになった。

近世になって龍造寺氏のおとを鍋島氏が継いで平野部を領有し、松浦地方（唐津領）は寺沢氏が領有した。以後、関ヶ原の戦いで鍋島氏は西軍、寺沢氏は東軍に参加、鍋島氏は外様大名の大藩となり、唐津領は譜代大名が相次いで交替し小笠原氏にまで及んだ。

佐賀県は玄界灘に面する唐津地方と有明海に面する佐賀地方との地勢・風土のちがいがあって、このような歴史的背景の差異もあったことを注意しなければならない。

佐賀地方は古来、武士的気風が強いのに對して唐津地方は庶民的気風が盛んである。それとともに佐賀地方は固有性の強い文化を育て、唐津地方のそれは開放的な中央志向型の普遍性を有している。

これらの歴史的風土のなかから多くの人物を産みだしている。が、とくに地方文化に尽力した人々を中心に述べ、折にふれ中央において活躍した人々についても言及していくつもりである。

(二) 維新の胎動

幕末の佐賀藩は医学・理化学・工学など各部門においてめざまし

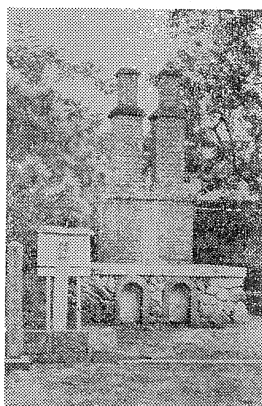
い成果を挙げていた。

福岡黒田藩とともに幕初以来長崎警備の任に当たっていたので、早くから蘭学研究に深い関心を寄せていた。藩が正式に蘭学導入にのりだしたのは天保年間、藩主鍋島直正が医学寮に蘭学寮を設け火術方において西洋火術の研究を始めるようになってからである。

蓮池支藩の島本良順（龍嘯）は寛政年間から長崎で蘭学を学び蘭学医となり、天保五年には本藩の医学寮の学監となった。その弟子の伊東玄朴は文政年間、長崎でシーボルトに学び江戸で開業、天保二年から佐賀藩にもどり、蘭医では最初の一代侍として召しかかれ、同じく島本門下の大石良英、大庭雪齋などもシーボルトに学び、佐賀藩の蘭方医学の系統を形式していった。島本が侍医を務めた蓮池藩主鍋島直正も有名な蘭癖大名で、大砲鑄造をし、高島秋帆の門人であった長崎の洋学者山本晴海を砲術師範として召抱えている。また佐賀藩国老（家老）で武雄領主の鍋島茂義（十左衛門）も長崎で蘭医方を修めてきた家臣中村涼庵を起用して天保八、日本で最初の種痘を試みさせ、さらに家臣の平山醇左衛門も高島秋帆のもとに入門させ、のち茂義みずからも秋帆に直伝をうけ砲術のみならず白砲の鑄造を行った。

これら医学の伝統は、安政五年、佐賀城下水が江町に移された医学寮好生館に受け継がれ、現在の県立病院好生館となっている。

弘化元年に設けられた火術方について嘉永五年には精鍊方が設けられ、軍事工業の研究がすすめられた。嘉永三年ごろは伊豆菰山の江川太郎左衛門（英龍）のもとに砲術などの指導を仰いでいた佐賀藩であったが、嘉永六年には反射炉を完成させたばかりでなく鉄製大



昭和16年肥前史談会が
建てた反射炉跡の模型
(現・日新小学校内)

砲の鑄造にも成功し、幕末による大砲の鑄造も引き受けるようになっていた。安

政二年、江川英龍の没後、その子英敏の願いによって菰山反射炉完成のため、安政四年には佐賀藩の蘭学者杉谷雅介らと数名の職人を菰山に派遣し翌安政五年、完成へと導いた。精鍊方では蒸気船や機関車の模型試作なども行った。これらの機械工業の技術は、残念ながら維新後にそのまま引き継がれず、わずかに真崎照郷の鉄工所、野口建造の佐賀機械製作所、谷口清八の鉄工所などの設立をみたが、直接、精鍊方のおとをうけた青木熊吉らの精鍊社は単にガラス製品を生産する工場であり、大規模な発展はみられなかった。安政二年以後、長崎海軍伝習所は派遣された佐賀藩士四十八名のなかには佐野常民・島内栄之助・石黒寛次・福谷啓吉などがいたが、万延元年の遣米使節団には、これら島内・福谷ら佐賀藩士六名が参加、文久二年の遣欧使節には右の石黒のほか砲術方の岡鹿之助、佐賀藩医川崎道民の三名が参加して帰国後、医学研究の必要を説き、長崎に佐賀藩の英学校致遠館を設け米人フルベッキを招いた。大隈重信・副島種臣らもここで学んだ。

慶応三年には幕府のすすめで佐賀藩はパリの万国博覧会に佐野常民を派遣したが、佐賀・唐津両藩士のほかに商人として野中元右衛門・深川長右衛門なども随行させた。このころヨーロッパに派遣されていた藩士石丸虎五郎は帰国後にイギリスのグラバー商社と提携して高島炭坑開発に成功し、馬渡八郎にヨーロッパにおける陶磁器の好みを有田の陶工や商人に伝え、佐賀藩の国際的意識の高かったことを示している。

(三) 文明開化

県下における新聞のはじめは、明治二年三月佐賀柳町の原口保平、白山町の榎屋壮助らが発行した「肥前藩日誌」である。木版刷りの小型のもので同年七月に「佐嘉藩日誌」と改題したが七号で廃刊になった。ついで明治五年十一月、佐賀柳町の川崎道民が「佐賀県新聞」を発刊したが長くは続かなかった。川崎については前節でも述べたが、杵島郡須古の出身で蘭方医として文久の遣欧使節に参加したり、フランス製の写真機で藩主鍋島直大を撮影した文化人であった。その後、長崎県に合併されていた佐賀県が再置運動を展開する明治十五年ごろから新聞の必要性がみとめられ、明治十六年佐賀県が設置されたのも明治十七年に「佐賀新聞」の発刊をみた。社長は江副靖臣、副社長は石丸勝一、編集人は児玉公藏などであった。発行当時は一部一銭八厘、一か月三十八銭であったが、米が一・五キロ（一升）六銭の時代でありかなりの高額であった。翌十八年九月には「新聞紙条例」によって発行停止をうけたりした。明治十九年には「肥筑日報」が武富時敏によって発刊され、「佐賀新聞」と

対抗した。「肥筑日報」はのちに、明治二十七年「西肥日報」と改題した。

明治三十三年ごろから三十六年二月まで川原茂輔らによって「佐賀日日新聞」が発刊され、明治四十一年十一月、福地嘉八によって「佐賀日日新聞」が発行された。これは大正六年に「肥前日日新聞」と改題、同八年二月にはまた旧名に復したが大正十二年ごろ「福岡日日新聞」に吸収された。

大正元年七月二十二日には社長岡崎慶一、副社長菊地徳治郎によって「佐賀毎日新聞」が創刊をみた。大正十一年には「西肥日報」と合同、大正十五年九月二十八日、福岡の「九州日报社」の支局となった。

大正十四年には「佐賀民衆新聞」が岸川岩次郎によって、大正十五年五月二十日には「農村青年新聞」が中尾都昭によって発刊された。後者はのちに「佐賀自由新聞」、「佐賀自由青年新聞」、「佐賀毎夕新聞」などと変遷し、昭和十三年十二月「佐賀新聞」を吸収して同紙名に改め、昭和十六年に「佐賀合同新聞」となり、現在の「佐賀新聞」に至っている。

明治初年より今日にいたるまで地方紙がその地域社会に及ぼした文化的な功績は大きい。明治期の政党紙に比して大正期の終わりからスタートした「佐賀民衆新聞」、「農村青年新聞」などの果たした役割は特に重要であった。

新聞とともに地方文化に資したものに雑誌がある。いずれも大正末年から発行されているが、江口文吉による「肥前評論」、肥前史談会による「肥前史談」がある。昭和三年には鍋島嘉六による「佐

嘉新報」、同四年には甲斐久男による「佐賀郷友」、同七年には菊地徳治郎による民政党系雑誌「佐賀時論」などが発刊をみた。なかでも「肥前史談」、「佐賀郷友」は多くのすぐれた論文が掲載され、人々に強い影響を与えた。佐賀県の言論は以上のように活発であった。

明治八年八月二十七日第四大区（小城郡）の士族、千々岩哲六・藍田範介・松田正久・牟田義高、平民の香月則之ら二十名が連名で県令代理、参事野村維章に宛て「自明社」の結社願を出している。その社議によると、「民権主張」ということは国民一般の幸福であり人権を無視するところに圧制や国民の不幸の原因がある」とし、政府の良否は国民の権利意識の有無によって定まるので立法権を人民に還したいが国民の学識が浅いので権利意識もない、そこで自明社をつくり、啓蒙し漸進的に運動を進めていく、というのである。社則によれば入社は自由で選挙によって役員を選び社長以下役員の任期は三か月で重任を認めていない。会議所を無量寺に定めていたが、この寺の住職山崎明晟も佐賀の乱で官軍に抗した人物であり、反乱士族は政界、教育界に進出していった。自明社は政府が認めなかったが、発起人の松田正久・牟田義高などは後に県会議員として活躍した。

明治元年五月、ドイツ人技師ゴットフリート・ワグネル（Gottfried Wagner）は上海の米國ルッセル商会から長崎における石鹼製造所設立の技術的指導を頼まれ長崎に來た。彼は偶然、佐嘉商会を訪れ、佐賀藩の有田磁器製法について知り、その製法が非科学的なことを指摘した。そのことが契機となって明治三年、佐賀藩に化学者

として招かれ、有田焼の改良研究に従事したが廃藩置県とともに解職された。

ワグネルは彩料の製法、すなわちコバルト青、クローム鉄、全臘脂などを教え、呉須顔料のような高価な輸入品を使わずコバルトに硬度の白土を混和して焼けば便利なことを説き、石炭窯を築いて試作をした。彼から学んだ人々に、手塚五平・山口代次郎・深見墨之助・辻勝蔵・平林兼助・山口勇蔵・西山孫一らがいた。

明治十四年、中野致明は第一回全国農談会に出席した。農談会は農事改良に熱心な人々が集まって研究討議する自主的団体であった。第二回の同会には飛松忠四郎・山本源三らが出席している。この第一回全国農談会を機に、県内各郡にも続々と農談会（談農会・勸業談話会）が開催されるようになったが、明治十四、十五年ごろの日誌によると、そこで討議された内容は、養蚕奨励・螟虫対策・米作り・肥料対策・茶園造成・製紙改良・新技術導入・融資問題など農業全般にわたり、商品経済の発展に対処しようとする農民の意欲がよくあらわれている。中野致明は肥料貸付、産米改良、販売などを目的として佐賀米改良会社を設立した。

佐賀県における養蚕業のはじめは明治五年、倉永又辰が旧城内に七反歩の土地をもって刈桑栽培を試み蚕種を製造したことに始まり、明治七年、旧藩主鍋島直大の出資による厚生會が創設され、群馬県前橋に伝習生を派遣して製糸技術を導入、県の援助も受け、県下の蚕糸業の中心となった。倉永又辰の事業も厚生會支配人、原口良輔・中野致明らの事業も士族授産を目的としたもので、他に授産社と称する干拓事業も明治十五年から二十年にかけて行われた。

(四) 教育の新興

学制頒布後も私塾・私立学校の占めた位置は重要であった。

鹿島の谷口藍田も鹿島藩の藩校弘文館（のち鑛造館）の教官であったが、明治四年から家塾を開いた。同八年には鹿島義塾が創設され塾長となり、翌九年私塾を開いたが、明治九年から変則中学校と改められ、明治十二年、鹿島中学校設立によって、それでも教鞭をとった。明治二十九年以降は東京四谷・新宿に藍田書院を開き門下生三千人といわれた。

明治十一年十月、家永恭種・徳久恒範・村地正治・古賀良三らは「戊寅義学」を創立、教官には武富時敏・樽井藤吉などがおり、江藤新作・的野半助・加藤十四郎などが学んだ。木原隆忠の木原塾などをはじめ、これらの塾は一種の政治学校の性格をもっていて、佐賀の乱の反乱軍に参加した経歴をもった者たちが多く集まっていた。

唐津で有名だったのは薩藩直前のつくられた英語学校（洋学寮医学舎・耐恒寮）であった。アメリカから帰国したばかりの旧仙台藩士、東太郎（高橋是清）が月給百円という高給で招かれ、約一年半教鞭をとったが、教師も生徒も意気盛んで、勉学にはげみ、のちの工学博士・辰野金吾や経済学博士・天野爲之などの人材を養成した。

佐賀県における師範教育が本格的にはじまったのは明治十六年、長崎県から佐賀県が分離独立した翌年、明治十七年七月一日の佐賀師範学校創立においてであった。初代校長には原口元照（元佐賀中

学校長）、第二代には花房重治が就任した。どちらも佐賀変則中学校の教師を歴任しており佐賀の乱では反乱軍として活躍した人物であった。師範教育は、明治十三年の改正教育令によって各府県に師範学校の設置が義務づけられた。しかしその反面、従来は文部省から公立師範学校に対して補助金が配付されていたが、この改正教育令以後、小学補助金と同様うち切られてしまった。

明治十九年の師範学校令によって佐賀県尋常師範学校と名称が変わり、明治二十年一月に文部大臣森有礼が教育視察に際し佐賀に立ち寄り「旧藩時代からの教育振興の伝統を受け継ぎ、規律ある校風と学業・訓練が行きとどいている」と称讃した。

中学校は明治十年代に整備された。明治九年一月、藩校弘道館から佐賀変則中学校、四月に鹿島義塾から鹿島変則中学校、十月に唐津の志道館の流れをくむ唐津津中学校がそれぞれ設立された。こうして十二年までに佐賀・唐津・鹿島・轟木・神埼・小城・武雄・有田などの県立中学校ができたが、教育令制定以後、教育費の地方負担が増加したので十七年には佐賀中学校だけに整理された。唐津・鹿島・小城・武雄の四校は町村立中学校に、他の三校は上等小学校に格下げとなったが、大正期には佐賀・小城・鹿島・唐津の四校が県立中学校となった。

義務教育の推移について、明治十六年当時の『鎮西日報』によると、小学校五九校、教員二二四人、学令人員一万七、七〇〇人で、うち就学しているものが七、七〇〇人、就学率は四三％であった。全国平均より七％ほど低かった。当時は地方財政の苦しい時期であり、明治十九年十月には佐賀県訓令として、町村費による小学校補

助金を制限するほどであり、県費による町村教育補助費は十九年から二十五年まで全廃する有様であった。したがって授業料負担が増加し就学率は低下していった。明治二十三、四年には教員俸給も減額された。

結局これらの問題は三十三年の「小学校教育費国庫補助法」によって義務教育四か年が無料となり、しだいに解決されていった。佐賀県の小学校の就学率は二十五年に五五・五％であったものが、三十三年には六八％、三十七年には九八％とのびて、大正以後は九九％以上となっていた。

明治十年代には「戊寅義学」、「千城学校」などの私塾があったが、私立学校として整備されたものは、明治二十三年四月、柳原一女（のち豊増姓）が会長であった「婦人矯會」が「実習女学校」を設立、裁縫・習字・手芸・国漢などを教えたのが最初であった。二十九年には大隈重信の後援もあって豊増一女により「佐賀女学校」が設立され、三十四年に「私立成美女学校」となった。同年の県立佐賀女学校も設立をみている。なお豊増一女は三十九年六月、「佐賀婦人会幼稚園」も開設した。また中島ヤスは明治三十年佐賀郡鍋島村に裁縫教授所を開いたが、三十七年佐賀市に移転、大正年間に「佐賀裁縫女学校」を創設した。内田清一は明治四十四年四月「実科女学校」を創設、大正年間に「清和高等女学校」と改称した。宗教関係の学校としては明治十一年四月、佐賀市高木町願正寺（真宗）内に創立された「振風教校」のあとをうけ、明治三十四年、当時は「西肥仏教中学校」といっていた同校を同寺住職熊谷広剡校長を中心に本派本願寺第五仏教中学として設置する運動が起こ

り、福岡県と設置争いの結果三十六年佐賀に第五仏教中学が設立された。やがて文部省の認定をうけ、明治四十一年四月、「龍谷中学校」と改めた。明治期の女子教育の先覚者は全国的にみても、多く指導的な女性教育家であった。

明治二十七年七月二十五日文部省令第十九号「簡易農学校」規定により「県立佐賀簡易農学校」が佐賀市多布施に設立され、同年六月十六日文部省令「尋常中学校実科規定」により唐津の「大成学校」を実科中学校と改め県費で助成することにした。明治三十年代になって簡易農学校が改組され、工業学校も新設され、「県立佐賀工業学校」は有田に分校を設けた。また商業会議所が中心となり四十年代になって佐賀市立商業学校も誕生した。明治四十年代になると師範学校をはじめ小・中学校、実業学校など県下の学校は一応整備された。大正も末年のころ、ドルトン・プランによる新教育運動が佐賀県にも及び、沢柳政太郎の系統を汲む前山琢磨訓導は武雄市橋小学校において名校長山口良吾のもとに「分団式動的教育」を実践して大きな成果を収めた。前山琢磨は第二次大戦後の新制中学校においても学校長として活躍し、戦後の新教育の中心となり、小城郡多久市の教育長、県の社会教育委員などを歴任、学制九十周年記念行事において文部大臣表彰を受けて健在である。当時佐賀市高等小学校（田中清三訓導）、武雄市東川登小学校（諸石勝喜訓導）、佐賀郡久保町思斉小学校、藤津郡鹿島小学校などでも新教育が実践されていた。

第一次世界大戦を機に大正七年財団法人佐賀育英会が生まれ、人材養成に拍車をかけた。佐賀県育英会も大正期後半には教育互助会

まで設け、研究活動とともに相互扶助の組織をもつようになった。地域社会の教育熱はたかまり、農科大学と旧制高等学校の設置の請願運動をすすめ、大正九年には佐賀高等学校が全国で第十五番目に誕生、公共図書館の設立などによる社会教育もすすみ、教育と文化の水準は一段と向上した。

(五) 産業の開発

玉島村(現浜玉町)の「みかん」の歴史は江戸中期にさかのぼることができ、明治中期にみかん栽培を奨励し今日の盛業の基礎をなしたのは井山憲太郎・脇山文太郎・稲毛竹次らであった。明治二十五年からはじめて、二十九年には約三十町歩のみかん園を造成、六、七〇〇円余の収入を挙げ農家の副業として農村振興に資するところがあった。明治末年には一時低迷したが昭和になって再興した。

「嬉野茶」の改良に当たっては井手与四太郎・高柳嘉一らによつてすすめられ、従来の中国製法に宇治製茶法を取り入れ明治三十年代に「嬉野茶」の声価をもたらしこととなった。

明治十七年六月、納富良右衛門はその遠祖に当たる納富由助が「名尾紙」を創始した功績によつて農商務卿西郷従道及び佐賀県令鎌田景弼から賞金を与えられた。佐賀郡大和町大字松梅の名尾部落は山に囲まれた寒村で、当時は生計のなかばは「名尾紙」に依存している状態で全戸数の大半に及ぶ百戸余りが製紙業に従事していた。

また徳川権七は明治三十七年背振村村長にえらばれ、国有林三、〇〇〇町歩の払下げと五十か年継続植林の構想をうちだし、金村戸

主会で承認をうけ、三十八年と四十五年に国有林の払下げに成功、三十八年から植林に着手した。徳川は植林事業のみでなく製茶・養蚕・果樹・畜産など山村振興につとめ大正十三年十一月、六十九歳で没した。

揚水灌漑が佐賀県で最初に機械化されたのは明治二十八年のこと、東松浦郡久里村上久里(現唐津市)において地主長谷川敬一郎によつて九州ではじめて成功した。彼は蒸気機関を用い、七十一町の水田に灌漑することに成功した。その後、轟木村(現鳥栖市)の地主八坂甚八や北茂安村の向井雄一らによつて筑後川流域においても明治三十年代から四十年にかけて機械灌漑がすすめられた。四十二年には広瀬石男らによつて小城郡芦刈村でも行われ、大正期には電気灌漑や、石油発動機によるバーチカルポンプも普及しはじめた。

明治三十四年多くの納所の梶原治太郎は枇杷の苗を淡路島から導入し、挽地久吾らの若い後継者たちと共に栽植した。長崎県の茂木枇杷も導入して品種の改良につとめ、大正期には「納所枇杷」の声価を高め、大正十二年梶原治太郎・挽地久吾・江口幸太郎らによつて「出荷組合」を結成、京都の商人北井秀次郎と結んで関西方面へも進出させた。

玄海漁業が、明治中期以降に発展をみたのは唐津魚合資会社・唐津水産合資会社・呼子水産会社などによるところが多いが、伊藤福太郎・林万治郎・宗留蔵などが漁業振興に尽力したことにも注目すべきである。

(六) 社会の進展

明治三十三年頃から背振村広滝は水力発電所の最適地として東京帝国大学教授中野初子(県出身)を初め京都帝国大学のゲーリック(ドイツ人)など各地の経験者、学者によつて踏査されていた。中でも御厨袈裟一(久保田町出身)は詳細な設計書を東大の卒業論文として提出したほどである。この時に当たり、牟田万次郎(鹿島市出身)は城原川の水利権を獲得して、三十六年十二月二日、石丸勝一、中野致明と共に佐賀市会議事堂に市内の有志を集め、池田大阪電気会社技師から電気理論およびその経済性について講習を聞かせた。くだつて、同三十九年十一月、電力電燈を供給し、これに要する機械器具の販売賃金を目的として、佐賀市商業会議所内に広滝水力電気株式会社は誕生した。取締役中野致明、牟田万次郎、深川文十、伊丹弥太郎、下村辰右衛門。資本金三十万円であった。工事着工は四十年七月、江口貞風、中野熊助、松尾清一の三名が六万、一、八七円で落札した。四十一年十月に約五、〇〇〇灯、六〇〇馬力を対象として送電が開始され、県民の生活文化の向上に恩恵を与えた。四十三年九月広滝水力電気の所有する城原川水利権と古湯発電所を基点とする川上川水利権を継承して、九州電気株式会社が創立された。役員には松永安左衛門・福沢桃介らの中央財界人が加わり、地元の中野致明が社長、伊丹弥太郎が専務取締役選任された。九州電気株式会社は、これより先に唐津電灯会社、四十四年一月に武雄電力の事業を買収し、明治末年には水力発電一、七〇〇キロワット、火力発電二二〇キロワットを有し電燈の電力供給もその

範囲が拡大された。

明治初期の文明開化の所産ともいふべき人力車や馬車にとつてかわった交通機関が馬車鉄道であった。草場猪之吉他数名が代表となつて満島馬車鉄道会社を設立し、浜崎・満島間の虹の松原に馬鉄を通したのが明治三十三年六月であつて県内における馬鉄のはじまりであった。翌年には松浦橋を買収し、三十六年には松浦橋・材木町を経て大口まで延長された。四十四年には、唐津軌道会社と改称され石油発動機を採用して路線も西唐津まで延長された。明治三十七年になると佐賀と鹿島に馬鉄が出現したが、ともに東京の新橋・品川間に使用されていたのを払下げてもらつて活用した。佐賀馬鉄の初代社長には、百六銀行取締役の福田慶四郎、鹿島の祐徳馬鉄の社長には井原喜代太郎が選ばれた。

(七) 学術・文芸

明治期における佐賀出身の芸術家・洋画家としては、まず百武兼行が明治七年に鍋島直大に從つてイギリスに渡り絵画を学び、明治十三年直大がイタリア公使になると兼行は書記官として同行し画業にはげみ、帰国後、農商務商工局次長に任命された。しかし明治二十年四十五歳で没した。百武につづいては、黒田清輝の盟友であつた久米桂一郎がでた。久米は明治十九年渡仏して勉強、黒田とともに「白馬会」を主催し、同じく佐賀の小代爲重も百武に学び白馬会に参加した。岡田三郎助も百武・久米らにつづいて大正・昭和期まで洋画壇の確立につくした。岡田もフランスで学び久米と同じく東京美術学校で教鞭をとった。明治の代表的な書家は中林梧竹と副島



中林梧竹

種臣である。中林は小城出身ではじめ江戸で学び長崎で中国人に書法を学び中国にも二回遊学した。副島は佐賀藩士で維新後の政界で活躍、多くの名品を残した近代書家中の代表的人物である。

今泉蟬守は文政元年佐賀に生まれ明治三十一年二月八十一歳で没したが、その間、私塾を開き子弟に国学・和歌を教え、そのかたわら典繙・歌集を集め、纂撰していった。鍋島本・支藩関係のひびと約六〇〇人の歌、およそ九、〇〇〇首を「樟葉三十六歌仙」「樟葉十家歌集」「西肥女房百歌撰」「類題白縫集」などとしてまとめた。佐賀大学名誉教授中原勇夫は最近『今泉蟬守歌文集』として集大成した。

文学者としては明治詩壇に活躍し近代象徴詩を完成した杵島郡白石町出身の蒲原有明がいる。明治三十五年「草わかば」同三十八年「春鳥集」同四十一年「有明集」を発表した。

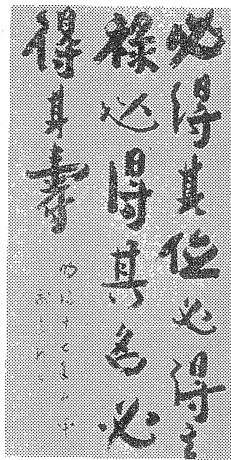
建築家としては、東京駅的设计など有名な辰野金吾が唐津からでている。辰野は明治六年工部寮に入學、のちにヨーロッパ留學後、東大教授・総長を歴任して明治三十五年退官、その後、建築事務所を創設、東京駅のほか旧日本銀行をはじめ多くのすぐれた建築物を残した。曾祢達蔵も唐津出身で辰野と前後して東大助教授・海軍技師などを経て建築事務所を経営、我が国建築學界の元老として

知られた。

小城出身の中野初子^{はつこ}は明治十四年東大卒業後、工部省、文部省に出任、同十九年東大助教授、同二十一年米國に留學、コーネル大学において電氣工學を研究し米國の學位をとり、のち三十二年工學博士、さらに英國をはじめヨーロッパの電氣事情を視察し、歸國後、東大教授となった。大正六年二月、五十六歳で没した。

多久出身の志田林三郎は商家に生まれ、多久の東原庵舎に学び、藩費で東京に遊學、明治十三年、グラスゴー大学に二年間留學、歸國後東大教授となった。同十八年には無線通信關係の諸機械を発見し、同二十年には通信省工務局次長と東大教授を兼ね、のち工務局長に進んだ。明治二十五年、三十八歳で没した。

天野爲之は安政六年佐賀藩士天野松庵の子として生まれ、明治八年上京して開成學校に学び同十五年東大卒業、小野梓・高田早苗らと協力した大隈重信をたすけ、東京專門學校（早稲田大学）の創設に尽力し講師となった。同三十二年法學博士、早稲田大学教授、同商科學長などを歴任、のち東洋經濟新報を主宰した。著書に『經濟

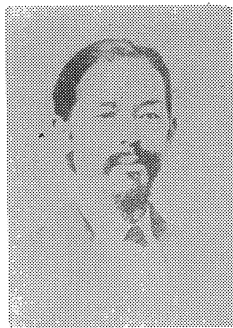


副島種臣の書

原論・『經濟綱要』などがある。林毅陸は東松浦郡入野村の出身で、明治二十八年慶応

義塾大学文科を卒業、翌年講師となり、三十四年ヨーロッパに留學、パリの政治學校で外交史を修めた。四十三年慶應義塾の政治主任となり、我が国の外交史の開拓者といわれた。明治四十五年以降、政界に進出、衆議院議員当選四回、大正八年、パリ平和會議の日本委員、同十年ワシントン軍縮會議全權委員隨員なども務め、昭和十一年學士院會員に推された。昭和二十五年没、主著に『欧州最近外交史』がある。

久米邦武は天保十年佐賀城下に生まれた。藩校弘道館、江戸の昌平學校に学び明治四年岩倉具視に従って欧米を視察、歸國後『米歐回覽實記』五巻を著した。明治十九年修史局で『大日本編年史』を分担、二十一年東大教授、『国史眼』の編集に当たった。明治二十五年、「神道は祭天の古俗」とする論文により問題となり大学を辭職した。その後早稲田大学で古文書學を講じ、多くの史書・論文を発表した。県関係のものでは『鍋島直正公伝』全七巻、大隈重信の『開國五十年史』などの編纂がある。



久米邦武

相良知安は天保七年佐賀城下に生まれ、藩医の子として藩校で蘭學を学び医学寮「好生館」の教官を助けた。文久元年江戸の佐藤尚中に、のち長崎で精得館蘭醫ボードウィンに学び、慶応二年帰藩して鍋島直正の侍医となった。明治二年、政府

の医学取調御用係となり、ドイツ医学を導入、東大医学部の創設に努力した。

法曹界では多久の鶴田斗南、小城の波多野敬直、須古の織田萬らがた。鶴田は元老院議員、波多野は司法大臣および宮内大臣、織田は東大総長などをそれぞれ歴任、明治・大正・昭和の各時代に活躍した。

(八) あとがき

前節にも述べたように、學術・文芸の分野でもすぐれた人物が育っているが、それらはおもに中央で活躍した人々であった。大正期から昭和前期にかけて歌人、中島哀浪が郷土で「火の国」を主宰、下村湖人が県内の各中学校で教職にあったことをのぞくと、宮地嘉六・三好十郎・吉田紘二郎らも中央の文壇で名を成した人々であった。そのような意味では佐賀県の文化は太平洋戦争後になってようやく地方に定着していったということができよう。戦後の文化運動は「佐賀文化研究会」、「松浦文化会」を中心にすすめられ、大正二年以来の「佐賀美術協会」の復活もめざましく、「城」・「文学佐賀」・「玄海派」・「白磁」など芸文同人誌も活発である。有田を中心とする陶磁器の伝統を継受する多くの陶芸作家・その歴史的研究と評価を正した永竹威・考古学の木下之治・古文書学の三好不二雄・美術の石本秀雄・博物館の古賀秀男などの努力によって今後、土着の「思想と文化」が定着・開花するであろう。

参考文献『佐賀県の人物と遺跡』（県教委）および『佐賀県の歴史』（山川出版社）（佐賀大学教授）

人物を中心とした

文化郷土史

——長 崎 県——



FUDAKA

川 道 岩 見

洋学の系譜

旧幕時代、長崎は洋学のメッカとされた。鎖国の時代に、ここだけは出島によって海外に門を開き、洋学など群を抜いていたからである。全国有為の人材が、新しい海外文化を吸収するために、競ってここに遊学し、やがてその多くが、沈滞した鎖国の現状を打破する力となって巣立っていった。こうして長崎は、明治維新の原動力をつちかう栄光を担ったのである。

明治に入ると、こうした啓蒙的な役割からさらにすすんで、専門的な新分野を開拓し、創業する者が出た。わが国最初の近代印刷をはじめた本木昌造、同じく印刷術の上野彦馬など、その代表的な例である。文化の交流と、その伝達手段の開発は時代の要求であった。印刷も写真も、すばらしい速度で全国に普及していった。こうした創業の事績は、単に印刷や写真のみにとはとまらなかった。それは長崎の各所に建てられている「わが国最初の云々」という碑によって、その跡をたどることができる。砲術、医学校、金星観測、海底ケーブル、教会、洋館など、あげればきりがなくいろいろである。長崎での散歩は、まるで歴史の上を歩くようなものである。長崎の風物そのものが洋学の歴史を語りかけてくる。ことに象徴的なのは、南山手、東山手一帯の古い洋館である。それらの建築に、特異な事績を残したのがド・ロ神父である。重要文化財旧羅典神学校はその手に成った。これら一連の創業の事績は、近年とくに高く評価されるようになった、けれども当時の長崎は、それらの事業をのばすのには小さすぎた。洋化の中心舞台は東京に移りつつあった。

地元の洋学徒の多くが郷土を去り、中央でその才能をのびした。昌造や彦馬はむしろ例外的な存在であったといえることができる。日本統計学の祖杉亨二、柴田辞書の名で英学徒に親しまれた「英和字彙」の編集にその生涯をささげた柴田昌吉、東京日日新聞を創刊した福地源一郎、五教館など藩学出身の英才たち、彼らがそうであったけれども、彼等が中央に出たからといって、郷土の文化史のうえで捨象してよいものではない。彼らの生涯には郷土のかげりがつきまとい、郷土の文化に有形無形の栄養を与えてくれた。ともあれ彼らは東京に去り、長崎の枠を乗り越えて、洋化の激流に体を張った。明治の年代が進むにつれて、長崎洋学の栄光は薄れ、やがて史料と史料のみが残されることになる。

大正期は、その残された史料や史料の検討と体系づけの時代である。さいわいにもよき担い手に恵まれた。「長崎学」を確立した古賀十二郎、その古賀とともに大著「長崎市史」を完成した福田忠明などがそうである。「長崎学」とは、長崎にある資料の解説、整理、解説、体系づけとでもいうほどの意味合いをもつ。日本の特定の地域にそうしたものも成立し、それに生涯をかける者が後を絶たないのは珍らしい現象である。それほど資料が豊かで、ひかれるものがあるからであろうか。

昭和期は、大正期で体系づけられた資料をもとにして、他地区の資料を参考にしたり、実地調査にも出かけたなりなどして、さらに細かい専門分野を開こうとする時代である。それは現在進行中であり、またそれが進行するほどに資料も豊富なものであるが、物故者の中から例をあげるとすれば、林源吉が浮びあがってくる。彼は陶

磁器を生涯の友とした。現にあるものから歴史をさかのぼって検討を続け、家産を傾けても飽くことを知らなかった。これら郷土史家に共通していることは、いずれも学力があり、根気強く、また研究を続けるのに必要な資産や環境に恵まれていたことである。このような研究は地域的なひろがりを見せ、各城下町を中心に幅広く展開されている。

藩学の系譜

長崎県には、対馬、平戸、大村、島原の五藩と、諫早などいくつかの支藩があり、それぞれの伝統をもつ藩学を中心に学統がつがれてきた。それらの中で、明治以後に幾多の人材を輩出したのは、大村の五教館と平戸の維新館である。大村、平戸の両藩は、遠く十六世紀の中頃、西洋の文物をつんだ南蛮船を迎え入れたところであり、早くから目が海外に向けられていた。また長崎ははじめ大村領で、その領主純忠によって開かれた港であり、地理的にも近かったから、大村藩と共通の歴史的役割を果たす素地があった。とくに大村出身の人材が多いのは、ここにも一つの原因があるようである。大村、平戸の両藩はいち早く藩論を勤王にまとめて時代の波に乗り、人材を中央に送り出した。それも県下の他の藩よりも一歩先をとっており、その一歩が明治になって、大きく物をいうことになった。そうはいうものの、明治政府の要路は薩長両大藩に占められたので、いきおい学術文化の分野に業績をのびしていった。大村藩はわずかに二万七千石足らずの小藩ではあったが、その分野の人材の豊富さの点では、全国的にみても上位に位する。時期を三つに大別し

て、人材をあげてみる。初期には藩学五教館出身の人材がある。衆議院議長をつとめ、育英事業などを起した楠本正隆、初代衛生局長、東京医学校長としてわが国衛生行政を開拓した長与専斎、農学者で北大総長となった南鷹次郎などがそうである。彼らが活躍したのは明治期であった。次期には五教館の後身大村中学創立期の卒業生たちの世代がある。長岡半太郎は世界的な物理学者として令名があり、理化学研究所などで素粒子グループを育て、初代の阪大総長を勤めた。医学者楠本長三郎がその後を追って阪大総長となった。

朝永三十郎は京大教授で「近世に於ける我の自覚史」を著し、東大の桑木博士と並んで、哲学の大家と仰がれた。黒板勝美は東大教授として多くの国史学者を育て、わが国古文書学の基礎をきずいた。彼等の活動の中心の時期は、大正から昭和の前期であった。第三期にはその活動が昭和後期に及び、あるいは現在活動中の人たちがある。前期の人材の子である長与又郎、善郎兄弟、朝永振一郎たちであるが、彼らにはもはや郷里の影が薄れている。むしろ大村中学出身の福田清人をあげたのがよいのかもしれない。

次に平戸藩についてみよう。初期には藩学維新館出身の楠本端山・碩水兄弟がある。兩人とも儒学者で、藩政や国事にも関係したが、晩年には故郷の針尾島に鳳鳴書院を開き、多くの子弟を養い、文教の気風を高めた。藩学出身の逸材で、故郷にとどまった異例の存在である。次期には維新館の後身猶興書院に学んだ菅沼貞風がある。彼の東大の卒業論文「大日本商業史」は、雄大な構想と豊富な資料をもつ大著であって、古賀十二郎ら多くの後進を鼓舞した。これら二つの時期の人たちは明治時代に活動した。第三期には永田菊

四郎をあげることができる。彼は苦学の末、郷里の裁判所に勤め、日大、ハンブルグ大を出て、わが国民法学の權威となり、日大総長を勤めた。故郷に建てられたその記念図書館は、長く郷党に立志の契機を与え続けることであろう。

以上二藩のほかに、明治期に活動した人として、対馬の漢学者龜谷省軒、島原の国学者丸山作樂、諫早の漢詩人野口寧斎をあげることができ、洋学ほどには印象が鮮明ではない。明治以後の日本が、西洋を学ぶのに急であつた故であろうか。海外との交渉という点では、対馬は長崎に似ていて、旧幕時代北の朝鮮に向かつて開かれたわが国唯一の窓口であった。それは長崎における中国との交渉と同じく、とかく世人に忘れられがちである。対馬は長い対鮮交渉の歴史をもっているし、長崎港に鎖国時代に入出した中国船の数量は、蘭船のそれよりも圧倒的に大きかった。中国との国交が回復されようとしている今日、それらの関係資料は改めて検討され、評価しなおす必要があるのではなからうか。

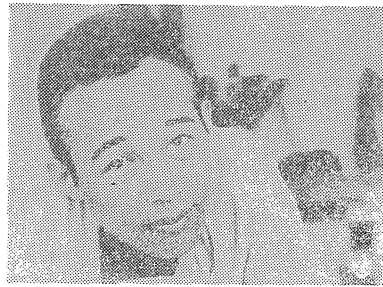
芸術

まず絵画に目を向けてみよう。近世初頭、長崎に多かった南蛮絵は、キリシタン禁令によって影をひそめ、わずかに唐絵目利によって西洋画の手法が伝えられていた。幕末の頃には、その手法を学ぶために、有名な画人たちが長崎に遊んだ。北宋画、南宋文人画の画人たちも、それに興味をもったのである。いっぽうでは、正保の頃から今日まで、北宋画の伝統もひきつがれているし、南宋文人画については、幕末の頃すぐれた画人が輩出し、それが現在にも尾をひ

いて継承されている。ところが、明治以後は、学問の面で洋学が主流を占めたように、絵画でも洋画が重きをなした。それで、明治期に同じ文展によった画家ではあっても、洋画の山本森之助、渡辺与平はわりあい知られているのに対し、日本画の荒木十畝は忘れられがちである。もちろんそれは単に部門の相違だけではないのかもしれない。山本はその晩年の大作「中国西国巡幸長崎御入港図」が、長崎港を下絵にしている郷党に親しみやすいし、明治神宮聖徳記念絵画館にあって、よく人に知られている。渡辺はコマ絵で、長崎の風物を雑誌や新聞で紹介して人気を得、その大作「帯」が県立図書館にあって、人の目にふれる機会が多い。三人ともまじめな画人で、ともに明治の画壇で活躍した。

地元において特異な存在を示したのは、ずっと時代がくだって昭和になるが、書道の原田萃園と、版画の田川憲である。原田は自由で気品のある書風が群を抜いていて、鶏鳴書道会の会長として、長崎師範、長大の教師として、また県展の審査員として、県下書道界の指導的役割を果たし、幾多の後進を育てた。田川は東山手、南山手の外人居留地や、唐寺など長崎的な風物を版画におさめ、多くの市民や国内外の外来者に親しまれた。

次には文学に目を転じてみよう。長崎の歴史や風物は、よき文学の素材であって、ここを訪れここに取材して作品をものした作家は多い。それが多いわりには、地元であって目立った文学活動をする人が少なかった。文学の素材とはなりえても、人を育てる素地に欠けるのか。遊び好き、祭り好きの市民性が、物事を深く掘り下げ追求し表現しようとする詩心を腐蝕させるのか。ディレックタントは多



永井隆

ながら、市民の耳をそばだたせる出来事が糸をひく。それらの問題はあらゆる分野にわたり、あらゆる伝達手段で表現されねばならぬのであろう。そうした中で最も印象的に、その悲惨さを、人々の心の奥に向かって訴えたのは永井隆であった。まず彼は被爆直後の二十年八月から十月にかけて、第十一医療隊の隊長として、正確冷静な救護報告書を書いた。ひきつづき「長崎の鐘」「ロザリオの鎖」

など数編の小説によって、人々の心情に訴えた。それらは当時のベストセラーとなって、敗戦にあえぐ日本の国民に深い共感を与えた。原爆で失われた彼の妻の命、その後を追った彼の命、著書による収入すべての寄付、こうした運命と志向とのみごとな一如化が、さらに人々の感銘を深くした。他の関係出版物のどれよりも彼のそれは広く深く影響を与えた。

本木昌造（文政六―明治八）長崎市に生まれ、オランダ通詞本木家の養子となり、幕末の頃、長崎、下田等で通訳として活躍。慶応四年、長崎奉行引揚後の製鉄所の管理にあたり、その頭取となる。若年の頃より印刷術に心ひかれ、嘉永元年、他の通詞とはかり、長崎会所に蘭書植字判一式を購入。安政二年、西役所に設けられた後に島蘭館内に移された活字摺立所の取扱掛となる。小型活字鋳造

いが、骨太な作家に恵まれていない。

明治期には、対馬嚴原生まれの半井桃水が出た。多くの小説をいくつかの新聞に連載し、その一部は好評を得、弟子に樋口一葉をもった。大正から昭和の初期にかけて活動した作家に、長崎出身の平山芦江と、佐世保育ちの吉田弦二郎がある。平山はその作品の中でよく長崎の風物を紹介し、長谷川伸とともに、いわゆる大衆文学の先駆をなした。吉田は感傷をこめた筆致で青少年の胸をわかせ、対馬での軍隊生活をもとにして、代表作「島の秋」を書いた。昭和の前期に活動した詩人に、諫早生まれの伊東静雄がある。よく近代の憂愁を表現したものとして、年とともに評価を高めつつある。「わが人に与ふる哀歌」をはじめ一連の詩集は、とくに専門の詩人によって愛読されている。菜の花の時期には、在郷の詩人文化人たちが、諫早公園に集まって彼の詩業をしのんでいる。それが恒例となった。本明川がうねる、みはるかす諫早の平野の眺めは、彼の詩の最も鋭角的な抒情にふさわしい。都市化の波が寄せつつある今日なお、諫早は、よき詩人、小説家を生んでいる。

原爆

長崎が世界に知られるのは、その長い海外交渉の歴史と、東洋一を誇る造船と、原爆である。その中で原爆については、それにまつわる記憶が余りにもいたましく、深く長崎市民の胸にくいこんで離れない。それは科学による人間性の喪失、人類滅亡の危機という、今世紀最大の主題を世界に向かって提起した。長崎では、あるいは原子病対策、あるいは原水爆禁止などと、ある日常性さえ感じさせ

に堪能な英語教師ガンプルを製鉄所の雇として迎え、活字鋳造と電版彫刻の伝習にあたらせ、自らの工夫を加えて、鉛活字の製法に成功。明治三年、新町活版所を設け、活字製造と印刷をはじめた。これがわが国近代印刷のはじまりである。

上野彦馬（天保八―明治三七）長崎の御用時計師の家に生まれ、青年時代の四年間、日田の咸宜園に学び、帰郷後、蘭医ポンベの許で化学を研究。そこで同志の藤堂藩堀江鉄次郎を知り、はじめて写真機に接す。堀江と共作の写真機により、安政五年撮影に成功。翌六年藤堂公に新写真機を入手させ、江戸の藩邸、領国の津で撮影及び化学を講義。文久二年帰郷。撮影局を創設。金星観測撮影や西南の役の戦場撮影を行なう。明治中期頃、全国から集まった多くの後進を育てる。

マルコ・マリ・ド・ロ（天保二―大正二）ナポレオンの末裔。フランス・カルワード県に生まれ、オルレアン神学校、パリ大学卒業後、慶応四年来日。長崎のラテン神学校（重文）の建立に当たり、明治十一年、黒崎、出津の主任司祭として赴任。以来三十三年間、宣教とともに、土木建築、医療、織物、製麺、開拓移民など、身につけた学問、技術、財産のすべてを住民のためにささげる。十五年出津教会（県重文）、十六年救助院（県史跡）設立。わが国最初のパン、マカロニ等市販。四十四年病をえて長崎へ移り、最後の情熱を傾けて、大司教館建立にあたる。

杉亨二（文政二―大正六）長崎生まれ、上野家の学僕、村田徹斎の助手、緒方塾の塾生を経て、嘉永二年江戸に出、杉田成郷に独、露語を学び、勝海舟の塾頭、蕃書調所の助教授となり、統計学



二 亨 杉

に開眼、維新後、駿河の人別調をしたが中絶。沼津兵学校教師を経て、明治四年、大政官正院政表課大主記。同年辛未政表、翌五年壬申年表と、本邦最初の正

確な統計年鑑を編集。十三年、各国センサスの最新様式をとり入れて、甲斐国人別調に成功。有志と共立統計学校を設立、教授長となる。十七年官を辞し、後進の指導に当たる。九年に設立した統計学社の社長となる。十一年、製表社のちの東京統計協会を創立。それと統計学社を合併したのが現在の日本統計協会である。「明六雑誌」に福沢諭吉らとともに卓見を發表、文部省修文館内設立の学士院の会員となる。

柴田昌吉（天保二一明治三四）長崎に生まれ、幼時柴田家の養子となる。漢学、蘭学を学び、安政五年、語学伝習所に入所。翌六年、同所世話役。慶応四年、沼津の海軍兵学校教師。明治元年、外務省に勤め、のち樞密大書記官。米国公使に任ぜられようとしたが辞し、はなやかな外交官の道をして「英和字彙」の編集に専念。明治六年出版、十五年再版。柴田辞書と呼ばれベストセラーとなる。

堀地源一郎（天保二一明治三九）長崎に生まれ、通詞名村花暖に学び、十八歳で上京、外国方となる。外遊後維新を迎え、江湖新聞を創刊。のち東京日日新聞社長となる。小説、戯曲、歌舞伎脚本を書

く。

古賀十二郎（明治二一昭和二九）長崎に生まれ、明治三十四年、東京外語卒業後、広島中学に三年勤め帰郷。シーボルト等を学界で紹介して郷土史研究の分野を開く。長崎評論を創刊、長崎史談会を組織。大正八年長崎市史編纂主任として、同市史風俗編の大著を完成。県立図書館創立に奔走してこれを実現。同館郷土史料の収集に当たる。英語他七か国語の語学力を生かして、外国文献を紹介。生涯を郷土史研究にささげ、いわゆる長崎学を確立、史学界に貢献し、後進に研究の指針を与えた。収集を手がけた豊富な史料は県立図書館、市立博物館に収蔵されている。著書には前記市史の他、西洋医術伝来史、長崎と海外文化、長崎絵画全史、遺稿に、長崎洋学史、丸山遊女と唐紅毛人、長崎開港史などがある。

福田忠明（明治二一昭和五）長崎の矢上に生まれ、のち片渕の福田家に入る。小学校の教育と郷土史の研究に当たり、史料の収集、史跡や郷土先賢の顕彰に貢献。後年、長崎市史編纂員として、大著長崎市史八巻中、社寺編等五巻を完成。

林源吉（明治一六昭和三八）長崎に生まれ、家業の家具商をついだが、大正十三年以後、長崎市商品陳列所に入り、その廃止後は市博物館で主事あるいは学芸員として、資料の収集、鑑別、陳列に当たる。郷土史ことに陶磁器の研究に専念、家産を傾けてもそれをまげなかった。長崎の史談会、美術協会の創立に参加、幹事、審査員をはじめ、没年まで十五年間県文化財専門委員、観光、公園、町名整理の委員をつとめ、観光協会、市、県、文部省より表彰を受け、長崎新聞文化章を受章。「茶碗」「長崎談話」に多くの論文を発表。

楠本正隆（天保六一明治三五）大村に生まれ、藩学五教館に学び、勤王派に属して国事に奔走。明治元年、長崎裁判所権判事、後長崎府判事、外務権大丞。外遊後、明治二年新潟県大河津村の百姓一揆をおさめ、五年新潟県令、十年東京府知事。二十六年衆議院副議長、ついで議長。欧米の事業六法をとり入れ、船会社の合併、銀行の設立をはじめ、育英事業をおこして、庶民の生活向上や進学の便に供した。

長与専斎（天保九一明治三五）大村に生まれ、十二歳より藩学五教館に四年、大阪の緒方塾に六年間在学の後、長崎の医学伝習所で西洋医学をボンベに学び、藩医となる。慶応二年、出島のマンスフェルトの許に派遣され、同四年養生所の後身精得館の館長に選ばれ、マンスフェルトの指導をえて、長崎府医学校創設、わが国はじめての近代的医学校制度をつくる。明治四年、欧米各国医事調査に留学。五年医事局長。八年初代衛生局長。牛痘種継所司薬場開設。七年東京医学校長。九年フィラデルフィア万国医学会出席。二十三年、水道条例をつくり、伝染病研究所の設立、日本薬局法の制定等わが国衛生行政の基礎をきずく。

南鷹次郎（安政六一昭和一一）大村藩大音琴に生まれ、藩校、長崎英語学校に学び、明治十年東京工部大学予科卒業。札幌農学校で畜産をおさめ、十四年卒業。二十二年同校助教。四十年北大教授、後初代農学部部長、総長となる。

長岡半太郎（慶應元一昭和二五）大村に生まれ、大阪英語学校等を経て、東大理学部、同大学院を卒業、東大助教となる。外遊後、明治二十九年東大理学部教授。大正六年理化学研究所に入り昭和六

年初代阪大総長。十四年学士院長。十五年文化勲章を受く。原子物理学者として世界的に知られる。湯川、朝永博士らを育てた人である。

楠本長三郎（明治四一昭和二六）大村藩七ッ釜生まれ。大村中学第一期生として明治十七年十一月入学。一高を経て東大医学部卒業。阪大医学部に勤め、昭和九年、長岡半太郎の後をうけ総長となる。朝永三十郎（明治四一昭和二六）大村藩川棚に生まれ、大村中学、第一高等学校を経て、明治三十一年東大文科卒業。真宗大学教授、京大文科助教となる。四十二年欧米留学。大正二年帰朝、京大教授、昭和六年退官後は、新聞雑誌等に論文を発表、哲学思想の民衆化につとめた。主著「近世に於ける我の自覚史」「デカルト」「カント平和論」。ノーベル賞受賞の物理学者朝永振一郎はその長子である。

黒板勝美（明治七一昭和二一）大村藩波佐見出身。東大国史科卒業。経済誌社の国史大系、群書類従を編集。東大助教となり、明治四十二年外遊。大正八年停年で教授を退官後名誉教授。朝鮮史編集会等多方面の調査事業に当たる。主著「国史の研究」

楠本端山（文政二一明治一六）平戸藩針尾島に生まれ、十五歳より五年間藩学維新館に学び、藩に出仕。全国の学者たちと交を深め、二十四歳から二年間、江戸の佐藤一斎に学ぶ。帰藩後維新館教授。朱子学本来の姿にかえるべきを説いて容れられず、帰郷。隠棲八年、藩公に乞われて平戸に出、藩公の師となり、藩政に参与。維新の動乱期に猶興書院をおこし、税を軽くし、時世を説いて藩の進路を誤らせなかった。明治十四年帰郷、弟の碩水と鳳鳴書院を開き、全国か

ら集まった多くの子弟に教え、文教の気風を郷里にみなぎらせた。
楠本碩水（天保三―大正五） 端山の弟。兄の後を追って儒学をおさめ、明治元年、新政府の会計官、租税判事、さらに漢学講官、大学少博士となる。明治三年官を辞し、帰郷して多くの後進を育てる。

菅沼貞風（慶応元―明治二二） 平戸に生まれ、楠本端山に学び、明治十三年猶興館書院に入る。十四年から郡役所雇いをしながら苦学、十七年東大古典科入学。二十一年卒業論文として「大日本商業史」を書いて卒業。猶興館の同窓会有為会をつくって後輩を励ます。東京高商教師に迎えられたが半年でやめ中国との融和、朝鮮、フィリピン独立の宿志を果たすため、二十二年マニラに渡り、奔走中コレラにかかり、二五歳の短い生涯を閉じた。

永田菊四郎（明治二八―昭和四四） 平戸市生まれ。小学卒業後苦学して、小学校教員、裁判所書記の資格をとり、平戸裁判所に勤め、二〇歳で上京。大正十年日大専門部卒業。同年弁護士試験合格。大正十二年ベルリン遊学。昭和四年ハンブルグ大卒業。五年帰朝、日大教授。三十三年総長。二十五年司法試験委員。没後平戸市紐差に永田記念図書館建立される。



菅沼貞風

龜谷省軒（天保九―大正二） 対馬原に生まれ、はじめ

郷師について学んだが、二十歳すぎから大阪に出、広瀬旭莊の門に入り、松林飯山らと交わり、勤王派に属して国事に奔走。明治二年大学教員、三年太政官少吏、ついで記録局長、四年東京府属、六年官を辞し、光風社を設立、著述に専心。東京では安井息軒に師事、中国の諸学者とも交わり、経書、詩文、釈典に親しみ、論語管見等多くの著書を残した。

丸山作樂（天保二―明治三三） 高原藩士。塩谷岩陰に経史を、また平田鉄胤に皇典を学ぶ。文久二年、長崎に出、後藤又三郎について蘭学をおさめる。尊王攘夷のため東西に奔走。島原に私塾を開き、青年に勤王を説き、投獄される。明治維新後長崎府出仕、広運館教授。五年征韓の義を説いて讒にあい入獄。十三年特赦で出獄、忠愛社を創設、明治日報を発刊。後宮内省に出仕し、元老院議員、貴族院議員に勅選された。

野口寧斎（慶応三―明治三八） 諱早に生まれ、諱早の好古館に学ぶ。明治六年上京。十七年森春嶽、ついで森槐南に漢詩を学び、結社「星社」によって、すぐれた漢詩を発表。後「太陽」「二六新聞」に漢詩で当時の小説を批評、文壇の注意を集めた。二十六年「三休詩評釈」を著わし、漢詩界での地位を確立。三十六―三十九年月刊漢詩誌「百花欄」を出し、斯界中興の祖といわれた。諱早に「諱早文庫」を創設、それが今日の諱早市立図書館となっている。

荒木十畝（明治五―昭和一九） 大村に生まれ、荒木寛畝の門に学び、後その娘をめとり師家を嗣ぐ。花鳥を得意とし、文展に十数回入選、審査員となる。女高師教授、文部省教員検定委員、帝國美術院会員。代表作に「四季花鳥」「清妍」「夏景山水」等がある。

山本森之助（明治一〇―昭和三） 長崎の料亭一方の長男として生まれ、絵に親しみ、その画才を鈴木天眼に認められて、十七歳で大阪に出、山内愚遷の門に入る。翌明治二十八年上京。明治美術学校研究所に入り、翌年東京美術学校入学、三十二年卒業。以後白馬会に数回入選。文展一回―三回受賞。その審査員となる。四十五年、岡町栄、小林鐘吉、松浦非水らと光風会を設立。大正十一年仏国留学。在仏二年、六〇余の力作を描き帰朝。長崎画人の絵にひかれ、日本画の手法を学ぶ。風景画に長じ、代表作に、明治神宮聖徳記念

絵画館蔵「中国西国巡幸長崎御入港図」がある。それは、長崎で下絵を描き、晩年の二年間、心血をそそいだ大作である。
渡辺与平（明治二二―明治四五） 長崎に生まれ、渡辺家の養子となる。明治三十九年京都の美術工芸学校卒業。太平洋画会研究所で洋画を学ぶ。長崎で、その風物をコマ絵として、ホトトギス、有力新聞にのせ、夢二とともに多くのファンを得る。四十一年文展入選以来、入選を続け、将来を囑目されたが、四十五年夭折した。

原田肇園（明治二二―昭和四二） 島根県出身。島根師範卒業。昭和二年長崎師範教諭として来任以来、師範あるいは長大教育学部で書道あるいは音楽を教え、また鶏鳴書道会々長、県展審査員として多くの子弟を養うとともに、流麗で自由奔放な書跡を残した。作品の多くは県展、毎日書道展、独立展に出品。

田川 憲（明治三六―昭和四二） 長崎市に生まれ、大正十三年長崎市南卒業。宮内省勤務。昭和三年長崎に帰り、版面をはじめ広く長崎の風物を紹介。一五版画協会。支那事変に朝日の従軍画家とし

て参加。十六年より上海で中国人に版画指導。戦後福江や山鹿に住み、二十四年帰崎。三十一年県功労賞、三十五年第一回長崎新聞文化章を受く。県展及び郵政省年賀状審査員。
半井桃水（万延一―大正二五） 厳原生まれ。上京して共立学会に学び、大阪朝日新聞社等を転々、一時渡鮮したが、明治二十一年東京朝日新聞社に入り、翌年同紙に「啞顰子」を発表。以後「海王丸」等をのせ、特に「胡砂吹く風」は好評を得る。その後大阪朝日他多くの新聞に長編を連載。「天狗廻状」は後年の代表作。門下に樋口一葉を出す。

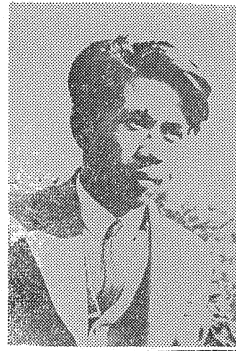
平山青江（明治一五―昭和二八） 長崎出身の小説家で、昭和初期、長谷川伸らといわゆる大衆文芸の先駆をなした。長崎商業を中退後、満洲を放浪。明治四十年帰国、帝都新聞に入り長谷川伸を知り、それから昭和四年同社を退社するまで、随筆等で一部の読者に親しまれる。よく長崎に遊びその風物を紹介。退社後は小説に専念。花柳界を主題とした随筆小説で多くのファンを得た。主著「唐人船」「西洋戦争」「ひだり棲」

吉田弦二郎（明治一九―昭和三一） 佐賀県西郷村に生まれ、父に従い佐世保に移る。明治三十二年、長崎の東山学院に編入、翌年中退。佐賀の工芸学校に入り、三十六年卒業。佐世保海軍工廠に勤めた後、三十八年上京。神田の国民英学校を経て、同年四月早大英文科入学。翌年十二月一年志願兵として、対馬に入隊。代表作「鳥の秋」の素材を得る。四十四年早大卒業。通信局の仕事のかたわら、六合雑誌を編集。創作等を発表。大正三年、早稲田文学に発表した「磯ごよみ」が文壇的処女作となる。ホトトギス、早稲田文学に作品を

のせ、大正六年早稲田文学所載の「島の秋」が出世作となる。その後多くの小説、戯曲を書き、ひろく青少年の読者に親しまれた。大正五年早大講師。戯曲「大阪城」等がある。

伊東静雄（明治三九―昭和二八） 諫早出身の詩人で、その近代の悩みをこめた抒情詩は、年とともに評価が高まり、例年某の花の時期に、諫早公園で地元文化人たちにより、彼をしのぶ会がもたれている。大村中学、佐賀高校を経て、昭和四年京大文科卒業。大阪府立住吉中学に勤む。五年、福田清人らの「明暗」に参加。七年、青木敬磨らと「呂」創刊。初期の詩を発表。リルケ・ヘッセ等に親しみ、ウィルヘルム・ミュラー・ホフマンスタールの影響を受く。

「コギト」によった保田与重郎らに注目されてその同人となる。十年「日本浪漫派」同人。「わが人に与ふる哀歌」刊。萩原朔太郎の絶賛を得る。十一年第二回文芸汎論賞を受く。十六年「四季」同人。「夏花」刊。十八年第五回透谷賞受賞。「春のいそぎ」刊。二十年空襲で住宅が焼け転居。二十二年「反響」刊。二十三年阿倍野高校へ転勤。二十四年肺結核発病。没後「伊東静雄詩集」「伊東静雄全集」が刊行された。

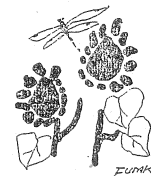


伊 東 静 雄

永井隆（明治四一―昭和三八） 松江に生まれ、松江中学、松江高校を経て、昭和七年長大医学部卒業。同学助手。八年

陸軍衛生部幹部候補生として広島に入隊。九年、予備役、受洗、長大助手。十二年講師嘱託。支那事変に応召、ノモンハン等七二回の戦闘に参加。十五年解除。助教、物理療法科部長。十九年医学博士。二十年六月、影浦内科により、白血病、余命三年の診断を受ける。八月九日、原爆を大病院本館で受け、出血をおして救護活動に従事。妻を失う。二十一年教授。臥床しながら「長崎の鐘」「亡びぬものを」「ロザリオの鎖」「この子を残して」等を書いて、原爆の悲惨さを世に訴え、世界的な反響をえた。二十四年長崎市名誉市民。二十六年五月一日没。

（長崎県立西彼農業高校教頭）



人物を中心とした

文化郷土史

—熊 本 県—

渡 辺 恭 士



はじめに

昨今、「耶馬台国」論議が、専門家、アマチュアを問わず極めて賑やかで、いわゆるブームをまき起こしている。古代史の空白を埋めるといふ作業が、あたかも謎ときの楽しさを与えてくれるのかもしれない。耶馬台国をはじめ古代史の謎ときを待つまでもなく、たしかに、かつての九州は、日本の歴史の原点であり、日本文化発祥の地であり、また、大陸系文化の移入の窓口として、豊かな文化を形成してきた。

しかし、中央政権が確立し、統一国家の体制完了後は、やはり、中央から見て僻遠の地であり、政治、経済、文化の面で、その地域的な相違を認めざるを得ないようである。

ただ、同時に、それだけ地域性の濃厚な、独特の文化と精神風土を形づくってき、また保守し続けてきたとも言えよう。

幕藩体制下の、それも細川入国後の肥後藩の歴史をみると、それは財政窮乏と財政改革の繰返しとみることが出来る。もっともこれは肥後藩に限られた状況ではない。三世紀に及ぶ慢性的貧困の中で、地方文化は、畢竟、支配階級のものでしかなかった点、肥後藩も例外ではなかったということである。

桃山文化の地方流出によって、支配階級の間に定着した、絵画、連歌、茶、能など、肥後の地で開花したものは多い。

こうした幕府、藩の行財政にわたる行き詰まりの結果として維新

を迎えるのであるが、肥後は、この大きな時代の転換に、必ずしも

敏感に対応していない。肥後の近代への参加は、明治十年の役（西南の役）の洗礼を受けるまで待たなければならなかった。

このことについては、例えば、肥後が、すでに宝暦の改革を他藩に先行して完了し、ひとつの危機を乗り切ったというか、体制に小康を得て、保守体質を持ち続けた結果が、肝心の維新へのエネルギー不足を来した、とする見方もある。

しかし、維新という近代への転換の時代に、本来ならば、より変革を必要としたはずの肥後で、なお、旧態からの脱却のテンポが遅くしたのは、やはり、肥後人特有の気質、体質であったと考えなければなるまい。

さて、近代の黎明期で、最も尖端的に文明の反映を見せるべき、文芸、美術の面で見ると、言論、新聞界にまず活動がはじまっている。

明治後期に至り、ようやく文芸、美術、詩歌に活発な動きが起る。これは、世紀が改まるということで、日本的な文化高揚の気運でもあるのだが。そして、大正から昭和初期の定着期から、あの戦前の灰色の時代を経て、戦後の復興、発展へと続く。

熊本県の文化の流れを歴史的に見てくるとき、常に漸進的と言うか、直らには、急激な変化に対応しないという、肥後の体質を見ることが出来る。そして、時に出現する先駆的な指導者は、より鮮明で急進的に見え、そこから新旧の対立、論争、進展というパターン

を見ることもできる。

少なくとも、展開は地道であり着実である。

それだけに、一度定着すればより一層根強いものとなり、一種のひらき直りとも見られる、土着のたくましさともなるのであるろうか。南国の熱気と湿度、決して豊かとは言えない火山灰土。堪えることを強いられ、自らで決定することを求められるこの風土と歴史とは熊本人の精神形成に無縁ではない。

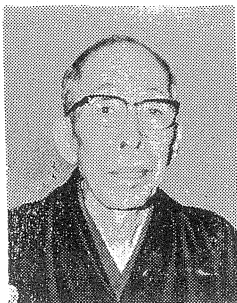
これからの熊本の文化が発展し、新たな地方文化を形成するには内包するエネルギーがどう開かれた形で結実するかにかかっていう。可能性は、極めて豊かであり、かつ多面的である。

美術・工芸

美術、主として絵画は、近代に入ってから明治後期まで、依然として日本画が主流を占め、洋画の活動はかなり後になる。

日本画では、藩の絵師として扶持を得てきた画家たちの活動が引き続きくわけであるが、宮内省御用の命を受けた、杉谷雪樵（一八二七―一八九五）、南画界の第一者と称される竹富清嶺（一八三二―一八九九）らである。

大正に入っても、雲林院蘇山（一八三七―一九一四）らの長老の時代が続く。蘇山は、シカゴ博覧会出品、フランス美術館買上げなど、文字通り画壇の重鎮として存在した。そして大正二年には、現在日本画壇を代表する作家堅山南風が、文展に入選し、その偉大な



風山南

歩みの第一歩を踏み出していったのである。

風山南は、明治二十年九月、熊本市の油、蠟などの製造御商、武次郎の三男として生まれた。名は熊次。幼時に父母の死去により家運傾き、貧苦の中で学問と絵の勉強を続けた。明治四十三年、二十一歳で、先輩山中神風をたよって上京、高橋広湖の門に入る。大正二年文展に、出世作「霜月頃」で入選。その後、日本美術院を興した横山大観に師事することになる。

大正十二年には院展の同人となり、以後、ひたすら我が国日本画壇の中心的存在として活動している。

また、在京の日本画家には、さきの山中神風、真藤黎明らがいる。昭和初期に活躍した山田隆憲（一八九三—一九五三）は悲運の画家である。

山田隆憲は、黒田清輝の葵橋研究所から東京美術学校へ進み、昭和七年、文展入選以来着々と日本洋画壇に地歩を築き、十年に帝展に無鑑査となった。昭和初期の挿絵活動にも豊かな才能を見ることが出来る。しかし、十五年、右手疾患により、涙をのんで絵筆を折った。

昭和に入り、熊本における洋画、日本画を糾合して、熊本美術協

無鑑査となる。地元の主な胸像群は、ほとんど手がけた。

時事漫画の那須良輔は人吉の出身。不思議なひょうひょうとした味は、独特のものである。

陶芸で、伝統を受けて継続しているものは、小俗焼、高田焼であるが、いずれも細川入国を起源とする。小俗の近重治太郎、一勝地焼から新しい境地を開いた村山一壺などが活躍中である。

工芸美術として特異なものに、肥後象嵌がある。加藤、細川と仕えた鉄砲鍛冶、林又七を祖とする肥後独特の彫金技法は、時代の推移と共に、断絶の危機も訪れたが、辛うじて伝統を守り抜き、米光太（一八八八—）（昭和四十年人間国宝指定）を頂点として、



高野松山

田辺恒雄（県指定無形文化財）らの工人によって、製作が続いている。

漆工芸の高野松山（一八八九—）（昭和三十八年人間国宝）は、強烈な個性と芸術性の持ち主。蒔絵及び変わり塗りの秘法を伝える唯一の工人である。京都美術工芸学校、東京美術学校を経て、大正八年から東京美術学校の講師を勤めた。昭和七年帝展特選となる。以後、我が国漆芸界の最高峰として、存在している。

熊本在住の漆工芸家としては、川保芳洲が、終始在野の工人とし

会が発足し、年々作品展を開催するなど、組織的な力で、美術の発展が推し進められた。協会のほか、洋画の銀光会、水彩の蒼原会などの団体があり、相互に交流が行われたのであるが、銀光会（昭和十年発足）は、現在なお、田代順七を会長に、熊本美術界の大きな力となっている。

田代順七（一九〇〇—）は、図画教師としてある傍ら、東光会所属、昭和九年帝展入選後、十二年東光賞、十三年会友、十四年には会員、審査員と進んだ俊才で、以来終始熊本にあって、郷土美術界の指導者として尽力している。

戦後で、特筆すべきは、海老原絵画研究所の開設である。同研究所は、疎開後、熊本に住居を定めた海老原喜之助を指導者に迎えて開設されたが、現在活躍中の画家で、なんらかの影響を受けなかった者はないと言われる。

独立美術の坂本善三、宮崎精一らも、地方にあって意欲的な制作活動を続けており、又、国際的な版画家浜田知明は、熊本在住で中央に気を吐いている。

商業美術は、戦前からの実績を持つ、二科会員の轟周平、美術文化協会の友枝翁太郎の二人が双壁。後進の指導と共に、国際的な活動を続けている。

彫刻の分野は、やや人材に欠けるが、横浜、八聖殿の釈尊像などの作品で知られる田島亀彦（一八八九—）が健在。田島亀彦は、高村光雲、朝倉文夫に師事し、第四回帝展入選以来、連続五回入選

て気を吐いている。

松本喜三郎（一八二五—一八九一）は、幕末から明治にかけて、人形作りの名手として、全国にその名を響かせた。「本朝孝子伝」、「三十三か所観世音霊驗記」の大作や、風俗人形に驚嘆すべき技術を見せた。

なお、地元紙、熊本日日新聞社の主催する熊日総合美術展、熊日書道展、熊日写真展及び熊日広告賞——いずれも二十年を超える歴史を持つ——の各公募展が、新進の登場、ベテランの活躍の場として、熊本美術界の発展に大きく寄与していることを付け加えておきたい。

文 芸

近代熊本における文芸の動きは、明治三十年に至るまで、ほとんど無風と言える状況である。ただ、漢詩においては、「機雲映雨日記」を出版し中国でも名声を得た竹添井々（一八四二—一九一七）明治天皇の侍講で、教育勅語の起草をした、元田永孚（一八一八—一八八七）、兼坂止水など、極めて盛んな活動があり、和歌、俳諧も活発であった。

夏目漱石が、五高教授として熊本に着任後、新俳句運動が起こり、同じく、短歌の革新の動きも現れているが、新旧両派のかなり激しい論争も見られるのである。

小説では、徳富蘆花（一八六七—一九二七）が、兄、徳富蘇峰（一



徳富蘆花
八六三（一九五七）の國民新聞社にあって活躍し、明治三十三年「不如帰」と「自然と人生」を刊行して、一躍文壇の脚光を浴び、三十四年に「思出の記」三十六年「黒潮」四十二年「寄生木」と矢張り

早に著し、又、大正二年には「みみずのたわごと」を出版するなど、一世を風靡する。一方、熊本では、「九州文学」や「文学世界」などという雑誌の発行が見られたが、政治、教育に関する論評であって、文芸の面における動きは、未だほとんどなかったのである。蘇峰については、ここに言うまでもなく、我が国言論界の巨人としてあまりにも偉大である。

同様、新聞人ではあるが、広義の文芸の分野とみるならば、大阪朝日新聞から東京朝日新聞の主筆となり、朝日の三山として重きをなした、池辺三山（一八六三～一九二二）、同じく、大阪朝日の主筆として、デモクラシー運動の先駆者となった、鷹井素川（一八六六～一九二八）、大阪毎日新聞の社長となり、後に東京日日を合併して、日本の新聞王となった、本山彦一（一八五二～一九三二）など、近代熊本の地は、まず、言論界に傑出した人物を送り出している。

昭和四年に、蘆花全集が出た同じ年、共産党紙「戦旗」に、徳永直（一八九九～一九五八）が、「太陽のない街」を連載しはじめ、

プロレタリア文学の中に、一躍クローズアップされた。徳永直は、貧農の出で、東京で印刷工となり、「太陽のない街」は、共同印刷のストライキの中で書かれた。戦後「妻よ眠れ」「しずかな人」などを書き、昭和三十三年、ガンで亡くなった。

出現しては消える地方文芸誌の中で、昭和十一年に、荒木精之（一九〇七）が創刊した「地方派」及び十四年創刊の「日本談義」は、共に文芸の色彩濃く、うち「日本談義」は、文化的総合誌として成長発展し、戦中一時休刊したが、復刊し、通巻三百八十号、現在なお継続して、全国でもユニークな存在となっている。

荒木精之は、この日本談義の発行をはじめ、文学作品、郷土史研究の成果の発表、先哲、文化遺跡の顕彰、地方出版と、八面六臂の活躍をみせ、熊本文化活動の中心的存在となっている。

郷土誌「呼ぶ」（通巻一八五号）を発行している山口白陽（一八五八～）は、「第六師団行進曲」「火の国小唄」などの作詩者として、あるいは、熊本県下四百に及ぶ学校校歌の作者として知られ、又、熊本地方の方言の採集、記録の仕事を続けており、地方語を尊重し研究している木下順二も、高く評価されている。

木下順二（一九一四～）は、熊本中学、五高の出身。処女戯曲「風浪」も、郷土を素材としたものである。「夕鶴」「彦市ばなし」ほか一連の木下民話劇も、戦後戯曲の代表作「沖繩」「審判」なども、終始、日本人の本質を追求する姿勢を貫いているものと言える。

なお、現在活躍しているものは、芥川賞作家森敦、第三回農民文

学賞を受けた島一壽。

熊本俳壇は、大正期、高浜虚子に影響を受け、句誌「銀杏」が発行され、次第に、新俳句が成長して行く。昭和二年、銀杏の発行にもあつた、後藤是山（一八八六～）らが中心となつて、「東火」が、続いて阿部小壺、田辺夕陽斜らによって「阿蘇」が創刊され、いずれも、現在、活動中である。

後藤是山は、熊本日日新聞の前身、九州日日新聞に入り、國民新聞に派遣されて、徳富蘇峰に指導を受け、再び九州日日新聞に戻って活躍した。特に、新聞の文化面を通して、地方文化の開拓に大きな貢献をしたほか、郷土史の研究に大きな足跡を残している。

阿部小壺、田辺夕陽斜の指導する「阿蘇」は、五百号記念を迎え、傘下二十八団体、七百人を擁し、熊本俳壇のリーダーとなっている。

さて、俳壇で特記すべきは中村汀女（一九〇〇～）である。

中村汀女（本名破魔子）は、熊本市の江津湖畔に生まれ、大正七年ごろより句作をはじめたが、結婚後夫の任地に從つて転居、中断した。昭和七年頃句作を復活、九年「ホトトギス」同人となる。戦後「風花」を創刊主宰し、女性俳人として、日本を代表する地位を占めている。

作風は、日常の中から、細やかな女性の感性でとらえ、清新な叙情でうたいあげるもので、三十年を超える句作活動で、なおその資質は純化され、豊かな詩情を失わない。

戦後、家庭婦人の生活と心に、俳句を導入することによって、みずみずしい美意識を育てた汀女の功績は、文学史上、正當に評価されてよい。

汀女を「望郷の俳人」と呼ぶ人もいる。その故郷が熊本市の湖畔と、そこに住む母堂にあることは言うまでもない。

句碑は、熊本市に二つ、千葉県勝浦海岸と横浜の戸塚とに各一ある。生家の碑には、「つつじ咲く母の墓らしに加わりし」とある。

ここで、熊本生まれではないが、放浪の俳人種田山頭火（一八八二～一九四〇）も加えられていい。山頭火は、大正五年、山口県防府から、熊本に妻子と共に移り住み、「雅楽多」という額縁屋を開いた。大正十二年、熊本市報恩寺で出家得度し、行乞流転の中で、自由律俳句をうたい続けた。

「私は、本来の愚を守って愚に徹す。愚に生きるほかなし。愚を生かすほかなし」と、俳句に全人生を賭けた山頭火は、現代俳句史の一つの焦点となっている。

明治維新後、盛んに行われた肥後独特のものに笠句（注一）肥後狂句がある。肥後狂句はあらかじめ、句の笠を指定することを特長とする。

笠句のほか、しりとりでよみ続ける「車つけ」、当意即妙、作句の早いものが勝ちとする「豆入れ」（注二）、いわゆる、エロチックな「バレー句」など、遊びの要素も含みながら、肥後狂句は、広く庶民の間に行われた。

しかし、戦後、肥後狂句を更に一般化し普及した功労者は、中島一葉（一八九六～一九七三）であろう。

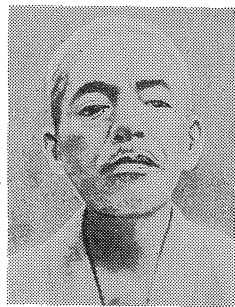
中島一葉は、熊本市二本木町の米問屋に生まれたが、父親の没後後見の叔父の失敗もあって苦勞し、戦後は、相互銀行の専務を勤めている。その間、新聞、ラジオ、テレビを通じて、狂句の選評、「古今肥後狂句評釈」（全五集）の刊行など、肥後狂句の普及に大きな足跡を残した。

肥後狂句は、文獻の極めて乏しい分野で、明治三十六年刊行の「肥後俳句」程度であり、中島の出版は、その意味でも貴重である。現在、地元の新聞はもちろん、県版を持つ全紙が、肥後狂句欄を持ち、熊本人に広く親しまれているのである。

歌壇は、新しい短歌運動の先駆として、大正四年、さきの後藤是山らによって、短歌雑誌「山上の火」が発行され、地方歌誌としては異彩を放った。

これに引き続き、安永信一郎、内田守人、林冷火と、歌誌発行活動が起こり、大正期はまさに短文芸同人誌の最盛期となっている。熊本市水前寺公園の一隅に、「ふるさとになお身を寄する家ありて春迎を居れば鶯の啼く」という、宗不旱（一八八四～一九四二行方不明）の歌碑がある。宗不旱もまた、熊本的な流浪の歌人である。

不旱の在京中の歌壇は、与謝野鉄幹夫妻の明星派、さらに、子規の率いる根岸派の全盛期であるが、不旱はどちらにも属さず、むしろ



早 不 宗
ろ、古典に心を傾け、独自の道を歩いた。「柿本人麻呂評釈」のすぐれた著書がある。朝鮮、中国大陸、台湾と長い放浪の後帰郷、かなり激しい歌壇論評を続けた。歌集「筑摩鍋」や「荔枝」の孤高な格調は、他の追随を許さぬものがある。

晩年、貧困に苦しみ、家族も離散するという悲運の中で、昭和十七年、自ら消息を断つたのである。

安永信一郎（一八九二～）は、家業の欄間彫刻を営む傍ら文学を志向し、大正六年「水鏡」に入社、十一年幹部同人となる。昭和三年、中央総合誌「短歌雑誌」に発表した作品は、若山牧水の「誌歌」にも、新進歌人として紹介され、昭和五年、日本歌人協会会員となった。

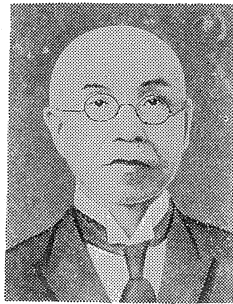
戦中、戦後を通して作歌活動及び熊本歌壇の指導を継続し、二十二年、歌誌「椎の木」を創刊主宰した。以来、長女路子（日本歌人協会員）と共に二十八年間、百六十二号を刊行して、熊本歌壇の中心となっている。

上田英夫（一八九四～）は、出身は兵庫県であるが、大正十年、五高教授として着任以来五十四年間、短歌活動を通じて、熊本文芸界の主導的位置にあった。五高の文芸活動はどの分野においても、

どの時代でも、やはり核のひとつとなってきたのである。

詩壇では、異色詩人測上毛銭（一九一五～一九五〇）がある。毛銭は、関節カリエスで病床に仰臥したまま、十六年間詩を書きつづけた。

昭和二十三年出版された「毛銭詩集」は、日本詩壇に大きな反響を呼んだのであるが、三十五歳の若さで逝った。



犬 童 球 溪

県内の水俣市にある毛銭の墓標には、彼の意志で、表に「病床詩測上毛銭之墓」、裏面に「生きた、臥た、書いた」と記してある。

音 楽

「故郷の魔家」「旅愁」の作詩者として知られる犬童球溪（一八七九～一九四三）は、人吉市の出身。明治三十四年熊本師範卒後、東京音楽学校師範科へ入学。翻訳と写譜の仕事しながら、苦学の末、明治三十八年卒業、以後、昭和十年退職するまで、学校音楽の向上、西洋音楽の普及に大きな功績を残した。生涯の作詩作曲は、二百五十曲を超える。

令息の梅沢信一は、熊本大学教育学部教授として、現在、熊本音楽界の中心的存在である。

明治四十二年東京音楽学校を卒業した内藤清五は、海軍音楽隊に

入り、のち音楽隊長となり「軍艦マーチ」の作曲など大いに活躍した。

邦楽では、我が国邦楽史上、不出世の名匠と言われた名譽大檢校美須之郡長谷幸輝（一八四二～一九二〇）があげられる。長谷大檢校は、熊本市に生まれ、九州における生田流の中心人物として、多くの人材を育成した。又、地唄三味線を改良創案して、全国にその「九州三味線」を普及させている。若くして朝鮮に在った、琴の宮城道雄も何回となく教えを乞いに來訪しているほか、川瀬里子、福田栄香、中津栄子など、現在第一線の三絃奏者を数多く養成した。尺八、琴古流の鬼才鳥井虚霧洞（一八二二～一九七〇）らも、その薫陶を受けた者たちである。

その虚霧洞門下で、後に日本音楽学校尺八科へ行った吉田晴風（一八九一～一九五〇）も、又、日本的尺八奏者となっている。

大正九年、新日本音楽と銘打って、本居長世、宮城道雄と晴風の三人で開いた発表会は、大センセーションを起こしたのである。

芸 能

日本舞踊の鈴木鈴子（鈴木流家元、一九〇〇～）は、東京生まれで、作家広津柳浪の姪にあたり、広津和郎とは従兄弟になる。大正十二年、遠く熊本鈴木医師に嫁すまで、有楽座、あるいは明治座の舞台で、華々しい活動を続けたのであるが、結婚後今日まで熊本に鈴木流舞踊の根を下ろした。

鈴木筆子は、大正二年、有楽座入所。大正六年、叔父柳浪の紹介で、坪内逍遙の新文芸協会に入る。即ち、明治から大正にかけて、近代芸術としての新舞踊劇運動が、まさに全盛期を迎えた時代に、その青春を過ごしたのである。

昭和五年、熊本市に鈴木舞踊研究所を開設、戦中、戦後を通して舞踊——特に家庭舞踊とも呼ぶべき舞踊の大衆化を成し遂げた。

同様、宮崎県高千穂の生まれだが、熊本に嫁して、地方における日本舞踊の普及振興をはかった藤間勘太女（一九〇九～）も、今なお、熊本舞協会理事長として活動している。

肥後の芸能のうち、独特なものとして、茶道の肥後古流をあげなければならぬ。細川は説明を要すまでもなく、大名でも優れた文人の家であり茶道における位置も極めて高かったのである。古流は利休直伝の茶道として、その伝統を尊重し今に伝えているのであるが、古市家十一世武田元熙、小堀家十三世小堀富夫、古田家十世古田正秋の古流三家をもって伝承している。

能楽は、茶道と並ぶ伝統芸能で、細川は、喜多・金春の二座を召し抱えたので、この二座が主流となって、明治期における喜多流の友枝三郎、その子為城、金春流、桜間伴馬、その子弓川と、いずれも日本能楽界の最高峰をなす人物を輩出している。

桜間伴馬（のち左陣）（一八三五～一九一七）は、豪壮な芸風で、演能一千五百回、天覧能十数回に及び、宝生九郎、梅若夷と共に明治の三名人と呼ばれた。又、友枝三郎（一八四三～一九一七）は、

能聖と呼ばれたこれも名人の一人である。

左陣の子、桜間弓川（一八八五～一九五七）も、天才的能楽師で左陣の甥、桜間道男（人間国宝）は、今なお日本能楽界の重鎮として活躍している。

熊本在住では、喜多流塩津清人、金春流松井閑花（いずれも無形文化財保持者）らが、活動しており、熊本能楽のレベルを高からしめている。

* * *

以上、本文では、原則として熊本県出身者で、我が国近代文化史に、あるいは、熊本の文化に大きな影響を与えた人物を選び、また本県の生まれではないが、熊本と深い関係があり文化的に影響の大きかった者も加えた。なお、戦後から現在にかけて活躍中の人で、かなり割愛したものがある。

（注1）笠句（かさく）

与えられた句題（笠）を盛り込んだ狂句。この場合、句題は必ず冒頭にのみ込むのが通例である。現在は、肥後狂句と呼ばれ親しまれている。

（注2）豆入れ

四座の中央をさるを置き、与えられた句題に対し、狂句ができしだい持っている豆をさるに投げ込み、一番を競い合うもの。

人物については、主として次の資料によった。「熊本県史」「日本談義（荒木精之）」「肥後人名辞典」△写真提供／熊本日日新聞社（熊本県文化協会理事）

人物を中心とした

文化郷土史

— 大 分 県 —

狭 間 久



一 概 観

大分県（豊前国の一部と豊後国）は、古代においては、宇佐神宮の巨大な勢力をバックに、けんらんたる仏教文化が花開き、そのすぐれた文化遺産は、今も国東半島や臼杵石仏などにしのぶことができる。

中世には、九州の雄・大友氏の本拠地として栄え、特に大友宗麟のころは、日本におけるキリシタン文化の一つの中心地となり、西洋の音楽、演劇、美術、医師等が真っ先に紹介された。

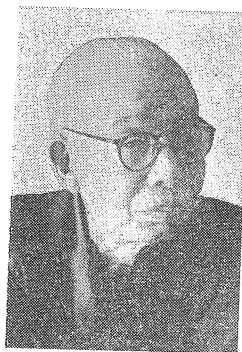
古代・中世を通じて、大分県は宇佐神宮や大友氏といった大勢力の拠点として、経済的にも文化的にも大いに栄えてきた。ところが、戦国末に大友氏が滅亡して事情が一変した。大分県は八つの小藩と天領などに細分化され、虐待期を迎える。江戸時代には貧しい小藩がお互いを監視し合い、足を引っぱり合った。かくて明治維新にも取り残され、全く目だたない後進県、貧乏県として、大分県は生まれた。しかし経済的・産業的に貧しくなったことは、必ずしも精神面、文化面の貧困さを意味しない。古代・中世の文化的伝統は、小藩分立の暗黒時代を通じて、また明治以降の貧乏県時代を通じて、決して絶えることなく、力強く脈打っていた。それは、たとえば、江戸時代に三浦梅園（杵築藩）、帆足万里（日出藩）、広瀬淡窓（天領日田）、田能村竹田（岡藩）、あるいは前野良沢（中津藩）、麻田剛立（杵築藩）、大蔵永常（天領日田）といった第一流の先哲・学者を続々と輩出したことからも裏づけ出来るだろう。この学問の流れは福沢諭吉（中津藩）に受け継がれ、諭吉を中心に、

小幡篤次郎、中上川彦次郎、荏田平五郎、矢野文雄、朝吹英二ほか、数々のすぐれた人材を明治の日本へ送り込んだ。大分県というパツとしない貧乏県から、日本を代表するようなスケールの大きい文化人、芸術家が続々出てきたのだが、これは偶然だろうか。古代・中世の雄大な文化的伝統が大分県人の血の中に脈打っていたからではないかと思われる。

こうした前提を踏まえて、明治以降の大分県の文化の歩みを、美術・音楽・文芸の三ジャンルにしぼって、展望してみよう。

二 美術

大分県の実術には、いくつもの大きな流れがあるが、それらの根源は、田能村竹田（寛永六年—天保六年—一八三五年）にあるといえよう。竹田は岡藩の藩医の二男に生まれ、二十三歳で藩校・由学館の教授になった秀才。秀才だが人情味厚く、農民一揆に同情。藩政改革の「建言書」を二度にわたって提出したが黙殺され、藩校を辞職。以後、文人墨客として好きな絵や詩や書や茶の世界に没入。頼山陽らと交友し、「豊後南画」の祖となった。竹田の教えを受けて高橋草坪（享保三年—天保五年—一八三四年）、帆足杏雨（文化元年—明治七年—一八八四年）、田能村直入（文化二年—明治四〇年—一八八四年）、平野五岳（文化六年—明治二六年—一八八四年）といったそうそうたる逸材が世に出、明治の初め、大分県は東京・京都・大阪・長崎と並ぶ「南画王国」だった。竹田の弟子のうち帆足杏雨、平野五岳、後藤碩田は大分県にあって弟子を養成したが、田能村直入は京都画壇へ進出。画学校設立運動



福田 平 八 郎

勉強をしていた雨郊の下宿先が平八郎の家。平八郎は絵にかけける雨郊の情熱に打たれて、自らも絵の道を選んだ。『絵かきなどんでもない』と反対する両親を説き伏せて平八

を起こし、明治十三年、日本で最初の公立画学校として創立された京都府画学校の初代校長となった。また直入は明治二十九年富岡鉄斎らと日本南画協会を設立、南画の振興をはかった。しかし明治末になると南画は振わなくなる。そんな中で、直入の弟子、田近竹郎（元治元年—大正二年—一九一三年）は新しい南画を開拓し、文展で活躍した。美術評論家田辺憲三は竹郎の三男。竹郎の弟子・草刈樵村、阿南東林らは大分県へ帰り、「豊後南画」の伝統を守りつつ、後進の指導に当たり、県画壇に大きく貢献した。

大分県の実術は、江戸末期から明治の初めまでは「南画」一色にぬりつぶされた感があった。この「豊後南画」に学び、あるいは反発し、乗り越えようとして、新しい美術家が次々と育っていった。そういう新しい美術家として、日本画の福田平八郎（明治二年—一九一三年）が第一にあげられよう。福田平八郎を語るうえで、彼の才能を一番最初に見出した美術教師・首藤雨郊（明治十三年—昭和十八年—一九四三年）が忘れない。大分師範を卒業後、小学校の教師をしながらこつこつ絵の

郎を京都の絵画専門学校へ進学させたのも雨郊だった。平八郎は美校を抜群の成績で卒業、大正十年第三回帝展で、水をかかずに遊ぶ鯉を描いた実験作「鯉」で特選、以後「鶴」「蓮」「雨」など、清新な名作を次々と生み出し、日本画壇の巨峰となった。「鯉」で特選をとったあと間もなく平八郎は帝展審査員となるが、首藤雨郊は先生をやめて京都へのぼり平八郎に弟子入り。画家として懸命に精進、帝展にも三回入選した。才能の点では雨郊は平八郎に遠く及ばなかったが、一途に打ち込む純粋な情熱は、平八郎のほか多くの教え子に強い感銘を与えた。京都では平八郎、雨郊を中心に、彼らの先輩格の高倉綱庵や牧皓堂はじめ、古荘九汀、溝辺有巢、本広礼、正井和行等々といった県出身の若い画人がグループをなし、勉強し合った。南画とは別のこれら新しい日本画家たちは、県画壇へ新しい日本画を紹介し、大きく貢献した。なお平八郎の中学時代の美術教師に日本画の松本古村（明治七年—昭和二年）がいるが、この人はなかなかの事業家。大正十年県内の絵かきを結集して初めて大分県美術会（のち協会）をつくった。県美術協会は何回かの改組をへながら現在まで県画壇の主流として多くの画家を育ててきた。

平八郎の絵と豊後南画の両方から強い感化を受けて育ったのが高山辰雄（明治四五年—一九二二）である。平八郎の生家の近くに生まれ、平八郎のような画家になりたいとあこがれた少年の日の夢を、見事に実らせた画家である。平八郎同様、誠実で真摯な制作態度は、県下の若い画人に無言の励ましを与えている。

次に洋画を見てみよう。大分県の画家で最初に油絵を手がけたのはおそらく藤雅三（嘉永六年—大正七年）だろう。藤は日本洋画壇の草

分けといってもよいが、異国に客死したため、今では忘れられた存在となっている。藤は臼杵藩に生まれ、初め帆足杏雨に師事して南画を学んだ。その後どういふ事情があったのか明治九年、工部省付属美術学校に入学、洋画に転向した。浅井忠、松岡寿、小山正太郎らと学び、明治十八年渡仏、〃外光派〃の巨匠コランに師事した。コランに弟子入りする時、通訳として連れていったのが黒田清輝。法律を勉強していた黒田は藤の影響で画家へ転向、やがて久米桂一郎もコランに弟子入り、藤・黒田・久米の三人が〃外光派〃を学んだ。黒田と久米は明治二十六年帰国、日本の洋画壇に〃外光派〃を紹介しセンセーションを巻き起こしたことはあまりに有名。藤はその後もフランスにとどまりサロンに出品して好評を得たりしていたが、のち渡米してアメリカで没した。

藤が学び、黒田清輝らが日本へ伝えた〃外光派〃の洗礼を受けて、片多徳郎（明治二年—昭和六年）がデビューする。片多は豊後高田市生まれ。旧制大分中学で松本古村に絵をならい、古村のすすめで東京美術校へ。黒田清輝の指導を受け、在学四年間、文展に連続入選、入賞。花々しいスタートを切った。いずれも〃外光派〃の影響を受けた明るくソフトな絵だったが、片多はやがてこれにあきたらなくなる。幼いころから知らず知らずに影響を受けていた東洋的な南画（水墨画）の世界に引かれていく。そして油絵で東洋的なものを表現するという特異の画風を確立。大作「霹靂」や「伎女舞踊図」「花下竹人」は文展・帝展で特選となり、三十二歳の若さで帝展審査員となった。片多は天才肌、親分肌で、彼のアトリエには県出身の洋画志望者がグループをなした。梅藤種男、菅一郎、保田善作、後

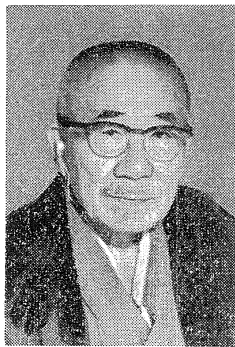
藤真吉、江藤純平、三浦直政、そしての中には佐藤敬、進来哲ら。県洋画壇を育てた画家は、よかれあしかれほとんどが片多の影響・感化を受けたといつてよい。また片多は美校の同級生山下鉄之輔（福岡県）を旧制大分中学の美術教師に推薦したが大正初期から昭和初期まで、山下鉄之輔が県文化界の発展に残した影響は非常に大きなものがあつた。日本画家高山辰雄もこの山下から強い感化を受けた一人だが、美術家に限らず、作家の林房雄、音楽家の園田清秀らと、その影響力は幅広かった。ちなみに山下鉄之輔同様、県外から大分県へやってきて大きな影響を残した画家としては武藤完一、武田由平（ともに岐阜県出身）がいる。ともに版画の大家で、二人とも現在は大分県に籍を移している。片多徳郎を中心としたグループの中で大きな存在は権藤種男（明治四年—昭和四年）だった。天才肌で、むらっ気が多く、気性の激しい片多とは対称的に、温厚で、堅

実。人望もあつた。東京美校の師範科を出て（片多は本科）大正六年第二回帝展で「徒然」が特選、東京美校の講師に迎えられた。しかし戦時中大分へ疎開、そのまま郷里に居ついて、戦後は県美術協会会長として県画壇の再建に大きく貢献した。権藤の教え子に宮崎豊（明治三六年—一九三三）がいる。宮崎は権藤の死後、県美術協会を背負い、現在も会長を勤めている。

片多は昭和六年、四十六歳で自殺したが、大分県洋画壇はこの片多の影響下に育っていったといつてよい。もっとも片多にしろ、権藤にしろ〃官展系〃である。この〃官展〃に反旗をひるがえして成長した画家が佐藤敬（明治三九年—一九〇六）である。中学時代、山下鉄之輔からゼンヌやピカソ、ブラックを教えられて決定的影響を受け、東京美

校本科へ入学。片多のもとへ出入りしたが、片多に批判的だった。昭和五年渡仏。フランスから帝展へ出品した「レ・クルン」が特選。同九年帰国したが、折りから帝展改組が問題化していた。元気のいい佐藤は猪熊弦一郎らと〃反帝展〃を打ち出し〃新制作派協会〃を創立して活躍した。戦後、佐藤は再び渡仏。現在もパリで描きつづけている。〃反官展〃ということでは糸園和三郎（明治四年—一九二二）、宇治山哲平（明治四年—一九二〇）（幸寿（明治四年—一九二二））ら個性豊かな画家たちがいる。このうち宇治山哲平は昭和三十六年以来、別府市に住住。地方に腰をすえて特異の抽象作品を制作しつづけて、中央画壇でも高く評価された。大分県立芸術短大学長として、また九州国画会の代表として、大分県のみならず九州画壇の指導者として活躍している。

日本画、洋画と見てきたが、大分県は彫刻の分野でも一つの伝統を持つている。朝倉文夫（明治六年—昭和九年）の築いたものだ。朝倉文夫は兄・渡辺長男、弟・大塚辰夫と兄弟三人が彫刻家。文夫の兄・長男は優等生タイプで、東京美術彫刻科を明治三十二年卒業、銅像制作で名声を



朝倉文夫

はくした。文夫はこの兄より九つ年下。中学を落第し、偉大な兄の助手にでもしてもらおうと上京。たちまち彫刻の魅力にとりつかれ、東京美校彫刻科選

科へ進学。根が器用だったと見え、アルバイトで彫刻の置き物を次々とつくり、同級生からは「職人」と悪口をいわれたが、かせいだ金でアトリエを新築したから立派なもの。美校卒業後、明治四十一年第二回文展から連続七年以上位入賞をつづけ、三十四歳で審査員となった。その技巧のうまさは他の追従を許さなかった。「墓守」「闇」「若き日のかけ」「いづみ」などが代表作。

朝倉文夫は線の太い親分肌の人物。自分のアトリエに県出身の美術家の卵をいそうらさせ、指導に当たった、朝倉塾の始まりである。県出身の彫刻家、日名子実三、片岡角太郎、清水彦太郎、河村清司、長谷秀雄、岩男順らがこの朝倉塾から育っていった。画家の江藤純平や三浦直政らも東京美校の学生時代は朝倉塾にいそうらうしていた組だ。

朝倉文夫は中央で活躍する一方、大分県画壇の育成にも尽した。大正十年、大分市で九州沖縄八県連合共進会が開催された時、その記念行事として「九州沖縄連合美術展」が開かれた。この展覧会を企画立案をしたのが朝倉文夫と松本古村らしい。朝倉文夫は片多徳郎、樺藤種男、日名子実三、片岡角太郎ら東京勢や京都の福田平八郎、高倉観雄らを引きつれて帰県。県下の絵かきと合同で、そりいのハッピーに豆しぼりの手ぬぐいを頭に巻き、芸者と一緒に二台のトラックののって大分、別府の中心街をパレードして宣伝。展覧会場にはカガミを打ちぬいた四斗ダルを並べて入場者にタダで酒をのませたので大変な人気を呼んだ。この美術展がきっかけで、大分県では美術が再認識され、松本古村らによって県美術会が結成されることになったわけである。朝倉文夫はさらに、この画期的な展覧会を



滝 廉 太 郎

大分県の音楽家として一番にあげられるのは滝廉太郎（明治二十一年三月六日—一九〇〇年）である。

「荒城の月」「花」「箱根八里」「お正月」など、今も広く親しまれている名曲の数々を残

し、二十三歳十か月の短い生涯を閉じたこの天才作曲家が、大分県の音楽活動に与えた影響は非常に大きなものがある。もちろん直接的な影響ではなく、郷土からこういふすぐれた音楽家を生んだという誇り—無形の影響力が大きいわけだ。ちなみに廉太郎が「荒城の月」の曲想を得たといわれる竹田市岡城趾では、昭和二十二年以来、毎年滝廉太郎記念音楽会が開かれ、この音楽会から藤沼昭彦ら数々のすぐれた音楽家が世に送り出された。また四十五年から小中高校生を対象に滝廉太郎記念作詞・作曲コンクールが実施され、その入選作は廉太郎の命日に大分市で開く記念音楽会で発表されている。「第二の廉太郎」を発掘しようと若い人の創作活動を奨励するユニークな催しである。

滝廉太郎は東京で生まれたが、祖父は日出藩の家老、父は藩の大参事という名門の出。廉太郎が十歳の時、父は大分郡長となり帰県。廉太郎は一年半、大分の学校へ通い、父の直入郡長への転勤とともに竹田へ移った。色白で貴公子然とした風貌でしかも気さくであたたかい人柄の廉太郎はみんなに好かれた。生まれつき手先が器

記念して九州に美術学校を建てよと文部省へ「具申書」を提出。これは実現しなかったが、朝倉文夫はその後も機会あるごとに別府に美術学校を建てよと主張しつづけ、それが実って戦後三十六年、西日本で最初の県立芸術短大（美術科・音楽科）が誕生したわけである。

以上紹介した美術家はほとんど中央で学び中央で名をなした人々だが、大分県に終始土着して高い芸術を確立した人がいる。竹工芸の生野祥雲斎（明治三十二年—一九〇三年）である。竹工芸は大分県の特産品の一つだが、卑しい者のする仕事と、軽べつ的に見られていた。この「竹」に美を見つけ、芸術の域にまで高めようと苦心したのが祥雲斎である。豊後南園を愛し、中国の書画、陶器で芸術を見る眼を養った祥雲斎は、工芸の約束事である「用と美」から、思い切って「用」を捨て、純粹の「美」としての竹芸を追及したのである。その結果、昭和三十一年日展受賞の「怒濤」、三十二年同特選の「炎」を生み出し、「芸術」としての竹芸を確立した。四十二年、竹芸では初めて、日本でただ一人の国の重要無形文化財—いわゆる「人間国宝」に指定された。

大分県の美術の流れは豊かである。このほか書道では平田陽郎、首藤春草、安部遊雲、野田南園、後藤白草らがあり、写真では中央で活躍中の長野重一、県下では大崎聡明、糸井英雄、木村昌斗志、三重野元らがいる。

これらの先輩の指導、感化を受けて現在も次々と新しい優秀な美術家が県から育っていかうとしている。

三 音楽

用でコマ回わしの名人、すでにバイオリン、オルガン、尺八などを自由にひきこなし、人々を驚かせた。竹田時代に廉太郎は音楽家になる決意を固め、明治二十七年東京音楽学校に入学。まずピアノトとしてすぐれた才能を示した。一方、独学独習で作曲を試み、明治三十三年「四季」「荒城の月」「箱根八里」「豊太閤」「幼稚園唱歌」などをかきあげた。翌三十四年四月ドイツへ留学、しかし氣候風土の違いからカゼをこじらせ胸を病んだ。三十五年八月帰国、大分の父母のもとで療養に励んだがついに再起できず、ピアノ曲「憾」を絶作として没した。

廉太郎につづく作曲家としては、民族的作曲家の第一人者、清瀬保二（明治三年—一九〇〇年）がいる。

早世した天才的音楽家として、廉太郎についてあげられるのは園田清亮だろう。大分市に生まれ、東京音楽学校でピアノを専攻。学校の教え方が古いと、ストライキを起こして、学生の要望を認めさせたというサムライ。レオ・シロタに師事し、昭和六年渡仏。西洋人がみな一様に耳がよいのに驚き、その原因は聴覚神経の最も発達する幼児期を音楽の中ですごすからだに気づいた。日本人だとして四、五歳のころから音楽に親しみ、絶対音を身につければ世界的音楽家が出てくるはずだと「絶対音早教育」を考案ついた。帰国後、清亮は実験台に一人息子を選んで、絶対音をたたき込んだ、その成果はめざましかった。この一人息子が、今や世界的ピアニストとなった園田高弘（昭和二年—一九八八年）である。清亮はこの実験を次に大分の子供たちにも実施した。清亮は大分に帰るたび、音楽志望者を集めてピアノのレッスンをみてやっていた。自分が田舎で音楽の勉強に苦勞した

体験があるから少しでも役立てたらと指導に当たったわけだ。清秀のもとには大分師範出の若い教師・法常来、真浄一雄、首藤幸人、園田良徳、田坂保らが集まった、清秀は彼らの協力で大々的な実験を始めた。県ピアノ研究会が結成され、実験の成果が大分でも発表された。父母の音楽熱も高まりピアノをほしいという家がふえた。しかし当時はまだピアノは上流家庭のぜいたく品で一般家庭は手が出なかった。清秀は楽器店にかけあって一括して三十台買収から月賦販売にせよと交渉、ついにこれを実施された。これが日本で最初のピアノの月賦販売である。昭和十年、清秀は実験の成果を東京で発表、楽壇にセンセーションを起こしたが、この時、彼はすでに病魔におかされておられ、その年の暮れ、三十二歳の若さで病没した。この時、一人息子の高弘は七つ。高弘はその後東京音楽学校を卒業、完璧なテクニックで欧米の国際舞台で活躍、名声を確立した。現在西ドイツに在住し、春秋帰国のたびに大分へ帰り、後進のためピアノレッスンをこなしている。父の清秀の遺志を継いだものである。

園田清秀のピアノレッスンを熱心にきいていた中学生がある。声楽家の第一者となる中山悌一（大正九年——一九二〇）である。大分市の医者の八男として生まれ、東京音楽学校のピアノ科を志望したが、木下保が悌一の美声にほれ込んで声楽科をすすめた。木下、ネトケ・レーベの指導でめざましい進歩を見せ、首席で卒業したが、昭和十七年応召。四年間のブランクのあと戦後、その才能は一気に開花した。二十七年ドイツへ留学、ドイツリートをライフワークとした。特に「冬の旅」は天下の逸品、代表作である。三十二年帰国、帰国第一

回のリサイタルを大分で開いた。悌一はそれまで数回にわたり機会あるごとに大分でリサイタルを開き、郷土の後輩の面倒をよくみた。昭和三十六年、県立芸術短大ができると、その講師として毎年帰県して後進の指導に当たっている。

中山悌一門下の声楽家として立川澄人、藤沼昭彦、高抗続、井上節子、古後信二等々、日本を代表する声楽家がズラリ。悌一は自分ではオペラをやらないうえ、二期会を結成、そのリーダーとしてオペラ普及に尽した功績は大きい。こうした県出身声楽家の花々しい活躍が、地元大分の活動を刺激し、昭和四十三年、小長久子を中心に辛島武雄、中山開二、久保不二朗、加藤公康、北村宏通ら音楽関係者が集まって、県民オペラとして「フィガロの結婚」（全四幕）を公演した。県民オペラはその後、「椿姫」（45年）、「カバレリヤ・ルスチカーナ」（46年）を公演。四十七年は「蝶々夫人」、四十八年は初の創作オペラ「吉四六さん」（清水作曲）を計画、今や地方オペラ運動のモデルケースとして大分県の県民オペラ運動は全国的に注目されている。

大分県からすぐれた音楽家が出、また地元の活動が活発なかげには、すぐれた音楽教師がいたことも忘れられない。大正から昭和初期の草分け時代の今吉惺、昭和十年代から戦後までの藤沼恵、千本延隆、戦後の辛島武雄、小長久子等々。滝藤太郎のまいた種は、今、見事に結実しつつあるといえよう。

四 文芸

大分県の文芸を語るのには、まず福沢諭吉（天保五年——明治三十四年）を

あげると、多少の異和感あるかもしれない。諭吉の存在はあまりに大きく、文芸の一ジャンルに押し込めてはかわいそうである。そうはいっても、諭吉の広い意味の文化的影響を抜きにしては、明治時代の大分県文芸は語れない。諭吉に限らず、明治以前の文化人は、同時にすぐれた文学者である場合が多い。たとえば、広瀬淡窓は教育者として一流の人物だが、詩人としても第一級だった。美術であげた田能村竹田も、詩人としてすぐれていた。三浦梅園、帆足万里、毛利空桑等々、いずれをとってもすぐれた文学者の一面を持っている。ただ諭吉は、これら先哲とは違った新しさを持っていた点で、影響力は一層大きかった。その新しさとは、たとえば諭吉が漢文を排して、話しことばに近い文章を書いたこと。明治文学の出発は、言文一致運動からといわれるが、その草分けが諭吉だった。諭吉自身は文学をあまり高くかっていたようだが、諭吉の「福翁自伝」などは、諭吉の意図とは別に、自伝文学の最高傑作の一つに数えられよう。

諭吉の教えを受けて、県出身者の中から明治硬文学の代表ともいえるべき「政治小説」の第一人者矢野龍溪（文雄）や藤田茂吉、箕浦勝人らが育った。

「経国美談」の著者、矢野龍溪（嘉永三年——昭和六年）は佐伯藩出身。幼いころ父から「ロビンソン漂流記」や世界地図を教えられ、洋学勉強のため諭吉の慶応義塾に入学。県出身の小幡篤次郎、中上川彦次郎、莊田平五郎らと政治活動を行なったが、文学へのあこがれは捨てなかつた。明治二十二年、無名の文学青年が生活に困まっているのを助け、郷里佐伯の学校教師に世話した。この青年が国木田独步である。独歩は約一年間佐伯に滞在、佐伯の美しい自然と人情が彼

の文学的出発点となった。処女作「源叔父」ははじめ「鹿狩」「春の小鳥」「小春」「忘れえぬ人々」などは、佐伯の生活から生まれた独歩の名作である。

龍溪の後輩に藤田茂吉（嘉永五年——明治三十五年）と佐藤蔵太郎（安政五年——昭和七年）がいる。ともに佐伯出身。秀才だが家の貧しい茂吉を東京へ呼び寄せ、共同生活しながら慶応義塾に通わせたとが龍溪である。茂吉の成績は抜群で諭吉の推薦で郵便報知新聞の主筆に迎えられた。二十四歳の時である。その後、茂吉は龍溪にならって小説「済民偉業録」を書いたがあまり成功せず、むしろ歴史書「文明東漸史」や翻訳「聚思談」の方が高く評価された。

佐藤蔵太郎は龍溪の助手として「経国美談」を口述筆記したが、明治十七年「悲風世路日記」を書き、新しい人情小説として評価された。蔵太郎はその後、大分へ帰り地元紙で論陣を張り、また郷土史の研究で数々の功績を残した。

以上は諭吉の影響を直接、間接受けて育った開化期の文学者である。彼らの書くものはがいて「硬文学」だったが、ぐっとやわらかいところでは、口演童話の草分けで「童話のおじさん」として親しまれた久留島武彦（明治七年——昭和三十五年）が出た。森藩（玖珠町）の殿さまの子孫として生まれ、キリスト教の洗礼を受けた理想家肌の人。明治の後半から巖谷小波らと子供の文化事業に打ち込み、わが国児童文化運動のバイオニアとなった。

久留島武彦の感化は大分県に深く根をおろし、童話・童謡運動が盛んとなる。大正の「赤い鳥」を中心とした児童文学のぼっ興期に、大分では岩尾卓三（明治三十五年——昭和九年）が出

て活躍した。岩尾は小学校の先生をしていたが、児童に童謡を書かせ、その成果をもとに大正十年大分童謡研究会を結成。童謡教育の普及に尽した。岩尾が火をつけた童謡運動の中から育ったのが後藤繡根（明治四一年—）。早熟な少年だった繡根は大分師範に入学した十三歳の時、童謡集「空の羊」を自費出版している。その後、昭和二年雑誌「童謡詩人」を発行、全国の童謡作家に参加を呼びかけ、昭和六年までこの雑誌を続けた。繡根は戦後二十一年東京で日本童謡会を結成。雑誌「童謡」を創刊し、戦後の児童文学振興に大きく貢献した。

小説の方では野上弥生子（明治一八年—）が第一人者。臼杵の旧家に生まれ、明治女学校を卒業。同郷の野上豊一郎（明治一六年—昭和二五年）と結婚、豊一郎を通じて夏目漱石の指導を受けて「縁」でデビュー。大正十一年臼杵で実際に起こった事件をもとに書いた「海神丸」が出世作となり、以後、着実に作家として成長。「迷路」「秀吉と利休」など数々の名作を発表した。夫の豊一郎も初めは小説を書いたが、のち能の研究で一家をなした。



野上弥生子
ほかに県出身の作家としては林房雄（明治三六年—）や鹿地亘、三角寛、石川利光ら、異色の一匹狼的な作家がいるが、いずれも郷土の文芸活動とは無縁である。

一方ホトトギス系では、古賀農生、井上柿巷、岡嶋田比良、小池森閑、渡辺一魯、遠入たつみ、平田寒月らが着実に活動をつづけた。

戦後の俳句活動で特記されるのは、田原千暉（大正二三年—）による現代俳句運動である。千暉は初めホトトギス俳句をから出発したが、花鳥風詠にあき足りず、生活に密着した現代俳句を求めて二十七年「石」を創刊。若い俳人の共感を得て、大きな影響を残した。

詩では、北原白秋夫人として、白秋大成のかけの功労者といわれる江口章子（明治二一年—昭和二二年）がいる。美貌と文才に恵まれた才媛だが、白秋とはささいなことからケンカ別れ。以来、放浪生活を送りつつ、詩文集「女人山居」「追分の心」を残した。

大正時代、一世を風靡した安西冬衛らの短詩運動に参加して活躍した滝口武士（明治三七年—）は国東半島の武蔵町出身。昭和十四年郷里に帰り、県詩壇の中心的指導者として現在も活躍している。中央では活躍し戦後郷里へ引き揚げた詩人としては加藤真一郎（大正三四年—）の存在が大きい。戦後、県下の詩人を結集して詩誌「エトワール・ド・メール」を出したが、四十五年には県詩人協会を結成し、会長を勤めている。

地元において着実に活躍を続けている詩人としては菅藤三郎（大正二三年—）が貴重な存在。戦後二十三年詩誌「心象」を創刊、途中休刊はあったが現在まで着実に発行を続け、多くの新進を育てた長谷目源太、仙川竹生、郷司幸雄らが「心象」によって。

このほか川柳では内藤凡柳（明治三四年—）が大正末から現在まで、大分県柳壇の指導に当たり、多くの川柳作家を育てた。但謡では堂園壺中庵の存在が大きく、その教えを受けた土屋北彦は戦後三

その点、地元で着実に活動が続けられているのは短文芸関係。短歌が最も盛んだが、〃旧派和歌〃では物集高世（文化一四年—明治二二年）の存在が大きい。〃短歌革新〃期には筑紫久嶺、平島与志美、松田晩夏らの情熱歌人が出て新しい短歌を詠んだが、この流れは葉山耕三郎、浅利良道、瓜生鉄雄、原常雄らに受け継がれる。このうち浅利良道（明治三〇年—）は、終始県内にあって後進の指導に当たり、県歌壇の興隆に大きく貢献した。浅利が、原、瓜生らと昭和三年全県下の歌人を結集して創刊した歌誌「大分歌人」は県歌壇史に一エポックを画するものだった。浅利は戦後二十三年歌誌「現象」を創刊。のち「朱竹」と改題され、藤野武郎があとを継ぎ、現在まで続いている。戦後、県歌壇のまとめ役として活躍したのは葉山耕三郎で、二十一年県歌人協会（のち県歌人クラブ）を結成。二十三年には歌誌「歌帖」を創刊した。また田吹繁子も二十三年「八雲」を出し、この三誌は現在も安定した発行を続けている。

俳句は、江戸時代、日田に中村西園、広瀬月化ら蕉門の流れをくむ有力俳人が多く、大きな勢力を振った。これに対し子規の俳句革新の洗礼を受けて、玖珠の足立球谷、豊後高田の高井左川、臼杵の北野丹楓、日出の宇佐美藤泉らが明治時代に活躍。これらホトトギス系俳句に対し、河東碧梧桐、萩原井泉水らの〃新傾向俳句運動〃に賛同して長尾露馬（明治二七年—昭和七年）が大正から昭和初期に大活躍した。しかし露馬は三十八歳の若さで病死。そのあと露馬の革新運動に磯崎藻二、津田露色らに引き継がれた。露色は戦後二十一年、口語自律俳誌「虹波」を創刊、現在まで口語俳句の普及のため孤軍奮闘している。

十三年杵築市で日本俳諧作家連盟を結成、雑誌「日本俳諧」を出して氣勢をあげたが、俳諧は年々ふるわなくなっている。

県下の創作活動は戦後二十六年、加藤真一郎、小松葉洲邦、佐藤太有、堀賢司、岩津洋一郎、山本又平、志村泰治らが県作家協会を結成して、「文芸風土」（のち「風土」「東九州文学」）を出したが、結局長続きせず、あまり見るべき成果はあがっていない。

（大分合同新聞文化部記者）



人物を中心とした

文化郷土史

—宮 崎 県—

黒 木 淳 吉



はじめに

宮崎県は古名を「日向」とよび、神話伝説の地として知られている。県内各地に、西都原古墳群をはじめ古墳、遺跡が数多く散在し、古代の繁栄を物語っている。また国分寺跡、荘園の歴史などを裏付けるものが残っている。しかし伊東家と島津家の争いから日向は荒廃し、幕末では延岡、高鍋、飫肥、人吉、島津支藩と天領という小藩分立の形となり、各藩が貧困のなかであえいだ結果となった。それに加えて、度重なる台風の襲来が、さらに貧困に度を加え、また住民たちに一種の働く意欲をうしなわせ、倦怠とあきらめを抱かせたともいえる。とはいっても、亜熱帯に近い温度に多雨は山林王国とかつていわれたように、樹木をふとらせ、自然の恩恵に浴していた。そのため各藩とも産業振興に精いっぱい、文化まで手が及ばないのが実情ともとれる。わずかに、延岡の内藤藩が貧乏藩といわれながら、算数と俳句では名をなした人物が出ている。平城主から延岡に転封されてきた内藤家であるが、義泰が風虎と号し、その嫡子義英（露沾）、弟義孝（露江）とあり露沾の子政樹（沾城）が日向転封に際しては家臣中の多くの俳人が従ってきたという。沾城の養子政陽（鳳翔）は子がなく尾張大納言の弟政脩を養子としたが、これが有名な暁山である。一方、南の飫肥藩伊東家でもその後、日向の俳祖小村西卜が生まれ、その子西雪は飫肥から宮崎の城ヶ崎に移り、その子西粒とてろって俳諧の道を歩いている。

これらの状勢のなかでむかえた明治のスタートは隣りの雄藩島津藩を有する鹿児島にくらべて余りにも政治財政面で遅れをとり、二度三度の曲折をへて、宮崎県の誕生は明治十六年になっている。しかも、北は大分県境と難所宗太郎峠で、南は鹿児島と霧島山、東は荒海日向灘、西は九州山脈と地理的にも文化の移入に条件が悪く、まさしく文化のへき地と長年よばれてきた。日豊本線が全線開通したのが大正末期（大正十二年十二月十五日）である。昭和七年になり延岡に日窒火薬が操業開始（現旭化成）してようやく工場らしいものができ、近代産業が活動しはじめたのである。

昭和二十九年航空大学が開校し、ようやく空路がひらけ、観光県としてクローズアップされはじめ、「縁と太陽」の県、「神話と太陽」のふるさとといわれ、今日にいたっている。

その間、宮崎が生んだ大臣、あるいは偉人といえ、確かに少ない。亜熱帯のビローの島青島は知っていても、宮崎といえは仙台のあるところですか、といった笑い話さえ残っている。ただ工場といえば旭化成（延岡市、日パ（日南市）の二工場はなく、ふりそそぐ太陽と青い海、緑の広がる宮崎は、いま、むしろ文化に適應した県として再認識されようとしている。皮肉といえはいるが取り残された自然の資源がユニークな存在となったと同様に、芸術文化の面でも、土着性、あるいはローカル性といった見地から、そのユニーク性が發揮されているともいえる。たとえば前衛画家として、池田満寿夫や饅頭師といわれる瑛九など、この太陽のくにが生んだ

ユニークな画家であろう。あるいは南方文学を提唱した中村地平にしても、同じことがいえる。

明治以降、各分野別に主な人物をひろってみよう。

美術

明治時代は旧藩時代の尾をひいて、都城島津藩の狩野派、円山派、延岡内藤藩の文晁派の画家たちがいるが、やはり本格的なものは大正から昭和初期になる。もちろん、いずれのくにでも同じであろうが、近代文化の芽生えは日本画家が最初に誕生してきているようである。都城島津藩士の山内多門（一八七八～一九三二）は十五歳で高小を出、十六歳で準訓導の資格をとり、明道小で助教を勤め、狩野派の絵を学び、二十一歳のとき川合玉堂の門に入った。一年のち橋本雅芳の門を叩き、二年後「鬬鶏」が第十一回絵画共進会展に入選した。しかし生活は苦しく、一日にパン一切れという貧しさだったという。明治四十年、二十九歳のとき文展第一回に「驟雨」が入選、第五回「日光四季」が三等賞一席に入賞、文部省買上げとなり、ようやく画道への道がひらけた。大正八年、四十二歳の作「天龍四季」が帝展第一回の推薦となった。このとき、故郷に残してきた母が亡くなり、多門は深い感慨にふけたという。多門の山水は古典に基礎をおき、忠実な写生につとめて、水墨に色彩におのおのの特徴を發揮したと師玉堂が激賞している。彼は長身で眼光鋭く、無口で、寄りつきがたい風貌をしていたというが、心はやさ

しく後輩の面倒をよくみたといわれ、門人のなかから、岩橋英遠、山下蔵、大野重幸などが出ている。

このほか川端玉章の門下に入り、川端画学校の創立に参加、のち教授となり、帝展、文展に入選した山水画の益田玉城（一八八一～一九五五）がいる。この弟、益田重城（一八八三～一九二二）は十八歳のとき渡米、ハリウッドに住んで七年間洋画を勉強、磁器などに彩筆、東京美術工芸展に銅賞をえたが三十歳で死んでいる。本格的な洋画家といえ、伊達孝太郎（一八七八～一九六四）であろう。宮崎師範を出て、市内の教師から佐賀の小城中学校で絵画を教え、黒田清輝に師事、明治三十五年八月セントルイスでひらかれた大博覧会見学に渡米して、そのまま留学。セントルイス大学四年のとき、ニューヨーク美術学校が全米から選んだ十人の特待生のなかに入り、同四十二年卒業。パリに行くつもりだったが、第一次大戦でやむなくセントルイスに帰り、ゴールドマンという肖像画家につかえた。大正九年帰朝、宮崎で六十九点に及ぶ個展をひらいて郷里の人を驚かせた。大震災にあって郷里に一人帰るが、鹿児島に移り、鴨池にアトリエを建てて住んだ。戦後は鹿屋の米軍基地で肖像画を書いて生計をたてたという。このあと、鱈利彦（一八九四～）や女流の落合ラン子（一八八七～一九三八）のほか、渡辺謙二郎（一九〇〇～一九四三）同小五郎（一九一～一九四一）と若年で死んだ兄弟がいる。

塩月桃圃（一八八六～一九五四）は宮崎師範を出て美々津で教師

をしているとき、都農の塩月家の婿に入り、東京美術学校に進んだ。明治四十五年卒業して大阪の浪華小学校の図画教師をつとめたが、赤いトルコ帽、桜の枝にひょうたんをぶら下げて散歩したりした。大正四年松山の愛媛師範の教師に転任、同五年文展に入選した。高浜虚子の随想集のさしえをかいいたり、自宅にモデルの舞子が数人遊びにきたりして話題をまいた。大正十年台湾に渡り、台北高校と台北一中の教諭をし、台湾総督府展を創設、台湾美術界の重鎮となった。昭和十七年夫人を亡くして再婚、終戦で郷里宮崎に引き揚げ、県展の創設を働きかけ宮崎大学の講師などをつとめた。宮崎の町でもバルシカを着たり、独特の逆まきヘアスタイルで話題をよんだ。昭和二十九年九月号の「みづえ」で柳亮氏が「年齢をきいてびっくりしたほど艶と情熱がみずみずしく筆に残っていた」とのべている。台湾時代の蕃人をえがいたフォービックなフォルム、南で育ち南に住み生き死んだ塩月桃圃の作品に、ゆたかな色彩があふれているのは当然であろう。人間的魅力とともに宮崎で愛された異才の一人といえよう。

小野彦三郎（一九二二～一九七二）は小林中学校から川端画学校、帝国美術学校に進み大久保作次郎に師事、昭和十六年文展入選、同二十三年日展で特賞を受け翌年から招待となり、同二十八年政府留學生でフランスに渡り、同三十年に帰国している。ボナールに傾倒、フランスではジャック・ピオンを研究していた（渡辺武夫氏の「小野彦三郎を偲ぶ」といわれるが、晩年は公募団体とは無縁の立場で、ひとり画業にとりくんできたともいわれる。むしろ浮世絵

的な日本的油絵をめざしていたとされる作風であった。

このほか、大正十四年宮崎の木城に武者小路実篤が「新しい村」をひらいたのは有名だが、このなかで野井十が会員として絵をかいていた。また県展創設に力をそそいだ川越篤（一八九二～一九六五）、和田英作に師事「火口」連作にいだんだ新原駿吉（一九〇四～一九七二）、水彩画をえがき続けた古川重明（一九〇一～一九五六）などがある。

杉田瑛九（秀夫）（一九一〇～一九六〇）は前衛画家として死んで



杉田瑛九

からようやく注目をあつめ出したといえる。響嘯が県総合博物館でひらかれた名作回顧展の目録に初めて瑛九にふれたなかで「瑛九には第三の目があつた」とのべている。一種の神秘性を内包したものを指したものであろうが、彼の周辺にあったものだけでも響嘯をはじめオノサトシノブ、池田満寿夫などがあるし、ほかに熱狂的なファンがいる。瑛九は芸術家の家系に育ったといわれるが、祖父が国学者、父直は俳人（後述、文芸の分野の杉田作郎）でありながら、大正十三年宮崎中学校を一年中退、日本美術学校も一年でやめ、東京で写真学校に通い、フォトグラム、デッサンの基礎を学んだ。戦後共産党に入党し「新宮崎美術協」を組織したが、

半年でやめている。いわば一種の反逆的な行動をみせているのであるが、その秘密はいろいろな説がある。五歳のとき母をうしなった哀しみ、あるいは反権威主義みたいなものがあつたのではないかともいう。瑛九の絵にはやはり宮崎を離れ浦和に永住しながらも、太陽と海がつきまといつてた。リトグラフ、エッチングに出る森にしても、フォートデッサンの海にしても、晩年の「田園」や遺作「つばさ」はもちろん、故郷宮崎への哀切なまでの憧憬があり、亡き母への想い出につながる詩がひそんでいる。

山田新一（一八九九～）は父の任地台湾で生まれたが、中学は祖父母のもとで都城中学を卒業、川端画学校で藤島武二に学び、翌大正七年、東京美術学校洋画科にすすみ、卒業後、京城の第二高等普通学校講師として渡鮮している。第三回朝鮮美術展に首席で入選、翌年帝展に入選、三年からヨーロッパに留学、佐伯祐三といっしょであつた。昭和十六年から文展無鑑査、二十五年日展で「湖上客船」が岡田實となり、日展審査員、同会員、評議員となり、フランスの芸術騎士十字勲章をうけている。

鐘利彦（一八九四～）は父が宮崎中学校の漢文教師であつたことから、宮崎中学校を卒業。東京美術学校西洋画科を卒業、文展、帝展入選、震災のあとの歌舞伎座どん帳の図案に当選するなど、その後共立女子大学につとめたりして現在にいたっている。しかし今も宮崎を故郷のように思い、自分が出た学校に絵を寄贈したり、展覧会を宮崎でひらくなどしている。また女流の二科会員努力賞をえ

た戸川ふみ子も延岡出身、新象作家協会吉江京司は高岡出身である。そのほか若手では前田舜敏、次郎の兄弟、野田典夫などがある。

地元では版画の黒木真雄（一九〇八～）がいる。家は代々海運業で瑛九と同じく一歳のときに母を亡くし、十五歳で父も亡くしている。このためか、亡母への鎮魂とともれる故郷の風景、郷土芸能、石仏などの画材を、ひたすら版に刻む。国画会展、日本版画展特選から国際展などへの招待、推薦出品を重ね、浮世絵百科事典、日本版画集にも作品が掲載されている。豪放な性格、逞しい身体つきで版画の鬼を思わせる風貌だが、過去病氣におかされたこともあり、デリケートな線がその面のなかに光る。長男郁朝、良興と、いずれも父のあとをついで版画の道を進んでいる。

このほか在住画家には、瑛九系に太佐豊春、岡峰竜也、鳥原茂之、瑛九の妹杉田杉が、またモダンアート派で馬を描き続ける坂本正直、地元宮崎大学で後進の指導をみた岩尾信夫、出水勝利、篠原勇、女子短大の末原晴人、都城高専の野口徳次らがいる。現在、県美術協会（会長出水勝利）が年二回展覧会をひらいているほか、県の特展、宮崎日日新聞社展（前の県展）が業績を誇っている。

文芸

前述（「はじめに」）したように、落政時代の影響で、各藩で起った俳句、短歌は、明治初年までその系列において活動している。

延岡の内藤藩、日南の飫肥藩伊東家の俳句に、都城島津藩の短歌である。ようやく、このなかで都城出身の池袋清風が近代的な発展をみせる。八田知紀の影響をうけ、明治三十二年夏、都城集第二編上下が都城歌会で生まれている。池袋清風（一八四七～一九〇〇）は鹿児島医学校に学び、明治十二年鹿児島女子師範の教師となったが、伝道にきた新島襄により、同志社大学に三十四歳で入学、十歳以上も年下の若い生徒から池袋翁とよばれ兄事されたといわれる。明治十四年洗礼を受けてクリスチャンとなったが、近代文学研究叢書（昭和女子大学刊）によれば、たいへんな寒がり、カゼ引きが有名で夏冬通して綿入れをかさねていたが、耐寒のため加茂川に首まで浸って鍛練したという。明治十八年卒業し、同志社女学校教師、図書係をへて結婚後、明治二十九年帰郷している。その間「浅瀬の波」「同第二編」「かしのや集」を刊行しているが、桂園派の歌を学び、高崎正風や税所敦子と親交があり、案山子廻屋乃社を結成、湯浅半月、大西祝、安部磯男、徳富健二郎などの逸材が出ている。木俣修の明治秀歌には次の一首がある。

山寺の仏の顔にかたつぶり

はひこそそのぼれさみだれのところ

しかし清風の遺業のなかで特筆すべきは、当時興りつつあった新体詩の批評を国民之友に発表したことであろう。日夏耿之介の「明治大正詩史」に、「池袋清風は詩歌両壇にまたがる論客の一人としてその業特記すべきものがあつた。新体詩批評の一文は、国民の友、

三十九号から三回にわたり出たが、(中略)当時かく熱心に詳細に意見を以てこの詩集を評したものは一人もなく、その言説中に独断の個処少なからぬとしても、《詩抄》の欠点を指摘して盲目的に追隨した当時の青少年の自覚をうながした功は没する事の出来ないものがある」と述べている。

日向の生んだ文人で最も世に知られるのは若山牧水(一八八五—一九二八)であろう。酒と旅を愛し、平明で素朴で、浪漫的な作品で人々に愛唱された点では、啄木とならんで、明治大正歌史に占める地位は大きい。牧水が生



若山牧水

まれた東郷町坪谷に今は生家と記念館が建っているが、彼の祖父健海は埼玉県所沢の農家の出身で、若いころ江戸に出て生薬屋に奉公しながら勉強し、のち長崎にわたって西洋医学を学んだ。わが国で初めて種痘を行った人として知られている。酒も飲まず、勤勉家で蓄財の才能があったらしく、坪谷に広大な山林や田畑を買って数年のうちに土地有数の財産家となった。これに対して祖母カメは日向の人で、陽気で、酒を飲み、三昧をひき、歌をうたった。そして父立造は有能な医者であったが人情癖と一種の空想癖のため、祖父がつくった財産を使い果たしてしまっている。このような家系に生れた牧水は頭脳優秀で好成

績で延岡中学に入学したのだが、在学中に早くも歌や文章を好み、のち医家をすてて文学の道歩くこととなる。早稲田大学に入ってからすてによく知られているとおり、尾上紫舟を中心とする短歌会を結成、前田夕暮、三木露風、土岐善麿、佐藤紅緑を知り、明治四十一年「海の声」を刊行、以下「独り歌へり」「別離」などで、新鮮な感覚で歌壇におどり出たのである。日向市細島御鉢ヶ浦に建っている歌碑に、

ふるさとのお秀が墓に草枯れむ
海に向える彼の岡の上に

とあるお秀という女性とは、中学時代の友人平賀春郊(一八八二—一九五二)にうちあげたところによると、日高ひでで、当時目白の女子大学に通っていて突然明治四十年に死んでいる。春郊は松江高校教授をして「創作」の選者であり、万葉集の東歌研究で知られるが、牧水の本当の友人であった。

牧水は明治四十五年、太田貴志子と結婚したがその年父が病氣にたおれ坪谷に帰郷している。その間、父の死にあっては、生家に一年間滞留在しているが、この間の多くの歌作は「死か芸術か」みながみ」に収めてある。父の死後、郷里にひきこもるように近親から説得されたりして悩んでいたらしく、歌も浪漫性から脱皮した山河や肉親をうたったすぐれた作品がみられる。全体に牧水の歌は、やはりおおらかな自然と太陽の日向が生んだともとれる。延岡市城山、同延岡高校(出身校)、日向市細島、同美々津、串間市都井岬、

高千穂町、都置町、延岡市山下町、それに出生地東郷町坪谷に歌碑があり、九月十七日牧水祭がひらかれ、碑に牧水の愛した酒をかけふるさとの尾鈴の山のかなしさよ

秋もかすみのたなびきており

地元の小中学生がうたう。

この牧水を生んだ東郷町をはじめ延岡などに門下生たちがいる。

谷自路、黒木伝松などが活躍した。

牧水と早稲田大学時代同級生の安田尚義(一八八四—一九七四)は高鍋藩の絵師を祖先にもち、早稲田大学卒業後、北海道の函館商業の教師として赴任。啄木の奥さんの妹をもらっていた同校出身の宮崎郁夫を通じて懇意となった。安田尚義の「歌の八十年」(宮崎日日新聞連載)によると、啄木は多作主義で、たとえば六月二十四日は百二十六首、二十五日夜は百四十四首とノートに自記しているとある。この教師六か年時代に、林不忘、谷譲次、牧逸馬の三つのペンネームで活躍した長谷川海太郎を教えている。英語が秀れていたという。安田は「創作」に発表、鹿児島一中の教師をしながら潮音社友を中心に「山茶花」を主宰、歌集「群落」「尾鈴嶺」のほか、郷土史「上杉鷹山」「秋月種茂と秋月種樹」などを執筆、昭和四十九年、九十歳の誕生日を記念して「虔々集」を刊行した。高鍋町に歌碑がある。

尾鈴山ひとつあるゆる黒髪

白くなるまで国恋ひにけり

現在、アララギ系、山茶花、錦江などの流れがあるが、県歌人協会(会長藤原光雄)から年刊歌集が発行されている。俳句では前述杉田瑛九の父、杉田作郎(一八六九—一九六〇)がいる。明治二十八年、当時東大眼科医局に勤務していた作郎は、角田竹冷の発会に出席、尾崎紅葉、大野洒竹、巖谷小波などと会う。子規の「日本派」により、帰省して眼科医局をひらきながら句作を続け、明治三十四年「つくし」を発行、作郎主宰の蓬会と、当時熊本にいた夏目漱石と連絡をとり親交があったという。明治三十二年代「ホトギス」子規選に、漱石、虚子とならび作郎の名がある。子規没後、作郎は全国行脚の途中宮崎で療養した河東碧梧桐と親しくなり、荻原井泉水の新傾向運動にのちに加わる。「層雲」により初めて九州に新しい俳句を導入した。瑛九が前衛画家として進んだのを考えると関心をよぶ。昭和二十九年「日向俳壇史」を発行、死後、昭和四十年に井蛙編集の「杉田作郎句集」が発行された。詩では大正末期、ダダイズムの守部放羊が詩集「太陽を抱く女」を出したが、アナキズムと結びついた串間市出身の神戸雄一(一九〇二—一九五四)がいる。東洋大学にまなび「空と木橋との秋」を出版、「抒情詩」「詩紳」「ダムダム」に関係し、壺井繁治、小野十三郎、金子光晴、林芙美子らと知り、昭和二年「岬一点の僕」を出している。高村光太郎が序をよせ、金子光晴が跋文をものしている。昭和七、八年頃から小説に転じ、井伏、太宰、木山捷平らとまじわり、十七年に小説等「番人」を出版、十九年には帰郷して地

元新聞文化部長となっている。素封家の出身で、日向人らしいおっとりとした性格であったが遺稿詩集「鶴」は死の影を宿するような人生象徴の姿が鶴にたくされたすぐれた作品である。



都城の富松良夫（一九〇三～一九五四）は都城出身。小学校入学のときセキ髓をやんで不治の病にかかり、翌年実母が死亡、伯母に背おわれて学校に通い、

のち独学を続けた。十八歳でキリスト教に入信。同人誌「盆地」を刊行、昭和五年「寂しき候鳥」を出版、二十四年「微かなる花譜」を出している。富松はリルケに傾倒、澄むことを願ったという。フランス語を独学でまなび、ベルレーヌ、クロードル、コクトーからジュール、シュペルビエルの訳詩までである。霧島を愛し、文化運動にも不自由な身体をおして出かけていた。没後「黙示」「現身」の詩集が肉親や関係者の努力で出版され、市立図書館に霧島をうたった詩碑が昭和四十六年建てた。孤高で清澄な詩人で、ふるさとを愛した一人といえよう。

昭和十三年創刊され今も続いている同人誌に「龍舌蘭」があるが、創立同人に谷村博武、黒木清次とともに山中卓郎（一九一三～一九五六）がいる。遺稿詩集「坂の上」のなかの「水平飛行」は喪失感、人生の倦怠感ににじみ出た詩として世評が高かった。



中村地平

兄弟と「四人」を出し、「熱帯柳の種子」で井伏鱒二らの知遇をえた。昭和十三年に発表された「南方郵便」で芥川賞候補となり、太宰、伊馬春部とともに、井伏門下の三羽鳥といわれたのである。

続いて台湾に取材した「長耳國漂流記」で新進作家としてスタートした。中村地平の作品は宮崎と台湾を舞台にしたものが多いが、彼が北方文学に対して南方文学を提唱したのもうなずける。戦中疎開、病気のため宮崎にとどまるが、戦後は志賀が激賞した「義妹」や「八年間」「日向」などを執筆しながら文化運動にも力をそそぎ、県立図書館長として活躍した。死後、志賀直哉、坪田譲治、井伏鱒二らの監修により、全集三巻が刊行され昭和四十八年には宮崎市森林公園に文学碑が建てられた。碑文は次のとおりである。

雲はどこにでも似つかわしい姿で現われる

このほか芥川賞候補の久保輝己（逗子在住）、関屋邦広、阿万鯨人らがいる。またエッセイストとして菊池重三郎（大磯町在住）がいる。「木曽馬籠」「マコブの梯子」などのほか名訳「チップス先生さようなら」が高名である。宮崎在住では「二千年の花」などの宮永真弓。童話、民話採集の比江島重季がいる。

現役詩人では「詩学」の嵯峨信之のほか延岡出身の渡辺修三（一九〇三～）の父民三郎は蘆花と交遊があり、昭和三年早稲田大学同窓に火野葦平、中山省三郎らがいる。「詩と詩編」の創刊以来、三好達治、安西冬衛などと同人として活躍「エスタの街」「ペリカン嶋」「農場」「谷間の人」などを出版し、今なお山峡で詩作を続けている。谷村博武（一九〇八～）は西南の役で有名な谷村計介の孫で、父もまた陸軍少将であった。戦後出された「復員悲歌」にその父が親愛の情をこめた序文を書いているが、「痛苦と回復」「南國の市民」などがあり、ヒューマンな庶民詩がつづられている。高森文夫（一九一〇～）は第一詩集浚渫船で第二回「中原中也賞」を受け、「四季」同人で中原中也の友人であった。「昨日の空」を昭和四十一年に出版している。黒木清次（一九一五～）は詩集「乾いた街」「風景」「麦と短剣」などのほか戦前芥川賞候補となった「綿花記」「蘇州の賦」の小説があり、青春時代を中国ですごしたせいか中国を題材にしたものが多い。このほか田中長二郎、森千枝から若手では金丸樹一、本田利通をはじめ、大森一郎、みえのふみあき、杉谷昭人、南邦和、福島和男など多彩にわたる。小説では中央で活躍し、のち帰郷した中村地平（一九〇八～一九六三）がいる。宮崎中学を卒業、南方にあこがれて台湾の台北高校に入学する。校長は下村湖人で、同人誌「足跡」を出し、矢野峰人を知り、遊びにきた林芙美子らとも知り合いになる。東大文学部ではドイツのローマン派を研究、同郷の植村敏夫や津村秀夫、信夫の

音楽

文化運動といえは、中村地平とともに戦後管弦楽団を組織し、オペラ上演をしたりした園山民平（一八八七～一九五五）がいる。島根県出身だが、大正二年から十年間宮崎高女に奉職、のち渡満して大連音楽学校を創設、満洲国々歌などを作曲、戦後第二のふるさと



園山民平

ともいえる宮崎に引き揚げ、文化運動に情熱をかたむけ、また県内の山深くダンスをかついで民謡を採譜、「日向民謡一〇一曲」の労作をまとめた。宮崎大学教授園山謙二はそのあとをついで後進の指導にあたっている。最近、関係者によって、「園山民平作曲集」（童謡、合唱曲など）が出された。この系列から、ピアノの児玉邦夫、作曲の寺原伸夫などが出ている。

＊ ＊ ＊

以上、宮崎県出身者及び特に影響をあたえた故人を中心にえらんだ。現在活躍中の入達でページ数の関係で割愛したものがある。

（参考資料） 巻説「日向文化史」、「宮崎の文化」（以上毎日新聞連載）、「現代九州詩詩」（黒田達也）、「都城古今遺蹟集」、「西日本文壇史」（原田種夫）、「県文化年鑑」など。

（宮崎県立図書館副館長）

人物を中心とした

文化郷土史

—鹿児島県—

芳 即 正



一 はしがき

鹿児島は、古くは薩摩国と大隅国に分かれていたが、近世においては、これに日向国の一部と琉球を加えて、薩摩藩とっていた。その薩摩藩が、幕末維新期にめざましい活躍をしたことは周知の通りであるが、その後明治にはいつて、郷党人士が敵味方に分かれて戦うという、西南戦争の洗礼を受けた。この戦争で多くの前途有為の青年を失ったのであるが、決して人材が枯渇してしまっただけではない。明治の政界・官界・軍部における県人の活動は注目すべきものがある。武の国の伝統と、幕末の藩主島津斉彬以来、苦心して作りあげた薩摩海軍の伝統は、明治以後の日本海軍へ引きつがれ、また、藩閥政府の故郷ということもあって、薩摩といえ、あたかも役人と軍人の国であるかの如き印象を与えた。

しかし、案外美術界をはじめ、文化諸部門にも多くの人材を出している。南国特有の明るい空ときれいな空気、それに台風銀座と称されるような台風常習地帯の厳しい気象条件とは、激情的で色彩感覚に富んだ性格を作りあげたようである。それはどちらかというところ、理論的であるより実践的であり、理知的であるより情緒的である。

また、日本列島の最南端にあるという地理的条件は、古来我が国へはいつてきた海外文化の流入口の如き役割をになってきた。したがって、島津氏七百年の統治下に、極めて保守的な土地柄と見られ

ながら、案外あっさり新しい海外文化の採用に積極的態度を示してもきた。古きものへの強い執着を示す反面、古さをかなぐりすて、新しいものへ突入する面も持っている。芸術文化部門を中心に、そういう鹿児島県の人物群像を、素描してみたい。

二 芸術文化の人物群像

1 美術・工芸

鹿児島県の洋画界の歴史は、床次正精（一八四二—一八九七）が、幕末の慶応元年、長崎港停泊のイギリス軍艦内で、油絵をはじめ見て感動したことに始まる。床次は、検事をしながら西郷隆盛などの肖像や憲法発布の式典を描いた。西洋画を正式に学んだのは會山幸彦（一八五八—一八九二）で、イタリア人サンジョバンニに師事して、「試體図」などを描いた。その門下に藤島武二や和田英作がいたが、惜しくも若死した。

我が国の洋画を美術として確立したのは、黒田清輝（一八六六—

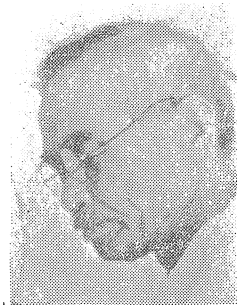


黒田 清 輝

一九二四）である。十八歳のとき、養父清綱のすすめで政治家を志し、法律研究の目的でパリに留学。生まれつき画才のある黒田は、本場の洋画にすっかり魅せられ、養父の反対を押し切

ってラファエル・コランに師事し、外光描写を取り入れた新しい画風を学んで帰国した。滞欧中の作品「読書図」「朝妝」などを発表するや、その印象派風の明るい画風は、世間を驚嘆させた。朝妝は裸体画問題を起こして世論を沸かせた。明治二十九年には、明治美術会に對して、新しく白馬会を結成し、同年新設された東京美術学校に洋画科が新設されると、黒田が教授になり、助教授に藤島と和田を迎え、鹿児島出身が三人も占めた。明治三十年代初期に、「湖畔」「昔語り」などの代表作を描いた。その後文展の開設に尽力し、文展審査員・帝室技芸員・国民美術協会初代会頭・帝國美術院院長などを歴任し、我が国明治・大正洋画壇の巨匠とよばれた。

黒田より一つ年下の藤島武二（一八六七—一九四三）は、幼くして父に死別、西南の役で二人の兄をも失い、老母と幼い弟妹をかかえて苦汁をなめた。アトリエがなくて、三疊間の屋根をぶちぬいてガラスをはめ、モデルをすえて次の六畳間から描くという修業時代を送った。黒田の推薦で美校の助教授となり、以来白馬会の会員となったが、やがて浪漫主義の作風に変わり、「天平の面影」「蝶」などを描いた。三十八歳のときヨーロッパへ留学したが、黒田の紹介状をほかにして、コランでなくコルモンに師事し、転じてローマのデュランの指導をうけた。コランや黒田の優雅な作風は、反骨の芸術家藤島には物足りなかったとみえる。「黒扇」などの作品を描いて、五年間の留学を終え、明治四十三年帰国した。帰国後美校教授に昇進し、黒田の方式を装飾的な華麗な画風に発展させた。また、



和田英作

文展洋画部の二科設置運動にも参加、のち文展・帝展審査員、帝國美術院会員・帝室技芸員をつとめ、「芳蕙」など東洋的な人物画を完成した。昭和初年からは、全国は勿論モンゴルの砂漠まで主題を追い、「東海旭光」や「旭日照六合」など、豪放にして華麗な近代絵画を完成した。昭和十二年には第一回文化勲章を受け、その門下に多くの現代画家が輩出した。

このような藤島に対し、黒田の社会的地位や政治手腕を継承したのが、垂水市出身の和田英作（一八七四—一九五九）である。海軍兵学校英語教官のち牧師となった父とともに一家上京、明治学院でキリスト教の教育を受けた。これが和田の人生と絵画に決定的な影響を与えたに違いない。そして曾山幸彦に洋画を学び、のち黒田清輝の指導をうけ、藤島とともに美校の助教になったが、まもなく辞退して一学生として洋画科に入學、第一回卒業生となった。その後バリーに留學して、黒田の師コランに師事し、明治三十六年帰國して美校教授に進んだ。文展などの審査員・帝國美術院会員となり、昭和七年から十一年まで美術学校長をつとめ、帝室技芸員となつた。昭和十八年には文化勲章を受け、戦後文化功労者・日本芸術院第一部長となった。代表作に「渡頭の夕暮」などがあるが、富士

山とバラを好んで描いた。

大正の歌麿と評された橋口五葉（一八八〇—一九二二）は、十九歳のとき上京して日本画を学んだが、まもなく黒田に洋画を学んだ。明治三十八年美校を卒業し、第一回文展に「羽衣」を出品、のち東京三越が募集した一千円の懸賞美人画ポスターに入賞して、彼のポスターは鹿児島駅をはじめ全国の駅に張り出された。一方では、夏目漱石の「吾輩は猫である」をはじめ、多くの作家の本の装幀を手がけた。その後木版画にひかれ、次々に美人画・風景画を出版し、近代浮世絵版画をうち立てた。代表作に「化粧の女」「髪すき」などがある。

小説家有島武郎の弟で里見淳の兄有島生馬（一八八二—一九七四）は、學習院中等科時代に病氣にかかり、郷里の川内市で静養中、神父に宗教とイタリヤ芸術について啓蒙され、東京外語に入學しなおした。卒業後藤島の家に寝起きして洋画を学び、明治三十八年渡欧し、五年間洋画を学んだ。帰国後、おりから創刊された雑誌「白樺」の同人ともなり、セザンヌなど後期印象派の紹介に努めた。大正三年、文展洋画部の新旧の対立から審査方法に不満が生じ、彼は一科（旧派）と二科（新派）に分けて公平を期することを主張したが、黒田や和田英作らに入れられず、二科会の創立に参加し、「釣」や「蚊帳」を出品して衆目を奪った。処女作「こうもりの如く」をはじめ多くの小説も発表した。昭和一〇年帝國美術院会員、翌々年には一水会を創立、昭和三十九年文化功労者に選ばれた。



海老原喜之助

有島の円満な人柄を反映して、大きな画壇の潮流が形成された。第一の潮流が二科会の東郷青児・吉井淳二・山口長男などである。二科から分かれた独立美術に、海老原喜之助など

がいる。

十七歳で鹿児島を飛び出し、十九歳でバリーの土を踏んだ海老原喜之助（一九〇四—七〇）は、「殉教者」「燃える」などを描き、「蝶」は日本国際美術展で最優秀賞をうけ、毎日芸術賞も上げた。昭和三十九年には「雨の日」に芸術選奨文部大臣賞が贈られた。南日本美術展は、今年第二十九回を迎えたが、これは海老原喜之助と吉井淳二両名の尽力に負うところが大きい。

若冠十九歳の東郷青児（一八九七—）は、「パラソルさせる女」で二科賞を獲得、その後独得のメランコリックな女人風俗画を描いた。二科会の体質を改革したり、昭和三十二年壁画「創生の歌」で芸術院賞を、また日本国際美術展で大衆賞を獲得して、芸術院会員に推された。

海老原と志布志中学で同窓の吉井淳二（一九〇四—）は、中学時代画家を志し、東京から美術雑誌をとりよせ、模写して勉強し、卒業を待たずに上京。美校卒業後農漁村の働く女たちを描いて三十数

年、「水汲み」「花と女」「老馬」などで日本芸術院賞に選ばれた。

抽象画を描いて四十年の山口長男（一九〇二—）は、川内市出身で、昭和二十九年現代日本美術展で優秀賞、昭和三十六年芸術選奨をうけている。

アメリカで、カルデコット賞を二回も受賞して、児童絵本作家として不動の地位を築いているのは、根占町出身の八島太郎である。

鹿児島画壇の草分けは、黒田清輝の門下生で種子島出身の大牟礼南島で、帰郷して鹿児島にアトリエを開いたり教壇に立って多くの生徒を指導した。また、黒田の一番のお気に入り山下兼秀も、母の骨を抱いて帰郷し、鹿児島画壇は一段と活気がみなぎった。

日本画家の山下嶺は、中央で活躍している鹿児島出身の長老である。戦前の鹿児島画壇の日本画壇に一盛時を形成したのは、京都生まれの河本其山や田中国広である。其山は恋路の終着駅を鹿児島に決めて、南日美展の前身南国展の立役者となった。その弟子に加世田出身の前之園竹堂がいる。田中国広も教鞭をとりながら絵筆を振った。その弟子に丸田竹濤がいる。

京都と奈良を太平洋戦争の戦火から救ったのは、当時の奈良博物館長新納忠之介（一八六六—一九五四）と、若き日に仏像彫刻研究のため新納家の家族の一員となったアメリカのウォーナー博士であった。新納忠之介は、美校彫刻科在学中に校長岡倉天心に見出され、帝國博物館の仏像修理に敏腕を発揮、卒業と同時に母校助教、明治三十年には中尊寺の大修理工事主任をつとめた。その後国

宝の修理保存に一生を捧げた。

忠犬ハチ公銅像で有名な安藤照（一八九二—一九四五）は、美校卒業の年帝展に「流れ」が特選、大正十三年から連続三回特選、また、「大空へ」は第一回帝国美術院賞をうけた。そして帝展委員、審査員となった。その後彫刻を量のかたまりとして表現するようになった。代表作に市立美術館前の「西郷隆盛像」がある。

美術史の研究家には、東京国立文化財研究所の隈元謙次郎などがある。

陶芸は、明治維新後藩の保護を失って没落したが、苗代川の第十二代沈寿官（一八三五—一九〇六）は、明治四年に会社を設立し、錦手や透彫などの精巧華麗な白薩摩を焼いて、輸出工芸の花形とした。薩摩焼はみごとに復興して、その伝統を保持したのである。

また、明治二十年代に、慶田窯の慶田茂平・政太郎両人は、前田正名の協力で白薩摩の復興に努力した。有山長太郎は、明治三十三年谷山に窯を開き、黒田清輝の支援をうけながら、独創的な薩摩焼をはじめた。同じ頃加治木の竜門司では、芳光・芳次らの陶工が血みどろの製作を続けた。

鹿児島の陶芸家としては、花瓶「空」で芸術院賞を獲得した宮之原謙などがいる。

戦後の写真界のリーダーは平岡正三郎である。平岡の「働く人々」は、昭和二十七年国際サロンに入選したのをはじめ、カメラ雑誌・年鑑など上位入賞、昭和三十二年の老車夫の孤影は、年度賞一位・



有島武郎

であった母に育てられ、南方の血と北方の血を受け継いだ作家である。有島武郎は、父について次のように書いている。

「私の家は代々薩摩の国に住んでいたので父は他の血を混じえない純粹の薩摩人といつてよい。私の目から見ると、父の性格は非常に真正直な、また細心な、ある意味の執拗な性格をもっていた。そして外面的には、随分冷淡に見える場合が無いではなかったが、内部には恐ろしい熱情をもった男であった。」しかし、東京や横浜で生まれ育った三人にとっては、鹿児島の風土との直接の関係は薄く、直接鹿児島を素材にした作品は見当たらない。

まだ・みのる（一八九五—）は、腕白時代を鹿児島市で過ごし、慶応大学卒業後バリのソルボンヌ大学で社会学を学んだ。昭和十一年雑誌「世界」に連載した「気遣部落周遊紀行」で、毎日出版文化賞を受賞した。特異な小説家・文明批評家であり、捕鯨船に乗り込んで「南氷洋」を書くなど、ロンマン迫う南国的な男くさい男である。

桜島の古里温泉に、「花のいのちはみじかくて、苦しきことのみ多かりき」の文学碑が建っている。林芙美子（一九〇四—五二）は、

最優秀賞に輝き、世界写真年鑑に収められた。

書道の先駆をなしたのは、女子師範の大沢四峯、第一師範の堀井鶴畔、第二師範の豊広南鶴であった。

中央で活躍している女流書家に、昭和二十一年日本書道美術院公募展最高賞をうけた西郷が下鶴出身の町春草などがある。

2 文学

ロシア文学の紹介者昇曙夢（一八七八—一九五二）は、奄美大島の瀬戸内町に生まれ、十七歳のとき上京、ニコライ正教神学校でロシア語を学び、大学の先生をしながらツルゲネフ・トルストイ・ゴーリキーなどの近代文学を紹介することに努めた。その間、陸大教授、ニコライ露語学院長をつとめた。昭和三年にはトルストイ生誕百年祭に国賓として招待された。昭和三十年、それまでの研究の集大成である「ロシア・ソヴェト文学史」を出版して、芸術院賞をうけた。また、学生時代から書いた「大奄美史」は、貴重な文献である。

国文学者島津久基（一八八八—一九四九）は、花岡島津家第九代目であるが、学生に講義した「源氏物語講話」は、国文学の新しい研究法を示したものであるとして注目を浴びた。ほかに、「美経伝説と文学」「源氏物語新考」などがある。

小説家有島三兄弟、「或る女」の有島武郎（一八七八—一九二三）。「こうもりの如く」の有島生馬（一八八二—一九七四）。「善心悪心」の里見弾（一八八八—）は、川内市出身の父武と、南部藩士の娘



林芙美子

愛媛県行商人の父と、古里の温泉宿の娘林キクとの間に生まれ、各地を転々として、少女時代は苦しく惨な生活を送った。尾道高女卒業後も、女

工・事務員・女給など苦しい生活を続けながら、文学に心を寄せ、詩や童話などを書いた。昭和五年「放浪記」を山本実彦社長（川内市出身）の改造社から出版すると、たちまちベストセラーとなり、「一躍女流作家となった。戦後「晩菊」につづいて、「浮雲」などの小説を精力的に書いた。

海音寺潮五郎（一九〇一—）は、大口市に生まれ、早くも加治木中学時代、新潮社の「文章俱樂部」に短編小説が入選して評判になった。歴史を学ぶため神宮皇学館に進み、夫人との恋愛が騒がれて、国学院大学高等師範部に転学、夫人のアルバイトに助けられながら卒業した。そして、県立指宿中学の国漢教師をした後、京都府立二中教師になって、京都の史跡をめぐる、幕末の史料収集につとめた。昭和四年、処女作「うたかた草紙」が、「サンデー毎日」の大衆文芸賞応募に入選、三年後には長編「風雪」が当選、これを機に退職して作家生活に専念した。昭和十一年には、「天正女合戦」などによって直木賞を受賞、考証に基づく歴史小説家として注目され

た。主な作品に、「蒙古来る」「武將列伝」「天と地と」や、鹿児島を素材にした「二本の銀杏」「火の山」「西郷隆盛」などがあり、壮大な歴史ロマンを雄渾な筆致で描いているのに特色がある。

児童文学の椋鳩十（一九〇五—）は、長野県伊那谷の山村に生まれ、法政大学時代、文学に心を寄せ、詩を書くかたわら山好きの父とアルプスの山中を歩きまわり、きこりや狩人から聞いた山藪や木地屋の話、山の動物たちの話が、山藪小説や動物文学を書く機縁となった。大学を卒業して種子島の小学校の代用教員になったことから、鹿児島に定着している。昭和八年出版した「山藪調」で作家への道を聞き、新聞連載「山藪譚」「山の天幕」が、あまり人間的すぎるとにらまれ、以後少年少女向きの動物文学に転向した。昭和二十二年県立図書館長となり、「親子二十分読書」を推進した。「片耳の大シカ」で文部大臣奨励賞、「大空に生きる」で未明文学奨励賞、「孤島の野犬」でサンケイ児童出版文化賞をうけた。

大正生まれの小説家には、沖永良部島生まれの一次郎（一九一六—）がいる。二歳のとき両親に死別、鹿児島市の祖父に引き取られ、行商をしたり、夜泣きウドンの屋台を引いて生活し、十七歳のとき長編時代小説を書きはじめ、母校の先生の世話で、鹿児島朝日新聞（南日本新聞の前身）に「隠密薩摩相」という西田橋秘話を連載し、のち上京して、「日輪太郎」「冬の旅」「孤雁」「東京空襲」などを書き、母の思い出を美しく描いた「青幻記」で、太宰治賞をうけた。

島尾敏雄（一九一七—）は、横浜生まれの東北福島出身者

で、神戸商業時代から文学への関心を深め、九大在学中に「幼年期」を自費出版した。第二次大戦に参加して、海軍特攻隊の指揮官として、奄美の加計呂麻島で出撃命令を待ったが、発進命令のないまま敗戦を迎えるという極限状況を体験して、「出発は遂に訪れず」などを書いて、島尾文学の方向が決定した。戦後は教壇に立ちながら、「単独旅行者」「夢の中の日常」を書き、昭和二十五年「出孤島記」で第一回戦後文学賞をうけた。島尾文学のもう一つの主題は、現実を夢や幻想によって描くところにあり、病気の妻のために故郷の奄美に移住し、昭和三十五年発表の「死の棘」は、文部大臣芸術選奨をうけた。昭和三十二年から県立図書館奄美分館長をしながら、「日のちぢまり」「離島の幸福・離島不幸」などの作品を発表している。

昭和生まれには中村きい子（一九二八—）などがある。横川町の母親をモデルに、旧士族の女の理念を追求した「女と刀」で田村俊子賞をうけ、テレビドラマ化されて全国の話題を呼んだ。

鹿児島初の詩人今井白楊（一八八九—一九一七）は、川内市に生まれ、早稲田大学在学中に詩を書きはじめ、自由詩社に参加して、その機関誌「自然と印象」に口語自由詩を発表して活躍したが、親友の朽葉と大吠岬で遊泳中溺死した。

奄美のバイロン泉芳朗（一九〇五—一九五九）は、伊仙町に生まれ、鹿児島第二師範卒後郷里の教壇に立ちながら詩をつくり、昭和三年上京、昭和九年から六年間に詩誌五十冊を出した。戦後は郷里で復

帰運動の先頭に立ちながら、奄美のために歌いつづけた。

黒田三郎（一九一九—）は、呉市に生まれ、三歳のころ郷里鹿児島に帰り育った。昭和二十九年恋愛詩集「ひとりの女に」を発表してH氏賞をうけ、小市民の日常生活を平易な言葉で歌い、日本の詩壇に新風を吹きこんだ。

薩摩狂句は、入来町の選者紫雲山人（一八七九—一九五二）にたって隆盛を迎え、寺師若法師（一八九一—一九七二）によって開化した。若法師は鹿児島師範第二部を出て教壇に立ち、後新聞記者となった。自ら狂句をつくり、選者としても大活躍し、薩摩狂句の教祖とよばれた。

明治前半の日本歌壇は、宮中の御歌所で活躍した鹿児島出身者が占めていた。八田知紀（一七九九—一八七三）は、香川桂樹の流れを汲み、「桃岡集」などの歌集がある。高崎正風（一八三六—一九二二）は、知紀に師事し、明治維新では征討軍参謀として活躍、御歌所長をつとめて後進を指導した。黒田清綱（一八三〇—一九一七）も知紀門下で、幕末維新に活躍、高崎の死後は彼が中心になって歌の指導に当たった。「滝園歌集」などがある。京都生まれの税所敦子（一八二五—一九〇〇）は、税所篤之の後妻として鹿児島に下り、藩主の幼君の保育に当たった。明治八年宮内省に出仕、皇后の歌の相手をした。

大正から昭和にかけての歌壇では、宮之城町生まれの岩谷莫哀（一八八八—一九二七）は、闘病生活をしながら、「春の叛逆」「仰

望」などの歌集を出し、豊かな人脈を残して病死した。串木野市生まれの万造寺青（一八八六—一九五七）は、処女歌集「憧憬と漂泊」を出し、昭和六年には、歌誌「街道」を創刊した。中央とのつながりのない歌人には、「にしき江」の創始者鶴田海南（一八八三—一九二九）がいた。また、鹿児島歌壇の育成に尽力したのは、加治木町生まれの牧院村（一八八二—一九六六）であった、旺盛な作歌の情熱で、歌誌「黒潮」の紙面を飾った。

無季俳句の実践者で有名なのが、篠原鳳作（一九〇五—一九三六）である。昭和八年「傘火」を創刊し、無季俳句によって全国に知られた。

3 芸能

軍艦マーチの作曲家瀬戸口藤吉（一八六八—一九四一）は、垂水市に生まれ海軍音楽隊に入った。彼の作曲した軍艦行進曲は、明治三十三年神戸沖観艦式で披露され、以来日本海軍のトレードマークになり、士気を高めた、後軍楽長になり、旗艦三笠などに乗り組んだ。代表作には、軍艦マーチのほかに、「東京行進曲」や「愛國行進曲」などがある。

オペラ歌手松山芳野里（一八九一—一九七四）は、宮崎生まれの加世田出身で、十五歳の少年松山は、バイオリン一つをもって、音楽への野望に燃えて単身上京、後上野音楽学校に入り、大正二年帝劇の歌劇部にスカウトされ、テナー歌手としてステージに立った。その後欧米に武者修行にも出かけた。昭和九年から総合芸術研究所

をつくって、後進を指導した。

西之表市生まれの芸者中山喜代三（一九〇三―六三）は、鹿児島小原節をひっさげて、昭和の歌謡界の人気者になり、昭和十二年中山晋平と結婚した。

十八歳でチャイコフスキー記念第二回音楽コンクール、バイオリン部門第三位入賞した久保陽子は、名瀬市に生まれた。四十倍の桐朋学院の天才教育講座に合格し、恩師をたより渡仏、昭和三十九年マルセイユ音楽演奏会で優勝、昭和四十二年ナポリでのクルチ財団第一回国際コンクールで一位入賞し、海外で演奏活動が続けている。

片野坂栄子は、武蔵野音楽大学にトップで入学し、国立ウイーンアカデミーに留学、昭和三十九年国際オペラ歌手コンクール三位入賞、翌年には国際声学コンクールで一位に入賞、声量も度胸も十分である。

鹿児島での異色は、大島郡喜界町生まれの久保けんお（一九二一―）が、南海の離島から山奥までこつこつ取材して、「南日本謡曲集」「南日本わらべうた風土記」を出版している。

俳優では、「愛染かつら」の上原謙（一九〇九―）は、東京生まれの鹿児島出身である。芸名は父の尊敬する上原勇作元師にあやかっ てつけた。戦後は、二枚目から演技派に成長し、男優賞をうけた。フランク・塚（一九二九―）は、南方的で桜島のような陽性型である。慶応大学時代アルバイトではじめたドラムの筋がよく、名ドラマーとしてバンドのリーダーになり、地方巡業にも出た。昭和二十七年俳優へ転身、昭和三十三年ブルーリボン賞、同年「私は貝に

なりたい」で芸術祭賞をうけた。

日本洋舞界の開拓者高田雅夫（一八九五―一九二九）は、帝劇に入 ってバレエの男主役をつとめた。洋劇部解散後は地方巡演を行い、また、欧米の檜舞台にも立ち、帰国後は高田舞踊団を設立して、公演をつづけた。全日本芸術舞踊協会会長高田雅夫夫人の弟子となった平岡斗南夫（一九〇一―）は、大口市に生まれ、妻の志賀美也子舞踊団とによる「ビルマの竖琴」で、芸術祭文部大臣奨励賞と、昭和三十八年度舞踊ペンクラブ作品賞をうけた。

隼人町出身の松山樹子（一九二四―）は、日劇ダンシングチームに入り、終戦とともに東京バレエ団を結成、翌年帝劇で「白鳥の湖」昭和三十四年訪中公演で、バレエ化した「白毛女」を披露、平和文化賞をうけた。昭和三十八年には祇園祭りで、芸術祭奨励賞とペンクラブ賞をうけた。

知覧町生まれのバイオリニスト折田泉（一九〇九―）は、石井舞踊団に入り、石井みどりと結婚、娘克子も創作モダンダンスで文部大臣賞、個人演技賞をうけている。

明治維新前夜の慶応二年、薩長連合の盟約は、京都二本松の薩摩藩邸で結ばれた。この席上質実剛健の気風をもつ薩摩琵琶を演じたのは、児玉天南であったといわれる。薩摩琵琶は八百年の伝統があり、昭和三十七年、すぐれた伝統と芸術を保持している松岡武二・池田政徳（天舟）・萩原秋彦（龍弾）の三人が、県無形文化財に指定された。

（鹿児島県立図書館長）

人物を中心とした

文化郷土史

— 沖縄県 —

当 間 一 郎



はじめに

沖縄県は日本列島の最南端にあって、昭和四十七年五月十五日に待望の祖国復帰を果たすまでは、長い年月にわたって苦難の歴史をくりかえし、日本本土とは切りはなされて、数々の諸問題を背負って、歩んできた。

また、明治十二年の廃藩置県になるまでは、慶長十四年（一六〇九）以来、島津侵入のもとに長い間窮屈な、拘束された生活之余儀なくされるとともに、重税のとりたてに四苦八苦しながら、われわれの先祖は生きながらえて、沖縄の風土に適した多くの有形・無形の文化遺産を残してくれた。

したがって、沖縄は政治・経済的にはめくまれない状況にあったが、文化的には早くから中国や南方諸地域との行き来によって、すぐれた文化を摂取しながら、亜熱帯というよき風土にふさわしい、明るく深遠な文化を創造してきた。とくに顕著な時期が二度あって、それを特称して沖縄文化の黄金時代と名づけている人がいる。

その第一回の黄金時代は、尚真王代（一四七〇～一五二六）で、寺社を中心とする石造建築物の、いわゆる有形文化が数多く完成している。第二回は尚敬王代（一七一三～一七五一）で、古典音楽や舞踊・組踊等の伝統芸能が創作され、一時代先に中国に渡って、その技法を学んできた織物、陶器、漆器、絵画等がこの時期には洗練されて、高度な技となって独自の境地のもとに制作が続けられ、沖縄の文化を確固たるものにした。今日ある数多くの文化所産は、このころまでにできあがったものが大半であるといえてよい。もちろん、明治になって王国が崩壊してから、伝統を基にして、新しく創

作が試みられて、新味と豊かさを加えている作品もかなり多い。

沖縄の文化は「やさしさの文化」だといわれている。それは六十有余の島々がすべて隆起珊瑚礁からなり、周囲は環礁でとりかまわれ、沖から直情的におしよせてくる荒波を環礁でやわらげ、島々にたどりつくまでには柔和なさざ波となつて、沖縄をつつむのである。そのような自然的環境と歴史的環境の中で、重厚で独特な有形文化が豊富に誕生し、やさしくひかえ目な、沖縄の人の心とたくみなわざが、多くの無形文化をつくり出して、今日までその伝統様式がまもりつづけられているのである。今回はその中で、とくに芸能（舞踊・音楽）、美術、書道についてとりあげて、紹介していくことにしたい。

一 舞 踊

沖縄の文化を考えていく場合、芸能の示す位置は大きく、高度に洗練された演技と内面描写の独特な様式は、わが国の芸能の中でも高く評価されており、沖縄県が世界にほこる唯一の伝統文化だと考える。それは前に書いたように、一七〇〇年代に創作された古典芸能が、王国時代は王府の保護のもとに、うけつがれてきて、芸能家になることは出世の近道でもあり、舞台に立つことができるのは無上の光栄であり、名誉でもあった。

△御冠船踊りの継承者、玉城盛重▽

御冠船踊りとは、国王の交替のたびごとに中国に報告をして、その公認を得るために、使者を迎えて演じられる芸能のことを、とくにこのように呼んだのである。「御冠船」はその使者の一行が乗ってくる船のことをいい、その人たちに披露するかずかずの芸能を御

冠船踊りといったのである。

慶応二年（一八六六）を最後に御冠船踊りは終止符をうち、まもなく新時代が到来、廃藩置県にもなつて保護されていた芸能は、市井に放り出され自活を余儀なくされるようになった。その技を全身でうけとめて、継承していったのが玉城盛重（一八六八～一九四五）である。それは御冠船踊りの役者から習得したのである。

玉城盛重は明治元年旧暦三月一日、首里の赤平（現在の那覇市首里赤平町）に生まれた。一七歳のとき、芸能で身を立てるべく、仲毛芝居にはいった。仲毛芝居というのは、沖縄の商業演劇の発祥であり、現在の国道五八号線に沿った、旭橋から泉崎橋にかけての西側、現在の那覇港よりの地域が仲毛と呼ばれていた。

その当時の役者は、最後の御冠船踊りの地謡と舞踊をつとめた人たちと、廃藩で職を失い生活のために身をよせてきた士族たちで構成されていた。また、経営者も最後の御冠船踊りの踊り奉行をつとめた、小椋按司朝宏で、芸能にくわしい人であった。

玉城盛重は、はいった当時は一介の青年役者にすぎなかった。彼の資質をひき出していったのは、経営者の小椋だといわれているが、当時、芝居にいた御冠船踊りの師匠と出演者の先生方であった



玉 城 盛 重

という。それは、女踊りを高原里の子、端踊りを森山親方、男踊りは与儀親雲上、その師匠にあたる本部親雲上にも教わったという。他に、読谷山親雲上にも直接に指導を受けたといわれて

いる。

このように盛重は、恵まれた環境にあって、みっちり伝統の舞踊をじかにならったのである。彼は長身で、身体的にも恵まれていたし、また、天稟の才能も加わって、その芸は他の追随をゆるさなかったという。

明治十八年に仲毛芝居の一行が奄美大島に巡業したときに彼も加わっていたという。仲毛にいて芸をみがき、伝統芸能の心を一つ一つ習得して、若くしてそのにない手となったのである。

彼が伝統を重んじて、そのみに力を注いだのは、祖父玉城盛昭の感化によるものであろう。祖父は、尚穆王の冠船（一七五六年）のときの役者で、四つ竹踊りを演じた一人として、よく知られた人であった。父盛喜は、薩藩とともに三人の男子（盛寿、盛政、盛重）を芝居に入れている。もちろん、自分も役者の一人であった。その動機は明らかでないが、芝居にはいることは、王府時代とは違って当時の評価は低く、よほどの決意を必要としたころであった。

盛重は明治三十一年ころ、芝居を引退して、筆の教授で生計を立てようと決心した。その理由ははっきりしないが、演劇界に壮士芝居という新劇はいってきて、御冠船踊りに対して、観客も目をくれないようになってきたからであろうといわれている。つまり、芝居にいては御冠船踊りの正しい継承は困難だと、芸術家としての信念をかたくなに堅持していたからである。事実、そのころには、観客の多くが新趣向を要求したという。

観客の反応にこたえて、新奇なものをつくって、客を引き寄せようとする風潮は、経営者側にもあらわになってきたので、それに批判的な見方をしていたという。それに加えて、渡嘉敷守良（後述）

との仲がよくなく、二人の間に感情的なものがあつたのではなからうかともいわれている。

早い時期に芝居を引退した盛重は、筆をはじめ、組踊や古典舞踊と多方面にわたって教授していた。その教授方法も通りいっぺんのやり方ではなく、一種独特であつたという。

それは、筆を前にして、弟子の右に座り、左手は弟子の右ももの上におき、左手で弦をおさえて音を調節する強弱の呼吸を、ももをおさえることによって、体を通してのみこませる、独特な教授法をとった。舞踊の教授も、弟子の一人一人のゆかたをきた背後から腰をつかまえて、腰を入れるという基本姿勢を会得させるのに、何日もかかったという。足運びだけでも、数週間をかけるほどの徹底指導であつたという。

筆でも舞踊でも、指あとも赤く残るくらいしっかりとおさえられるものだから、女弟子の中には、それをいやらしいときらって、やめていったものも多かったという。そういうことで、へんな話をふりまかれたこともあるというが、盛重は異性に対してすこぶる潔癖であり、芸に対しても厳格であつたという。

何事にもきびしく、その上教授法が独特であつたので、弟子は長くつづかず、非常に少なかったという。そのため家計は苦しく、夫人は機織りなどをずつつづけていた。

盛重は金銭面でも潔癖で、無欲であつたという。それらについていくつかのエピソードがあるが紙数の都合で割愛したい。

芸術に対しても、生き方に対してもきびしかった玉城盛重は、沖繩の伝統芸能をいらずに愛して、その後継者養成にのみ一生を終えた人だといわれている。

優の記録」の冒頭に書かれている。

一四歳のころには、身長が五尺一寸程になり、体格的に恵まれていたので、御冠船踊りの花であつた「女踊り」を、嵩原安宏師匠から特訓をうけて出演した。その特訓はきびしいもので、女踊りを稽古した翌日は、股がいたくて便所へ行くにも杖をついて行ったほどであつたという。一八歳のときにはじめて「二歳（男）踊り」の出演を許可されたという。師匠に恵まれたのは玉城盛重と同じで、きびしくしつけられていくうちに彼独特の芸風をうちたてていったのである。玉城盛重が男踊りの第一人者といわれたのに対して、守良は女踊りの第一人者とよばれていたのもそのためである。



渡嘉敷守良

彼は劇壇の大御所だとか、天皇だとか多くの人たちから、天稟の才能も加わって、その芸は他の追随をゆるさなかったという。

ともない、親心があり抱擁力にみちた強引さであつたという。したがって、彼のやり方に対して、それをねのけていくという人は非常に少なかったといわれている。

明治三十四年（一九〇一）、二二歳で弟の守礼をはじめ、真境名由祚（由康の父）や吉元其康等とともに好劇会をつくって、演劇に新機軸を出す心意が高まってきた。そのときに劇団にはじめて十か条の誓文なるものをつくり、それを遵守するように役者の態度を確認しあつた。その中に次のようなものがある。

一 役者は絶対素人の婦人と関係せざることを（ズリハ注II遊女V
はこの限りにあらず）。

一幕の陰から観客席をのぞかざることを。

一 たえず勉強にいそしみ、知識の向上を計ること。

このような規約めいたものは、明治の演劇界にとっては、画期的なものであり、とかくゆるみがちな役者の心をぐっとひきしめさせ、名実ともに人間の豊かさを身につけさせていく方向が考え出されたのは、意義あることであった。役者の総会をもつて、各々に辞令を交付して給料制にして、身のまわりから改革していった。

これからは役者といえども、学問教養がなければ不安定な劇をも演じかねないと考え、朝の八時から午前中は勉強会をもった。それは楽屋の二階で読本を進めたという。

本土の演劇界もそうであったろうが、集合離散の多い劇壇で、守良は最後の最後まで、見立てることなく、地方巡業して失敗しても、「球陽座」と名づける劇団を三度にわたって編成している。

また、伊良波尹吉、鉢嶺喜次、渡嘉敷守良の三人でつくった、伊渡嶺劇団というのも、一時期あって、演劇界のたえまない分裂の中をよく辛抱して通ってきた。その点は、玉城盛重とはぜんぜんちがう生き方で、徹底した劇壇の長老であった。

渡嘉敷守良は座長でありながら、座付きの作家として、数多くの作品を書きあげている。劇団の多い中であって、観客をつねにひきよせてはなさない唯一の方法は、傑作を書きあげ、それを舞台にのせること以外になかった。したがって、狂言・歌劇・史劇等、あらゆるジャンルにわたって、短期間でまとめていかなければ劇団の敗因にもつながるほどの社会であった。

主導的立場にあられる真境名由康（一八八九～）や女形得意芸としてきた親泊興照（一八九七～）、島袋光裕（一八九三～）、宮城能造（一九〇六～）等がいる。

二 音 楽

沖繩の文化史をみていく場合、古典音楽の果たした役割も大きい。今日、三味線音楽の広がりは、沖繩の津々浦々まで行きわたり、どここの家にも三味線を見いだすことができるほどである。それは明治のころまでは、とても考えられないことであったし、大正年間においても大衆化は進んでいなかった。

その一大変革をきたしたのは、昭和十年八月に伊差川世瑞（一八七八～一九三七）と世礼国男（一八九五～一九四九）の二人が、「声楽譜付工工四」上巻を出し、翌十一年に中巻、十二年に下巻、そして四年後の昭和十六年に続巻が出て以来、古典音楽の大衆化が急速になったのである。その第一の功労者が伊差川世瑞であらう。

△ 古典音楽の大衆化に努めた伊差川世瑞▽

伊差川世瑞は明治五年十一月二十八日、那覇市久米村に生まれた。三六歳から桑江良真に弟子入りをして、古典音楽を学んだ。年齢的には晩学のほうであったが、天稟の才能はめきめきと頭角をみせて、八、九年後には弟子養成をはじめたといわれている。

当時、双壁といわれた金武良仁（一八七三～一九三六）が、安富祖流の当流の骨法をそのままうけついで、三味線の最高技法をきわめるのを主眼としていて、金武が「自ら味わい、自ら楽しむ」という、小世界を対象としていたのに対して、野村流はその技芸をできるだけ多くの人たちに開放して、その普及活動に主眼を置いて、多

彼の作品には、歌劇「波上の一夜」「アカマター（三月月）、史劇「今帰仁由来記」「大新城忠勇伝」、総舞踊「長者の大王」がある。他に創作としては、「仲島よしや」、「桃売乙女」「北谷真牛」などがある。幅広い作品を書きあげたのである。

守良の稽古はきびしかったといわれているが、その反面、熱心ではなかったというところもきかされている。彼は筆も立ち、演劇論や型の記録などを残し、役者としてすぐれた一面をもっていた。「沖繩演劇の発祥」、「ある俳優の記録」等があり、活躍した時代の演劇界の裏面をもみることができて、貴重な資料を提供している。

演劇人みずからの記録というのは、沖繩においてははもととも大切にみるべきであり、記録性のとばしい沖繩にあっては重要な資料となっているのである。

玉城盛重と新垣松若の二人が、早く演劇界を去ってしまい、その後を一手にひきうけて終始主導的地位にあって、みずからも舞台に立ってきた、守良の演劇に対する信念の強さと愛着の深さは、他の追隨をゆるさないものである。

沖繩の近代演劇史の双壁であり、その影響のもとに、今日もなお密度の高い演劇が上演され、その独特なカラーを失わずに息づいているということができよう。

* * *

他に、梨園の学者といわれた新垣松若（一八八〇～一九三七）や多くの本格歌劇を書きあげた伊良波伊吉（一八八六～一九五一）、我如古弥栄（一八八一～一九四三）、玉城盛重の甥で若いころから二枚目役者で通ってきた玉城盛義（一八八九～一九七二）、七歳のときに組踊の子役で初舞台をふんでから、今日もなお、沖繩の芸能界で



伊 差 川 世 瑞

くの人たちをひき入れていた。

野村流は終始、大衆運動を前面にうち出すことを主眼としていた。この流派の精神を最大限にアピールしたのが、伊差川世瑞であった。

たといえよう。彼はその目的で、自ら野村流音楽協会を大正末期には創立して、準備を進めていたのである。体格も大きく、声量もまた抜群であった。その声は、金武が繊細で幽玄であったのに対して、素朴で荘重であったといわれている。無技巧で自然詠であったともいえる。金武が神経がこまやかで、すぎのないほどの過敏な性格であったのに対して、伊差川は大らかで、あまりかまわぬたちであった。したがって、弟子への教授も、相手の体の状態をみながら、心ゆくまで親切に指導したという。

大正十年ころには「瑞世クラブ」をつくって野村流の普及にのりだした。そのとき、力になってくれたのが世礼国男であった。二人の力で、「声楽譜付工工四」全四巻であった。しかし、完結するまでは健在でなかった。下巻が出る年の三月には脳溢血で急逝している。

この四巻は、沖繩の古典音楽の世界では画期的な事業で、これまでは絃音だけの楽譜で、声楽譜がないため、個人で三味線の予習、復習をしていくということがきわめて困難であった。この工工四ができるまでは、声楽の音程はもっぱら師匠の直伝にたよる以外になく、いわゆる口伝であった。したがって、師匠の個性が声楽の随所

にあらわれて、それが変容につながらないとも限らなかった。

伊差川の音楽を世礼が採譜していったので、野村流の隆盛は約束されたようなものだった。安富組は独自の芸風をかたくなにまもって、少数精鋭主義をとったのであろうか。絃音の楽譜はあるが、今もって声楽譜が作られていない。今日でも師匠の声楽を弟子が忠実に守って、練習をつづけているのである。

声楽の採譜にあたっては、伊差川が一曲を約一〇回ほどひいて、世礼が譜にとっていたのだが、伊差川が疲労のために音程が狂うと、世礼がそれを指摘して完成したという。その後、伊差川のうたう歌を採譜したものを比較していくと、寸分の狂いもなかったという。

二人の強力な協力によって、はじめて声楽譜付の工工四を出して、三味線の大衆化をはかった功績は芸術文化の普及の評価として、高く位置づけなければならない。

△声楽譜採譜の功労者、世礼国男▽

沖繩の古典音楽は、従来は絃音だけの楽譜であって、歌は各師匠によって伝授されていたのを、昭和十年になって、声楽の譜をつけて統一した奏法を展開させた功労者が世礼国男である。革命的な仕事で、この工工四が完成して以来、野村流は未曾有の発展を遂げるようになった。先の伊差川世瑞の声楽を、世礼が実際に採譜していったのである。

世礼は明治三十年七月二十日に、与那城村平安座に生まれた。県立第一中学校（現在の首里高等学校）を卒業後、小学校教員検定試験に合格して、小学校教員になり、後に文検に合格して、県立第二中学校（現在的那覇高等学校）教諭になり、戦後は知念高等学校、

コザ高等学校の校長を歴任して、昭和二十四年に病没している。

詩人であり、沖繩の文学、とくに歌謡の研究者でもあった。詩集に「阿旦のかげ」（大正十年）があり、論文には、「琉球音楽歌謡史論」（昭和十五年）、「郷土音楽の往く道」（昭和十六年）、「久米島おもひに就いて」（昭和十七年）などがあった。歌謡史研究の上で忘れることのできない人である。



世礼国男

三味線は昭和八年から伊差川についてならった。そのときに気付いたのが、各師匠によってうたい方が少しずつ違うのではないかと、早目に手をとらなければと

考えて、声楽譜採譜にとりかかったのである。

世礼はきびしい性格で、何事にもするどく目をそそいで、絶対に迎合することがなかったという。

中学校の教師をしていて、その面があらゆるところへ顔を出して、同僚をはじめ、生徒たちをこまらせ、しりごみさせたのである。

芸術家としての孤高な性格と、反面、科学者としてのするどさの両面をもって、教育に研究に従事したといわれている。

三 美 術

薩摩置県以前の沖繩には、絵画・彫刻などの専門家が数多く輩出している。その人たちの中には王府に仕えて、その道の専門をきわめるとともに、独特な作品を残した人たちがいる。王国時代の絵画を

みると、中国系（宋、元、明時代）のものと、和風（鎌倉、室町の絵画、あるいは下って江戸時代の浮世絵の影響を受けたもの）のものの二つの流れに大別されるといわれている。

△沖繩近代の美術家▽

明治以降の画家としてまずあげられる人は、渡嘉敷唯選（号は衣川。一八八六～一九二七）である。那覇市若狭町に生まれて、県立第一中学校を中退、大正三年に沖繩新報記者、大正十年から昭和二年まで、県立第三高等女学校で美術教師としてつとめていた。しかし、制作活動はほとんどわかっていない。作風も定かでない。その道の人にくくと、日本画を学んでいたのであろうという。

渡嘉敷より先に、王国時代に生まれて、昭和初期まで存命であった長嶺崇泰（号は華山。一八五二～一九三二）がいる。小波蔵安章に師事したといわれ、その制作活動は明治十九年（一八八六）に「雪中山水」を絵画展覧会に出品しているが、この会は東京ではなくて沖繩県内でのものであろうといわれている。他に明治二十三年に「秋景山水」を東京の第三回勸業博覧会に出品。昭和四年に「芭蕉の図」を書いている。「芭蕉の図」は戦禍をまぬがれて、現在、県立博物館に残っている。その絵には「華国」の署名の上に「七十ハ翁」と記されているので、晩年の作品ということになる。

明治初期から昭和初期までの長期にかけて、制作活動を行ってきた画家に、比嘉盛清（号は華山。一八六八～一九三九）がいる。那覇市若狭町に生まれている。後年、若狭町から多くの画家が輩出したが、この比嘉の影響が大きかったのではないだろうか。佐渡山安豊に師事し、明治二十三年、同三十九年、同四十年の三回にわたって美術協会展へ出品し、明治四十三年、同四十四年の第三回・第四回

丹青協会展へ出品して、それぞれ入賞している。現在、県立博物館には「関帝王」という絵がある。

創作活動よりもむしろ、美術教育者として後継者の育成に力を入れた人に比嘉景常（一八九二～一九四一）がいる。明治二十五年に首里山川町に生まれ、沖繩師範、東京高師を卒業して、大正十一年に県立第二中学校（現在的那覇高等学校）の図画の教師となり、沖繩の美術界を背負って立つ後輩を養成した。それは名渡山愛順（一九〇六～一九七〇）、兼城兼章（一九一〇～一九二七）、山元恵一（一九一三～）、漢那憲正、益田信行、渡辺章、安谷屋正義（一九二一～一九六七）、大嶺政寛（一九一〇～）、永丘智行（一九〇四～一九六九）等、その数は多い。

第二中学校に赴任して、前任者西銘生楽がつくった「樹縁会」を引きついで二十一年間、若い美術家の養成に徹した。彼には二中の教師の頃、久米島に旅行した時の記録、「久米島紀行」がある。

△平和祈念像に全魂をうちこむ山田真山▽

大正十三年（一九二四）、明治神宮に壁画を描く機会を与えられて、那覇の屋良座に、船と人の群れを図柄で、「琉球藩設置」（図説を描いた、沖繩の天才的な画家に山田真山（一八八五～））がいる。明治十八年十二月二十七日に、那覇市壺屋に生まれ、明治三十九年東京の美術学校に入学、彫刻科・日本画科の各科に転科修業をしている。

明治四十三年清国、北京芸徒学堂に彫刻科、図案科の教授として赴任、同四十四年帰朝。その後、日本画を小堀軔音、彫刻を高村光雲、工芸を峰岸宝哉に帳事した。

山田真山は本名を渡嘉敷兼慎といい、童名を真山戸と称していた

ことから、それをいかして雅号を「真山」と名づけたという。父は渡嘉敷兼礼といひ、「科(こう)」を合格したほどの、学者としてよく知られた人であった。真山が七歳のとき、家族ぐるみで八重山へ移り住んだが、まもなくマリアのため父を失って、苦しい生活を余儀なくされた。後年、山田泰雲にその人柄と才能を買われて養子となった。



山 真山 真山の制作活動は、彫刻・日本画と幅広く、作品の制作は美術学校のころから始まり、今日まで絶え間なく続いているという、実にその生命力が長い。その作品の一部を紹介すると、次のとおりである。(「沖縄県史」6、文化2、「第四部 第五章 美術(玉那覇正吉)」参照)

日本画

- 1 降魔之図 (東京府立林間社主催美術展)
- 2 琉球藩設置 (明治神宮聖徳記念絵画館壁画)
- 3 結城会戦 (第八回文部省美術展覧会出品)
- 4 山路之図 (第二回文部省美術展覧会出品)
- 5 達磨之図 (日支展覧会出品)
- 彫刻
- 1 林和靖像 (東京彫工会出品)
- 2 聖観音像 (農商務省主催展覧会出品)
- 3 黄初平像 (東京彫工会出品)
- 4 審判の来る日 (第一回帝国美術展覧会出品)

5 自覚像(第二回帝国美術展覧会出品)

また、昭和三十二年(一九五七)以来、「平和祈念像」の建立を手がけて、今日その完成をみるころまで来ているが、この作品は彼の終生の大作になるであろう。玉那覇正吉は、祈念像の形式について、次のように書いている。

仏教像の観音の形式をとり、蓮台、蓮座も配されているが、その顔面の表現は、仏像の顔面の形式をそのまま踏襲したというより、むしろ人間そのものが、苦悩のあけく到達して得た、美しさを感ぜさせる顔面である。

山田真山の全精力・全魂をうちこんでの作品で、その建立が待たれている。

四 書 道

△独自の書風を樹立した謝花雲石▽

昨年(昭和五十年)二月下旬に亡くなられた謝花雲石は、カタカシラ(敬馨。成人男子の髪型)を結った、最後の男子であり、九二歳という長寿を全うした、沖縄書道界の先駆者であった。沖縄における明治の三筆は謝花雲石、尚順(一八七三—一九四五)、山城正忠(一八八四—一九四九)だといふ。

雲石は明治十六年(一八八三)、那覇市西村に生まれた。沖縄中学を三年で中退し、明治四十四年(一九一)五月、朝鮮に渡った。そこで海岡(金圭鎮)につき、書道の源流の筆法を学んだ。朝鮮に渡ったわけは、島袋石扇(光裕。一八九三—)の勧めによる。島袋石扇は、尚順(一八七三—一九四五)、山城正忠(一八八四—一九四九)の三筆の一人、尚順から厳重な忠告をうけた。彼ははじめから、本土の書道界の結社とはまったくかわりなく、彼独自の書風をもって、昨年二月に亡くなるまで、絶えず勉強してきた。

出かけたのである。雲石は、海岡(金圭鎮)の塾で代稽古をするほどの力にまでなった。また、そのころ、京都の四条派の師匠に絵も習っている。

約八年間滞滞して、書道の真髓まで教授を得て、大正八年に沖縄に帰った。書家にふさわしく、一徹なところがあると同時に、物に動じないという気風がみなぎっていた。高弟に島袋石扇(光裕。一八九三—)、山城耕雲(正利)等があり、山城は師より先に逝き、雲石亡き後は島袋石扇が主導的立場で活躍している。



謝 花 雲 石 謝花雲石のことばとして、大城立裕が聴取したものに、「書は肝(心)で書け。書は健康の基。」「天地自然と調和せよ。」「書には首尾というものは無い。地球とともにケリクルビ(転々)せよ。」「自由に、しばれずに書くこと。懸腕直筆はいけない。自然にからだも自由に。」というのがある。弟子に教えるときにも、常に口にしていたのである。これらは、彼が書道に従事して、実際につかみとった、書道の真理だといつてよいであろう。

書道に志したのは二九歳ころであるが、幼ないころから好きであった。就職で朝鮮に渡って、京城の町を歩いているときに、一軒の書道研究所をみつけた。興味にかられてはいつてみると、その教授ぶりが、沖縄で学んできた筆法とまったくちがう。ぜひともここで修業して帰らなければと思つて決意し、さっそく弟子入りをした。

それが終生の師となった海岡(金圭鎮)であった。

雲石によれば、沖縄には古来、程順則・鄭家訓・鄭元偉、それに歴代国王の尚敬王・尚穆王・尚武王などの書家は多かったが、その伝統はほんものではない、本土も同じだ、と強調している。書道の伝統を中国に求めたのであろうか。

彼が終生、座右の書としていた王羲之の「書法源流」は、彼に多大な影響を与えた。

戦前、「日本に書道なし」と発言して多くの人たちから非難を買ったという。沖縄の三筆の一人、尚順からも厳重な忠告をうけた。

彼ははじめから、本土の書道界の結社とはまったくかわりなく、彼独自の書風をもって、昨年二月に亡くなるまで、絶えず勉強してきた。

彼は天寿を全うするまで、変わらぬ信念のもとに自由奔放に書道を展開させた。思うがままに生き、思うがままに書風を築きあげた人として、今後その書風は生きつづけるものと思われる。

参考文献

- 1 「沖縄の百年」第一巻人物篇(新里金福・大城立裕著、琉球新報編、大平出版社刊)
- 2 「沖縄県史」6、文化2

(沖縄県教育委員会文化課専門員)